ニューズムック GO OUT Livin' Vol.15 2021年 3月 11日発行

アウトドアもインドアも大好きな、30人のおしゃれな部屋と収納術。

GO OUT Livin'

Vol.15

濃密、インドア時間。

おしゃれで楽しい、リラックス系お部屋スタイル。

GO OUT Livin' Vol.15

Contents

006 おしゃれで楽しい、リラックス系お部屋スタイル。

濃密、インドア時間。

01 昭和家屋とヴィンテージ家具で、懐かしくも落ち着く部屋づくり。／神奈川県三浦郡
02 アウトドアとライフスタイルを繋げる、北欧式ログハウスの暮らし。／千葉県
03 ホワイト×ウッドのクリーンな空間で、植物と共に暮らす。／福島県郡山市
04 夫妻の異なる趣味が見事に溶け合う、“グリーンがハブ”の方程式。／大阪府堺市
05 輸入住宅こその造りと作家のセンスが溶け合う、ひと癖ある心地よさ。／東京都世田谷区
06 居心地第一の住まいに野外のムードをもたらす、グリーンの遊び心。／千葉県
07 圧倒的な物量が目を引く、ワークスペースを兼ねた生活空間。／東京都世田谷区
08 ほぼ全てのエリアが見渡せる、暖かな家族の空間。／山梨県北杜市
09 海を臨む住まいで築く、コミュニティに根ざした暮らし。／神奈川県鎌倉市
10 インドアも野外の延長線。理想の生活を叶えてくれた、地元·山形の暮らし。／山形県山形市
11 独自の選球眼が光る、ミリタリー×インダストリアルな部屋。／神奈川県川崎市
12 アウトドアと日常、仲間と家とが自然に繋がる理想の空間。／北海道旭川市
13 敬愛するブランドに囲まれた、アウトドア好きのひとり暮らし。／大阪府大阪市
14 開放感のある広々とした空間に、古い雑貨たちが温もりを加える。／北海道札幌市
15 キャンプギアとインダストリアルファニチャーを、巧みにミックス。／埼玉県所沢市
16 屋外も屋内も楽しい、葉山の小高い丘に建つ“スケルトン”な家。／神奈川県三浦郡
17 審美眼が光る、テイストに縛られないインテリア。／東京都世田谷区
18 機能的でありながら、自然を楽しむ遊び心のある暮らし。／滋賀県大津市
19 「賃貸に見せない暮らし」をテーマに、趣味と暮らしが静かに同居する。／東京都杉並区
20 名建築のエッセンスと多様なテイストが生む、唯一無二のマイホーム。／神奈川県鎌倉市
21 D.I.Y. で作り上げていく、家族団欒の広いリビング。／東京都武蔵野市
22 アウトドアを日常に取り入れる、外遊び好きならではの住まい。／神奈川県川崎市
23 趣味に打ち込む時間の豊かさを増幅させる、メリハリある家づくり。／埼玉県川口市
24 長年かけて狙いを定めたロケーションを、新たな住まいに。／東京都目黒区
25 木の壁と観葉植物、薪ストーブが織りなすナチュラルな住まい。／北海道札幌市
26 アイデアが生まれるたびに表情を新たにしていく、“家は僕の実験場”。／神奈川県川崎市
27 家族の生活に溶け込み、趣味さえも豊かにする“暮らし第一”のギア選び。／石川県金沢市
28 雄大な夜空と八ヶ岳を望む、2 階のリビングがベストポジション。／長野県諏訪郡
29 フルリフォーム＋ D.I.Y. で、家族で過ごす時間をより豊かに。／神奈川県三浦郡
30 仕事で培った技術とアイデアが随所に見られる、D.I.Y.ルーム。／神奈川県川崎市

103 好きなモノをキレイに片付けて、楽しく暮らす。

おしゃれな人たちの、収納術。

おしゃれで楽しい、リラックス系お部屋スタイル。

濃密、インドア時間。

テレワークの推進なども相まって、インドア時間が増えた人も多いはず。でも趣味人は家にいる時間が増えるほど、道具が増えてしまう問題に直面しますよね。料理にこだわったら調理道具や器が増え、コーヒーにハマるとコーヒーギアが増える。もちろん、使うアイテムはこだわり満載のコレクションたち。それ以外にもこれまで集めてきた外遊びの道具や洋服、本といった好きなモノで溢れた室内。選りすぐりのお気に入りたちに、捨てていいものなんてひとつもないはず。そんなモノでいっぱいの家の中、どうしたらおしゃれに暮らせるのでしょうか。今回訪れた合計30名の趣味人も、好きなモノに囲まれながら楽しくインドア時間を満喫していました。おしゃれで寛げる空間のヒントを、30組の家から探ってみてください。

01

PROFILE

ファッションプロダクト
コンサルタント
田口 Jackie 岳佳 さん

SPEC

居住地域	：	神奈川県三浦郡
居住形態	：	一戸建て（賃貸）
間取り	：	4SLDK
居住年数	：	5ヵ月
築年数	：	50年

昭和家屋とヴィンテージ家具で、懐かしくも落ち着く部屋づくり。

美しい海と落ち着いた雰囲気で都心からの移住者も多い葉山エリア。ここで紹介する田口さんも、最近引っ越してきたばかりだ。「サーフィンをやっているので藤沢市にずっと住んでいましたけど、家での時間を大事にするようになったし、隠居気分に浸りたくなって葉山で物件を探し始めたんですよ。でも、人気の海沿いではなく、海岸から少し離れた山側がよかった。それで、たまたまこのお家と出会いました。内見に来てみたら、ご近所さんが気さくに話しかけてくれて、それもよかったんですよ」。朝、ゴミを出しに行けば、ご近所さんと5分は話し込んでしまうそうだが、それもまた安心感を覚えるものだ。

選んだ物件は、築50年の一戸建て。「服も音楽も家具も、50～60年代が好きなんです」と言うように、ほとんどの家具もまた、その年代でまとめている。ヴィンテージショップやフリーマーケットで購入したものが多く、新品の家具を買うことはほとんどないらしい。そして、棚などはD.I.Y.でちょうどいい大きさに揃えているそう。

部屋のイメージソースとなっているのは、映画からの影響が大きいとも話す。「ほぼ毎日、いろんな年代のアメリカの映画を観ているんですよ。気になる洋服やインテリアがあれば画像に残していて、音楽もチェックしています。だから、コレっていう具体的に参考にした作品は分かんないですけど、なんとなく好きな雰囲気で部屋を作りました」。昭和レトロな家屋とミッドセンチュリー家具を融合するセンスは一朝一夕で身につくものではないが、アンティークや古いモノが好きならこの住まいに憧れるはず。

日当たりが気持ちいいリビングには、たくさんの植物が並び、エネルギッシュな印象を与える。家具はウッドを基調にしたアンティークのものがほとんどで、扉の枠などと色の相性がいい。「家具は買い換える頻度が低いので、いいものをメンテナンスして長く使いたいです」。

01.愛犬のヒースがよくくつろいでいる和室。テレビボードは、以前使用していたものをD.I.Y.でアップサイクルした。「最近はドライを買わないけど、持っていたものを捨てたくないので、テレビの裏に置いています」。　02.友人が制作したイラストや写真を飾り、部屋にアートの彩りをプラス。随所に配されている大型の観葉植物も、部屋のアクセントになっている。照明はフリーマーケットで購入したもの。　03.こちらにも、前に飾っていたドライを捨てることなく配置し、間接照明でムーディに演出した。モノを大事にする愛情が伝わってくる。　04.食器棚は'60年代のデンマーク製。花が好きな田口さんは、ここに花器を飾っている。「せっかく買ったお花と合わないのが嫌だから、気に入ったら買うようにしています」。　05.衣装部屋には大型のラックを置き、すべての洋服をハンギング。帽子を入れているのは、ヴィンテージのガーデニング台。06.横浜のヴィンテージショップ『ザ・ヌーン』で購入したソファは'60年代のもので、修理しながら愛用中。ランプシェードは、このカラーリングと合わせている。　07.裁断したりパターンを引いたりする作業部屋。ハンドメイドで洋服を作る田口さんにとっての仕事場だ。余っていた木材で棚をD.I.Y.した。　08.〈アラジン〉のストーブは'70年代のもの。「最近エアコンを換えましたが、こっちのほうが暖かいです」。　09.アンティークショップで見つけたメイクアップチェア。ほかにも作業部屋と玄関に配置している。

06 01
07 04 02
08
09 05 03

13	10
	11
14	12

10.毎週ホテルなどでDJをしていて、趣味が仕事にもなっている田口さん。「ロカビリーやブルースなど、アメリカの'50 ～'60年代の音楽が好きです。ちなみにヒース（愛犬）の名前の由来は、イギリスのDJミキサーブランド〈アレン&ヒース〉から。縁があればもう一匹迎えて、アレンと名付けたいです」。ハンバーガーのイラストは、友人のアーティスト、エリーさんによる作品。　11.広めの玄関には、北欧アンティークのドレッサーのサイドテーブルが鎮座。ガラスの天板が割れてしまったものを譲ってもらったそうだ。その奥に見える昭和レトロな磨りガラスの窓がオシャレ。メイクアップチェアは、バイクのヘルメット置き場として活用している。　12.縁側に仕事道具のミシンやアイロン台を置いて、こちらで洋服を縫製する。太陽の光を浴びながら作業できる環境は贅沢で羨ましい。ここにベンチを設置したいとのこと。　13.衣装部屋には所有するすべてのシューズも置いて、玄関スペースをすっきりとさせた。「端材を積み上げて、シューズラックを作りました。スニーカーは、昔からデザインの変わらない〈コンバース〉と〈プロケッツ〉ばかり持っています」。そして、サーフボードのラックもD.I.Y.によるもの。　14.ワゴンテーブルとD.I.Y.したボックスに天板を載せて、DJブースに。「安く手に入った天板だけを持っていたので、それに合わせて作りました」。植物のポットは、テラコッタ鉢にアクリル絵の具とヤスリでラインを入れている。

02

PROFILE

アウトドアクリエイター

YURIEさん
SHUNSUKEさん

SPEC

居住地域	：	千葉県
居住形態	：	一戸建て（賃貸）
間取り	：	2LDK＋屋根裏部屋
居住年数	：	2ヵ月
築年数	：	30年

ログハウスの雰囲気を活かしながらも、既存のフローリングの上にモルタル風の塩ビタイルを敷き、アーバンな雰囲気も感じられるようにしたというリビング。メインで使っている照明は、YURIEさんが以前から取り入れたいと考えていた〈イサムノグチ〉のアカリ。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Mitsuto Matsunaga

アウトドアとライフスタイルを繋げる、北欧式ログハウスの暮らし。

バンネットを改造した愛車サンシー号でのバンライフや、キャンプを中心としたアウトドアの魅力を独自の視点で発信するYURIEさん。パートナーのSHUNSUKEさんと共に昨年都心を離れ、自然に囲まれたこの地に居を移した。ライフスタイル、そして仕事にアウトドアが直結するふたりにとって、ここでの暮らしは最高の住環境となっているようだ。

「以前はベランダに出てもコンクリートのビルしか見えなくて。でもここでは朝起きたら、まずドアを開けて深呼吸。朝の気持ちよさが変わりましたね。一番近くのキャンプ場はコンビニより近いぐらい。外遊びがより身近になりました」。

住まいはスウェーデン式のログハウスで、間取りは南に面したリビングの他に2部屋と、さらにリラックス兼ワークスペースとして使う屋根裏部屋も備えた造り。なかでも「一番テンションがあがった場所」と教えてくれたのがギア部屋だ。これまではギアを複数の場所に置いていたためどこに何があるか分からなくなっていたが、ひとつの部屋まるごとを収納スペースに。ひと目で場所や物量を把握できるようになった。インテリアはスウェーデンやフィンランドなど北欧の家具を取り入れながらお気に入りのものをセレクト。通常のログハウスとは一線を画す洗練された印象となっている。

こちらに住んで数ヵ月だが「コストは東京の半分、家の面積は2倍以上になりました」とすでに大満足の様子。新たな環境で発信されるYURIEさんの今後の活動からますます目が離せなくなりそうだ。

数々のギアをひと部屋に集結させ収納。どんなギアがあるかがひと目で分かるようになり、キャンプに行く際にも持ち出したいギアをピックアップしやすくなった。棚はガチャレールで設置しているが、この棚を含め家のD.I.Y.はすべてYURIEさんが行ったのだそう。

01.入居前ダークブラウンだったというキッチンはYURIEさんが白くペイント。あえてラフに塗ることでログハウスの雰囲気ともマッチさせている。ラックなども取り付け使い勝手を向上させた。〈ロッジ〉、〈スノーピーク〉などの調理器具はキャンプのみならず普段の料理でも活用。 02.屋根裏部屋のソファには、ヴィンテージのキリムやラグをリメイクしたさまざまなデザインのクッションを。ここでくつろぎながらプロジェクターで映画を見るのが至福のひと時だとか。 03.SHUNSUKEさんセレクトのフィンランド製のテーブルに格子窓の影が映りこむ。「光がちょうど指すのでここで朝食を食べたいなと思って」。 04.出窓の前には北欧を代表する家具デザイナーのハンス・ウェグナーのイスを。「もともと好きなデザイナーですが、このログハウスにデザインが合うなと思い購入しました。ヴィンテージのオーク材の色合いもいいんですよね」。 05.02のソファの向かいには、建築資材用のブロックであるピンコロと板で本棚を設置。カーテンコードで吊るした手前のファブリックはプロジェクターのスクリーンとして使用。 06.07.'70年代のカルチャーが好きだというYURIEさんらしく、ギア部屋には〈ケルティ〉などのバックパックも並ぶ。06の白いイスは韓国発ブランド〈ミニライフ〉のMLサファリチェア。 08.庭に面したデッキに置くテーブルとベンチも足場板を使用して自作したもの。

06	05	01
		02
07		03
08		04

12	09
	10
13	11

09.屋根裏部屋に続く階段のライトは、西洋民芸をはじめ世界各地の民芸品や雑貨を扱う『グランピエ』で購入。こちらはインド製で、ろうそくを入れて使用されていたものだそう。　10.玄関のシューズラックもブロックと板を利用。奥のスツールは、スイスの建築家でありデザイナーのピエール・ジャンヌレがインド・チャンディーガルの都市計画を担当した際にデザインした貴重な一脚。　11.幻想的な色使いで描かれた湖の絵は、20世紀のアメリカを代表する画家、ジョージア・オキーフ。「この人の生き方がすごく好きでいつかほしいと思っていた」とSHUNSUKEさん。手前のプラントハンガーは〈イケア〉で入手。　12.屋根裏部屋の一角にはL字型のソファをD.I.Y.。本来は床板などに使用されるカフェ板を底に敷き、その上にマットを置いている。カフェ板はサイズをあえて広めに取り、テーブルとしても使えるように設計している。わずか1日で製作したというから驚きだ。　13.北欧製の家具を中心にまとめられたリビング。曲線の美しいテーブルは北欧家具を扱う『ハルタ』で購入。ベンチソファはデンマーク出身の家具デザイナー、ポール・M・ヴォルターのもの。『グランピエ』で購入したラグは、店舗で展示されていた際に壁にかけられていたのにヒント得て、丸棒とロープでタペストリー風にディスプレイ。北欧家具を基調に、程よく民族調のテイストを取り入れまとめあげるセンスが光る。

03

PROFILE

フォトグラファー
柳沼 亘さん
千春さん

SPEC

居住地域	：	福島県郡山市
居住形態	：	マンション（賃貸）
間取り	：	2LDK
居住年数	：	5ヵ月
築年数	：	約30年

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Showgo Komatsu

ホワイト×ウッドのクリーンな空間で、植物と共に暮らす。

フォトウェディングや家族写真など、幸せな瞬間を切り取るフォトチーム、カプレトウスタッフ（Instagram：@capretto.stuff）として活動する柳沼さん夫妻。郡山を拠点にしながら、県外へ出張の際には、キャンプをしながら向かうこともあるという大のアウトドア好きだ。そんな2人が、昨年11月に引っ越してきたばかりだという新居がこちら。「ここに決めた一番の理由は、日当たりのよさ。特に朝日が差し込んで気持ちいいですし、見晴らしがいいのでいつでも明るいです」。そう話すとおり、自然光が部屋中を照らし、健康的で穏やかな気持ちにしてくれる。そして、気に入っているポイントがもうひとつ。「ベランダが結構広いんですよ。暖かい季節になったらベランダにテーブルとイスを出して、ご飯を食べたいと思っています。あと、ここで植物を育てたいですね！」。すでに部屋の中にはたくさんの植物を配していて、日当たりのよさから元気に育っているようだ。「私たち自然が大好きで、キャンプも登山もするから、家の中でも植物が目に入るようにしたかったんです」。

そんなグリーンを豊富にレイアウトしたインテリアは、余計な色味がなく、ホワイトとウッドを中心に構成されたナチュラルな印象。「部屋は、海外のインスタグラムのアカウントを参考にしています。賃貸でもできるアイデアを取り入れました。あとは、アンティーク家具が好きなので、新品を買うとしても、雰囲気の合うものを選ぶようにしています。壁にまだスペースが空いているから、自分たちが撮った、まだ現像していない写真を飾りたいです」。

ホワイト×ウッドを軸にした、クリーンな雰囲気が漂うリビングダイニング。大型の観葉植物を点在させたことで、自然の中にいるような感覚に浸ることができる。そして、フラワーベースやクッションなどで色味のアクセントを。アウトドアギアはすべて寝室に収納している。

01.部屋のどこを見ても、植物が目に映る。テーブル上にあるフォルムが美しいランプは、沖縄にあるアメリカのアンティークショップから取り寄せたもの。額装されているのは、雑誌の付録だった〈ザ・ノース・フェイス〉のポスター。　02.ロッキングチェアは革張りで、リサイクルショップで見つけた掘り出しもの。日向ぼっこをしながら揺られる極上の時間を提供する。飾っていたユーカリの木をドライにするためペンダントライトに吊るしているのも秀逸。部屋の中央にあることで、グリーンの主張が一層増した。03.〈ポーラー〉の"着る寝袋"として人気のナップサックは防寒着として使用しているため、玄関に配置。額装されているのは、リー イズミダさんの作品。　04.天井まで届くほど大きな植物は存在感抜群。大ぶりで丸い葉っぱが、柔和なエッセンスを部屋に加味する。　05.那須塩原にある家具店『ルームス』で購入した、ダイニングテーブルとチェア。部屋にスパイスを与えるフラワーベースは、近所の花屋で購入した。　06.グラスを入れているカゴは〈イケア〉のもの。本体とフタだったが、両方とも収納として使用する。「料理が好きなので、お皿も集めています」。　07.テーブルの脚下にすのこを渡し、バスケットをセットした小物収納。　08.換気扇にもリー イズミダさんのポストカードを飾る。　09.リビングの隣にある作業部屋。ここが自宅のワークスペースに。独特な形状の多肉植物や生花を前に、癒されながら仕事ができそうだ。

06	01	
07	04	02
08		
09	05	03

13 10 11 14 12

10.清潔感溢れるホワイトのソファやクッションは〈イケア〉で購入。刺しゅうで施されているクッションはデザイナーとのコラボレーション作で、もちろん自然モチーフのものをチョイスしている。横に飾っているアートもリー イズミダさんによる作品。百合の花が部屋のテイストと見事にマッチ。 11.テレビボードも『ルームス』で購入したアンティーク品。換気扇に飾っているリー イズミダさんのシリーズ作品をこちらにもディスプレイ。同一のアーティストの作品を各所に飾ることで、部屋全体にまとまり感を生んでいるのは参考にしたい。 12.海外のインスタグラムを参考にして作ったパレットの小上がりは、D.I.Y.で作成。ここは仕事をしたり本を読んだりするスペース。臼を製造するご主人の実家で作ってもらったというテーブルがかわいらしい。ライトはサンフランシスコのマーケットで購入したアンティーク。〈シーシー〉の一輪挿しも、小ぶりながらにしっかりと主張している。 13.設置している時計は〈ダルトン〉のもの。「壁にネジを打って固定しています。YouTubeに原状回復のやり方を紹介する動画が上がっているから、真似すればなんとかなるかなって思いまして、賃貸だけど穴を開けちゃいました（笑）」。 14.作業部屋にも夫婦の大好きなリー イズミダさんの作品と、植物が描かれたタペストリーを飾っている。ディスプレイするアートも、自然に関連したものだけに徹底することで、部屋のテイストが確固たるものになった。

04

PROFILE

公務員
吉川靖浩 さん

フローリスト
理恵 さん

SPEC

居住地域 ： 大阪府堺市
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 3LDK
居住年数 ： 1年6ヵ月
築年数 ： 1年6ヵ月

【取材協力】
LIFE LABEL
https://lifelabel.jp/

理恵さんのこだわりが詰まったキッチンも、カウンターのスツールは靖浩さんがセレクト。『PFS』で購入したアメリカの工業用スツールとあってインダストリアルなテイストだが、やはり隣に添えられたアイビーとサンスベリアが、その無骨さを引き算している。

夫妻の異なる趣味が見事に溶け合う、“グリーンがハブ”の方程式。

自室を見れば一目瞭然。〈シュプリーム〉のチェアや〈ヴァンズ〉のクッションが物語るとおり、靖浩さんは横ノリ好き。それが一転、LDKは壁に立て掛けられたサーフボードやスケボーデッキさえなければ、家主が横ノリ好きとは気づかないはずだ。

夫妻が暮らすのはゼロキューブマリブ。アメリカ西海岸のテイストを得意とする〈カリフォルニア工務店〉が監修を手掛けている。1階と2階の両方にウッドデッキを備え、日の当たるリビングは吹き抜け。ふたりが家を購入したのも、この開放感に惹かれてのことだが、LDKに漂う心地よさの理由がもうひとつ。「妻と僕は趣味がバラバラ。それでも今の家に引っ越して以降、一緒に過ごす時間が増えたんです」。横ノリ系のアクティビティに加え、ギターにもご執心の靖浩さんの趣味は、いかにも男前。一方、妻の理恵さんは料理や陶器収集に凝り、フローリストという職業柄、生花やドライフラワーのアレンジメントもお手の物だ。LDKの随所から夫妻の趣味が見て取れるが、異なるテイストが見事に調和。その訳を尋ねると、夫妻は「共通の趣味であるグリーンのおかげかもしれません」と口を揃える。

特に植物に詳しい理恵さんは、こう分析。「例えば、キッチンカウンターに立て掛けたスケボーデッキ。その側にツタが柔らかに流れるアイビーやしなやかなシルエットのサンスベリアを添えるだけで、デッキの男っぽさが引き算されるんです」。そう、生き生きとしたグリーンが夫妻の異なる趣味をつなぐハブとなり、心地いい空間をつくり出しているのだ。

靖浩さんの趣味が一目瞭然の自室。横ノリ系のアクティビティやギターのみならず、最近はキャンプにも興味津々。その証が〈ステューシーリビンジェネラルストア〉別注の〈カーミットチェア〉に、〈ビューティ&ユース〉と〈コールマン〉のコラボによるベンチ。

01.ヘリンボーンの壁とマリンランプはゼロキューブ マリブの標準仕様。生き生きと枝葉を伸ばすグリーンにも、壁に立て掛けられたサーフボードにもよく似合う。ちなみにウッドを基調とした部屋に映えるブルーのソファは『アクメ ファニチャー』。部屋に漂うリラックス感を際立たせている。　02.生活感がにじみやすいキッチンも吉川邸はハイセンス。ホワイトのサブウェイタイルはナチュラルな印象だが、そこを引き締めているのが深いブラウンの食器棚。インダストリアルなスツールの印象も相まって、西海岸というより、ブルックリンを彷彿とさせるテイストに。　03.靖浩さんはエイジングされた趣の家具を好み、こちらのサイドボードは『アクメ ファニチャー』のオリジナル。その上にレイアウトされた〈トーレンス〉のターンテーブルは1983年製、隣の〈マランツ〉のアンプも30年ほど前に製造されたものだそう。04.理恵さん曰く「キッチンは、この食器棚を軸にインテリアを組んでいきました」というのがこちら。靖浩さんと同様、理恵さんもヴィンテージ調の家具に目がなく、食器棚は『ジャーナルスタンダード ファニチャー』のオリジナルだ。　05.3つ並んだサーフボードは〈チャネルアイランズ〉と〈パイゼル〉。隣には理恵さんの趣味であるドライフラワーが飾られ、その可憐さが横ノリ系ギアの男っぽさを引き算している。ちなみにボードの手前に見えるアコースティックギターは〈マーティン〉製。

04	01
	02
05	03

11	06	
12	09	07
13	10	08

06.靖浩さんの自室にもサンスベリアが飾られ、鉢カバーは〈プエブコ〉。ギターも横ノリ系のアパレルグッズも、自身の趣味を詰め込んだ空間に。　07.ラックに飾られているアートとボックスは〈ステューシーリビンジェネラルストア〉。ランタンは同ブランドによる〈ペトロマックス〉の別注モデルだ。　08.クッションはスケーターにはお馴染みの〈FTC〉、スツールは同ブランドと〈メイドバイセブン〉のコラボモデル。後ろに飾られたアートは、やはり〈ステューシーリビンジェネラルストア〉。09.コーヒー好きでもある靖浩さん。エスプレッソマシンもグラインダーも〈デロンギ〉だが、コーヒーギアを収納しているのは〈プエブコ〉のスチールケース。　10.理恵さんの手作りによるドライフラワーは花瓶へ。テイストをあえて統一しない花瓶のセレクトにより、夫妻の趣味がミックスされた空間により映える。　11.こちらはフローリストである理恵さんの仕事部屋。ブックシェルフにはガラス瓶に詰まったプリザーブドフラワーが並び、そのシェルフも、ソファとテーブルも〈カリモク〉だ。　12.こちらは〈カリモク〉のロビーチェア。ギターの隣に見える植物は、その姿から“ミドリサンゴ”とも呼ばれるミルクブッシュ。　13.レコード収納として活用中のトランクは〈ステューシーリビンジェネラルストア〉による〈ライノ トランク〉の別注モデル。上に飾られているのは左がポニーテール、右がアジアンタムだそう。

PROFILE

St. Heavogon Studioディレクター／
ステンドグラス作家
谷和レオさん

SPEC

居住地域 ： 東京都世田谷区
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 4LDK＋ガレージ
居住年数 ： 5年
築年数 ： 20年

輸入住宅こその造りと作家のセンスが溶け合う、ひと癖ある心地よさ。

谷和さんはステンドグラス作家として活動し、その拠点は自宅。ガレージをアトリエに改修し、家全体をスタジオとして貸し出しもする。この暮らし方のルーツはアメリカ西海岸・ポートランドのライフスタイル。「1階に商店、2階に事務所、3階に居住スペースというように、仕事と生活に隔たりがないんです」という。

一方、かつて谷和さんが暮らしていたのは湘南エリア。サーフィン好きの谷和さんは当初、都内への引っ越しに懐疑的だったが、この物件との出合いが迷いを打ち消した。ポートランドのライフスタイルを可能にするガレージの存在のみならず、LDKの窓から見える裏山が葉山の景色を彷彿とさせ、さらに「この家は輸入住宅のモデルハウスだったようです。サッシがなく、窓枠すべてが木製だったり、階段が廊下ではなく居住スペースから伸びていたり」という造り。これらを決め手に家を購入し、家具の多くはD.I.Y.だ。ツリーハウスをイメージした小部屋を筆頭に発想そのものが大胆かつユニークだが、特にアトリエ中央に配されたヘリンボーンの作業テーブルからは、まさにステンドグラス作家こそのアプローチが見て取れる。「天板の材料はD.I.Y.の端材。端材をパズルのように組み合わせただけですが、組み合わせから模様を描き出すという考え方は、ステンドグラスに通じるかもしれません」。

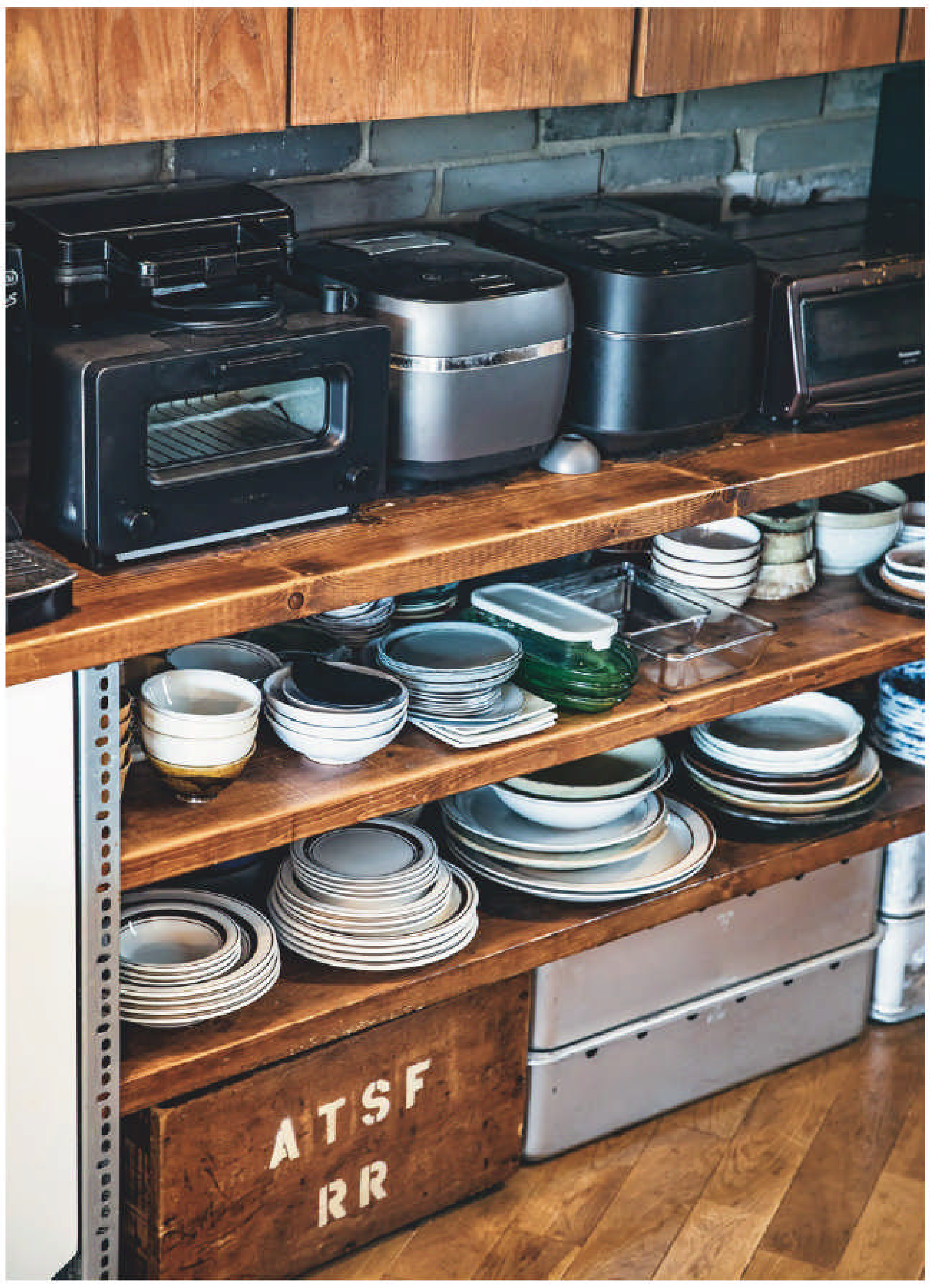
その言葉が裏付けるとおり、作家こそのセンスと輸入住宅ゆえの希有な造りが調和。木を多用したインテリアが落ち着きを漂わせながらも、ひと癖ある空間が何とも心地いい。

Photo／Chie Kushibiki　Text／Kyoko Oya

こちらが制作の拠点となるアトリエ。セルフリノベーションによって、かつてのガレージを改修しているが、ヘリンボーンデザインの作業テーブルのほかに特筆すべきが窓だ。物作りの現場である工場への憧れから、工場に使用されていた鉄製の窓枠をセレクトしている。

01.アトリエに配した手作りのシェルフには、D.I.Y.のイメージソースとなる建築のフォトブックが並ぶ。 **02.**階段と天井の空間に設えた小部屋は「宙に浮くような、ツリーハウスのイメージです」。 **03.**バルコニーの流し台もお手製というから驚きだが、「あまり使わないんです。せっかく引いた水道がもったいないから、ここにお風呂を設置するつもり」というから何とも贅沢。 **04.**小部屋の手前にレイアウトされたアイアン脚のテーブルはD.I.Y.、対になったソファは『アクメ ファニチャー』のプロダクト。 **05.**アトリエの扉はヴィンテージ。その扉に設えられた星形のシンボルはD.I.Y.だが、やはりパーツを組み合わせるというステンドグラスの概念が用いられている。 **06.**アトリエの奥は子ども部屋。愛娘の希望を聞きながらロフト付きのベッドをD.I.Y.し、ベッドの囲いは表情豊かなウッドシェイクだ。 **07.**こちらもアトリエのひとコマ。もともと備わっていたシャッターを取り外し、開口部に壁と窓をD.I.Y.したそうだが、窓枠の購入先はアンティーク家具を取り扱う『デモデ・ファニチャー』。 **08.**アトリエと居住スペース。谷和邸には2つの玄関があり、居住スペースの玄関扉をあけると迎えてくれるのは、約100年前に制作されたというアンティークのポスターだ。 **09.**大きなミラーを配した屋根裏部屋は、スタジオのメイクルームとしても機能。谷和さんの母親が手掛けたという生け花やドライフラワーが、文字どおりに花を添えている。

06	01	
07	04	02
08		
09	05	03



13	10
	11
14	12

10.家具の多くが谷和さんによるD.I.Y.のなか、こちらのダイニングテーブルは『PFS』からセレクトしたそう。そこに合わせているのは〈イームズ〉のリプロダクトとオランダの老舗である工業デザインメーカー〈ガルファニタス〉のチェアだが、ブラウンの統一感が家の内外にあるグリーンの印象を引き立てている。　11.木製フレームの大きな窓も輸入住宅ならでは。日本の住宅には珍しい造りだ。その窓から通じるウッドデッキのバルコニーには〈カーミットチェア〉にタクティカルチェア、さらには〈スノーピーク〉の焚き火台がレイアウトされ、さながらアウトドアリビングの趣。ここからの眺めがかつて暮らしていた湘南エリア、葉山の景色を彷彿とさせる。　12.家の購入当初はこぢんまりしていたというキッチン。「どう手直ししようかと考えている矢先に、展示品として安売りされていたシステムキッチンを見つけたんです」。さながらプロ仕様だが、右隣に見えるウッドの食器棚はD.I.Y.。ブライワックスを塗り込み、まるでヴィンテージのような味わい深い赤茶色に仕上げている。　13.キッチンアイテムが並んだラックも谷和さんの自作。「ジョイント金具と天板を組み合わせただけ」というが、ウッドの家具を多用した空間に、スチールの無骨さがアクセントをもたらしている。　14.食器棚に並ぶアイテムたちはスタジオの備品としても活躍。まさにシンプル・イズ・ベスト。使い勝手のよさそうな食器ばかりだが、その多くがアメリカで購入したものとのこと。

PROFILE

会社員
ひろやんさん

会社員
かおりんさん

SPEC

居住地域	：	千葉県
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	3LDK＋S
居住年数	：	3年
築年数	：	43年

グリーンともうひとつ、LDKに遊び心のエッセンスをプラスしているのがダイニングの照明。三角シェードと裸電球の照明を組み合わせ、長さにコントラストを付けることで空間にリズムをもたらしている。ちなみにどちらもメーカーのカタログから見つけたそう。

居心地第一の住まいに野外のムードをもたらす、グリーンの遊び心。

キャンプ好きには知られた存在のひろやんさん&かおりんさん夫妻。キャンプの様子をアップするインスタグラムは2万フォロワーを誇り、GO OUT CAMPの常連でもある。それだけに玄関から直に通じる納戸にはギアがぎっしり。しかし意外にもLDKにキャンプの香りは希薄だ。

その理由はずばり「僕たちにとってのキャンプとは、非日常の楽しみだから」。一方の住まいは、言うまでもなく日常の空間。「何よりも居心地が第一です」と話す夫妻は中古の一軒家をリノベーションして住まうが、工務店が手掛けたのは間取りの変更や水回りのリフォームといった、あくまでも必要最低限のみ。壁の漆喰塗装もラックの設置も、さらには芝生の整備もD.I.Y.。遠出が難しい時期には庭で家キャンを楽しむそうだが、「大自然で楽しむキャンプには、やっぱり勝てません」。

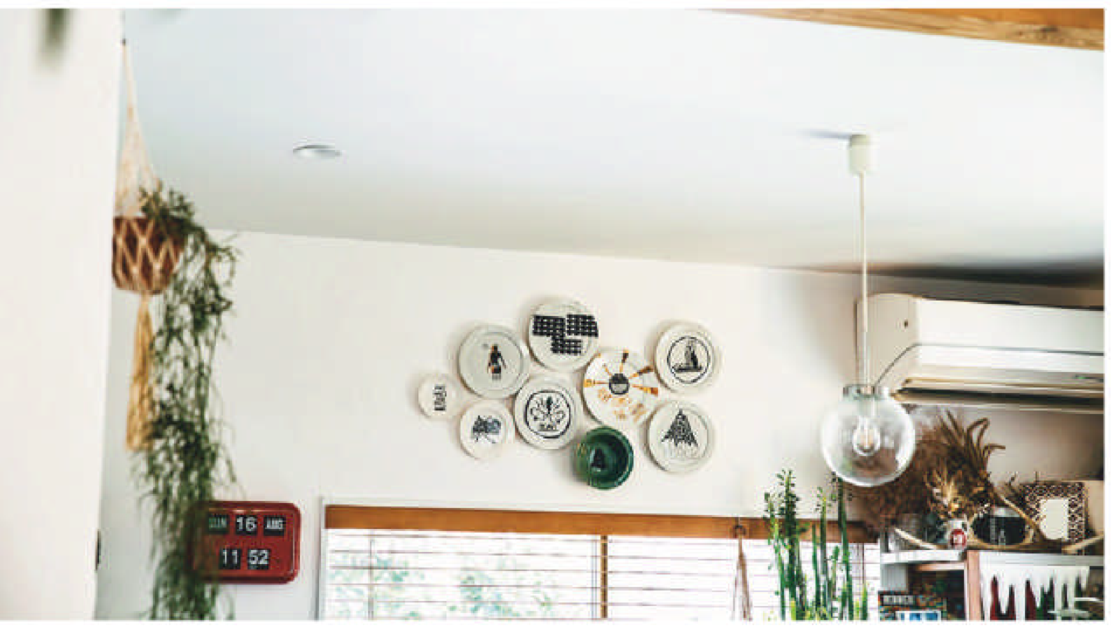
D.I.Y.の腕前にも驚かされるが、特筆すべきはインテリアの配色だろう。赤みを帯びたウッドの英国家具が上質なムードを漂わせ、マットなチャコールグレーのクロスが張られた壁はモダンなイメージ。窓枠に設えられた食器棚に並ぶ色とりどりの器たちも部屋のアクセントだ。

そこに遊び心をプラスしているのがグリーンの数々。鉢植えの植物は生命力豊かに生長し、あえて剥き出しのままに残した柱もグリーンのディスプレイスペースに。柱を伝うように生き生きと枝葉を伸ばすグリーンは、さながらアウトドアの趣。「キャンプはあくまでも非日常」と語る夫妻だが、その住まいは、やはり野外の瑞々しさに満ちている。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya

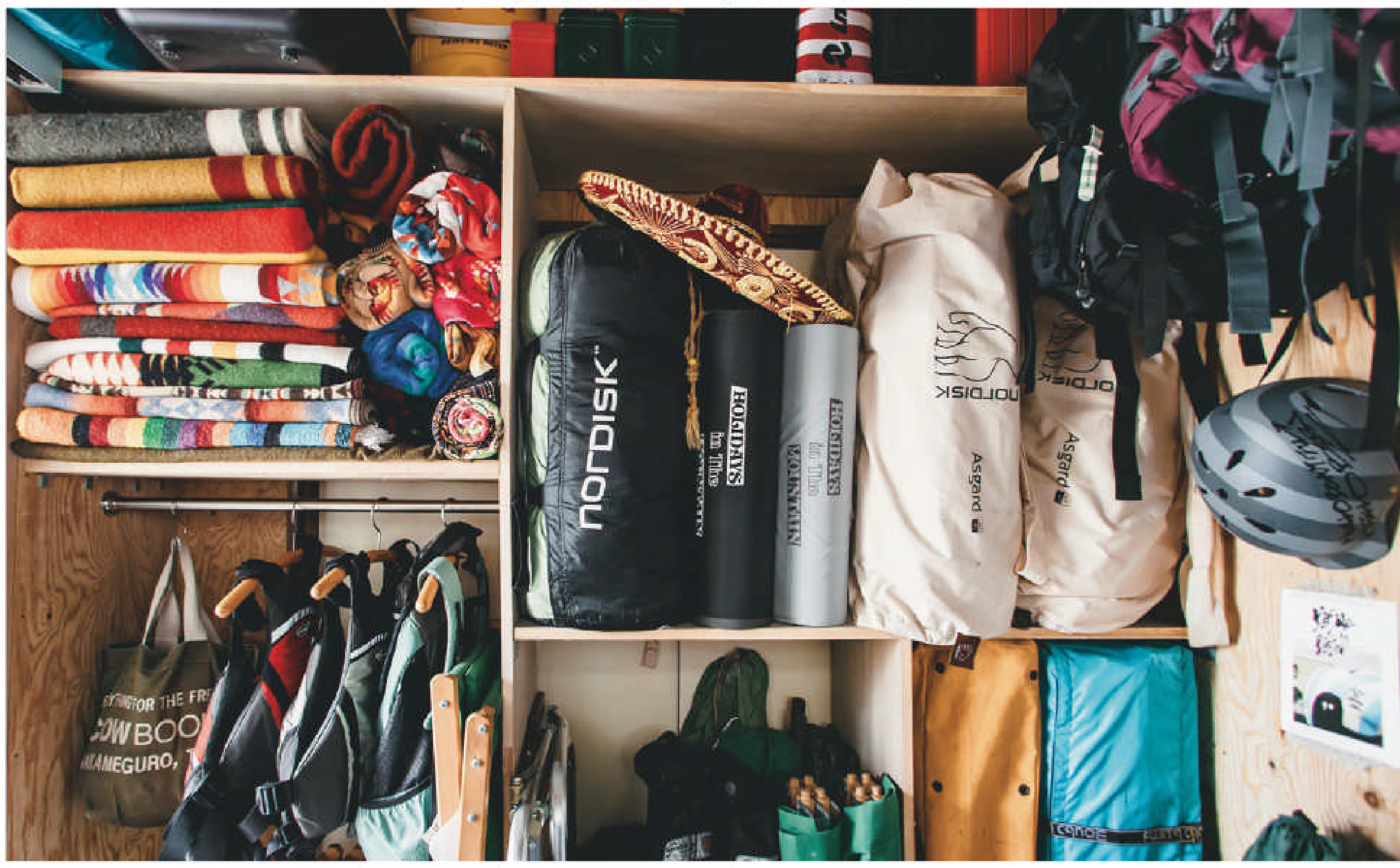
「もともとの床を抜き、玄関と同じ高さにリノベーションしたんです」という納戸は土足OK。大きな段差を経ることも、靴の脱ぎ履きもせずギアを出し入れできるが、なにせ夫妻はギア持ち。「本当はもっと広い収納部屋がほしいほど」と苦笑交じりに話してくれた。

大自然で楽しむキャンプには勝てずとも、雰囲気は十分。テントは〈ザ・ノース・フェイス〉、チェアは右が〈モンロ〉、左は〈ペンドルトン〉とのコラボレートモデルだが、テーブルは特にレア。天板に神山隆二氏のグラフィティがプリントされたSK8テーブルだ。



01.テレビボードとテーブルは英国の老舗家具メーカーが手掛ける〈ジープラン〉のプロダクトだが、ソファにはネイティブアメリカン柄のブランケットをオン。異なるテイストのミックスにより、上質さが漂いながらも肩肘張らない空間に。　02.植物はディスプレイに凝り、壁と柱の間に突っ張り棒を設置することでハンギング。　03.ダイニングテーブルと写真奥のチェアは〈ジープラン〉。手前にセットされているのはハンス・J・ウェグナーの名作であるYチェアと、座面に〈ペンドルトン〉の生地を張ったインディアンブランケットスツールだ。　04.こちらのラックにアクセントを添えているのは〈ゲルチョップ〉のオブジェ。夫妻はブランドの代名詞たる切り株モチーフのスツールも所有し、部屋の随所にポップアートのエッセンスをプラス。　05.壁際のチェストも〈ジープラン〉、壁から伸びる照明はセルジュ・ムーユのリプロダクトだが、上質な家具に彩られた空間のアクセントが植物だ。　06.キッチンに面したパントリーのラックも家主によるD.I.Y.というから驚きだが、ガチャ柱によって棚板の高さを変えられる仕様に。　07.キッチンの出窓に設えられた食器棚も手作り。チャコールグレーのクロスに対し、ラックは白く塗装。色のコントラストにより、絵になる空間に。　08.壁に飾られているのは神山隆二氏による〈ブランクス〉のプレート皿。プレートそのもののアート性もさることながら、数種類を絶妙に組み合わせる家主のセンスも見事。

06	01	
07	04	02
08	05	03



12	09
	10
13	11

09.ホワイトの塗装が芝生に映える植物専用のラックも、家主によるD.I.Y.。グリーンの収集はキャンプを始める以前からの趣味であり、特にお気に入りのショップは千葉県柏市の『原澤園芸』だそう。　10.キャンプギアが収納された納戸のラックまで手作り。ラックの仕切りはランダムに取り付け、縦長だったり横長だったり、収納スペースの形に変化を持たせることでかさばりがちなテントも、ブランケットのようなファブリックもすっきりと仕舞える。　11.こちらも納戸のひとコマだが、上部に収納されているのは山岳モデルのテントやシュラフ、窓際にずらりとハンギングされているのは〈コールマン〉のヴィンテージランタンだ。その下にも収納を設けているが、広い天板がギアメンテナンスの作業スペースにもなる。ちなみに細々としたギアを収納している木箱は〈カウブックス〉、左のクーラーボックスは〈コールマン〉のパーティスタッカー。　12.キッチンに面したパントリーにも水筒やクッカー、クーラーボックスをはじめとしたキャンプギアが並ぶが、動線までしっかりと考慮。壁や扉で仕切ることはせず、LDKから廊下を通じて玄関まで、ギアをシームレスに持ち運ぶことができる。　13.LDKから玄関に通じるドアの脇には、ちょっとしたハンギング収納をプラス。出掛けにサッと手に取れるよう、日常使いのアイテムが並ぶが、コヨーテカラーのショルダーバッグは神山隆二氏のサインペイント入りだとか。

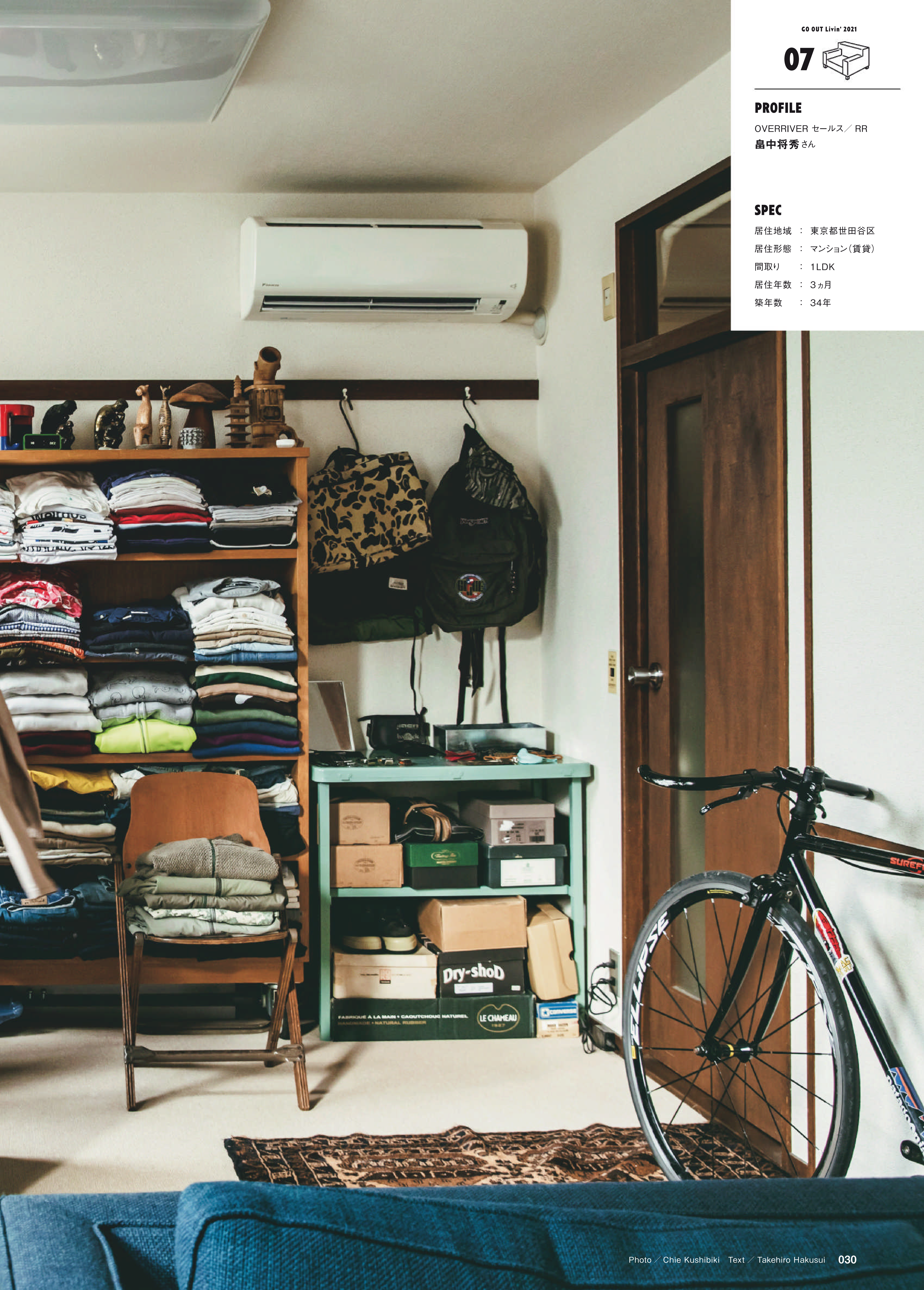
07

PROFILE

OVERRIVER セールス／ RR
畠中将秀 さん

SPEC

居住地域 ： 東京都世田谷区
居住形態 ： マンション（賃貸）
間取り ： 1LDK
居住年数 ： 3ヵ月
築年数 ： 34年



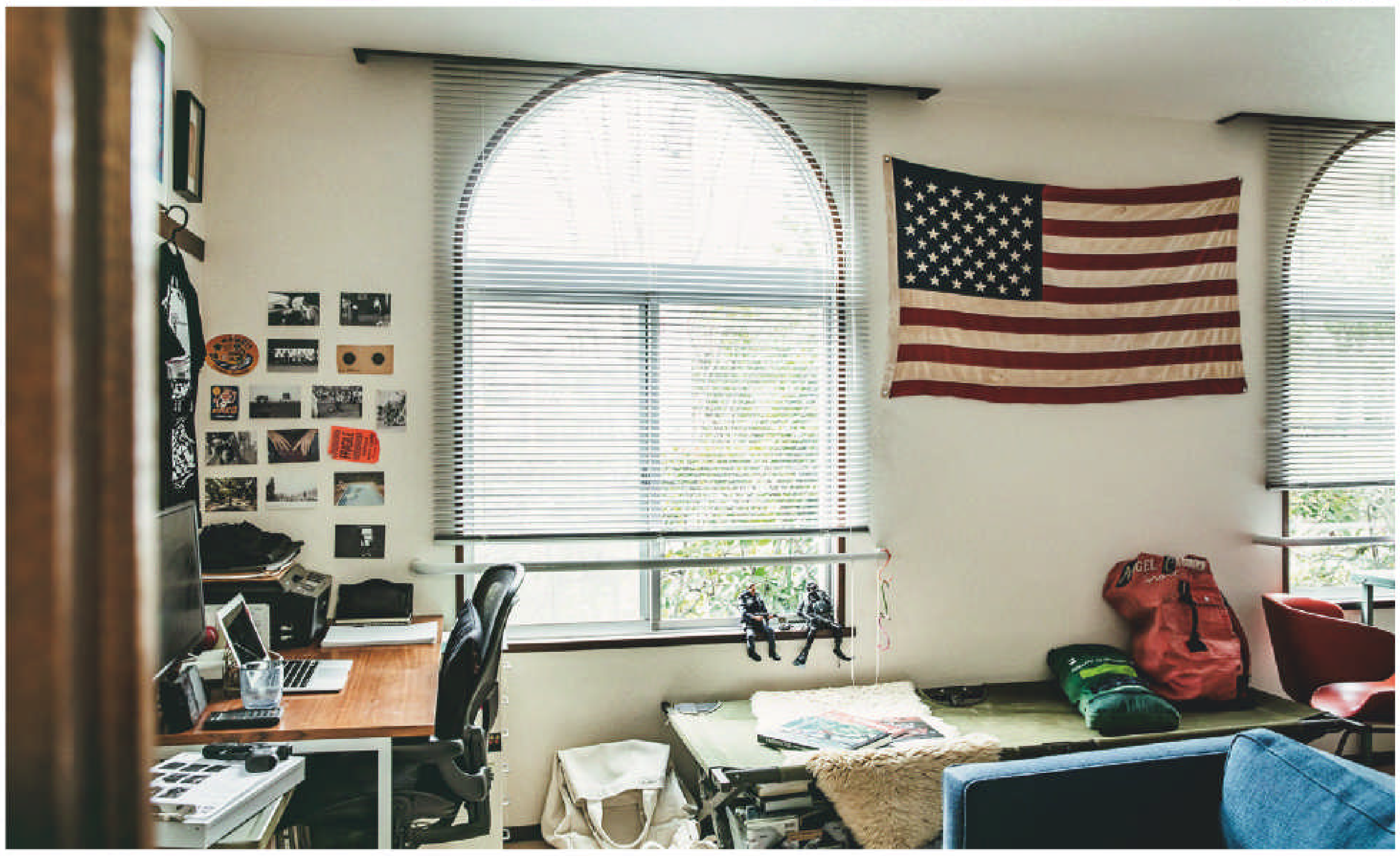
圧倒的な物量が目を引く、ワークスペースを兼ねた生活空間。

「以前からちょっと変わった物件だなとは思っていたのですが、まさか自分が住むとは考えてもいませんでした」という畠中さんの住まいは、どことなくインダストリアルな趣きある打ちっぱなしの外観が特徴的な低層住宅の1階。徒歩圏内にオフィスもあり、こちらはあくまで自宅という位置づけながらも仕事部屋として機能しているというが、何より圧倒的な物量にまずは目を奪われる。

ミーティングスペースに置かれたUSアーミーのメディカルデスクを筆頭に、ベンチ代わりに使用したコットや什器、あるいは大量の衣類や各国の民芸品や雑貨など、多様なテイストをミックスしつつもどこか芯の通った不思議な統一感がある。「古着や軍モノといった自分が好きなものを集めていただけですが、一度手に入れたものは捨てられない性分ではあるのかも。もう着ないだろうと思うものでもなぜか手放せない。そんなことを続けているうちにこれだけの物量になってしまいました」。

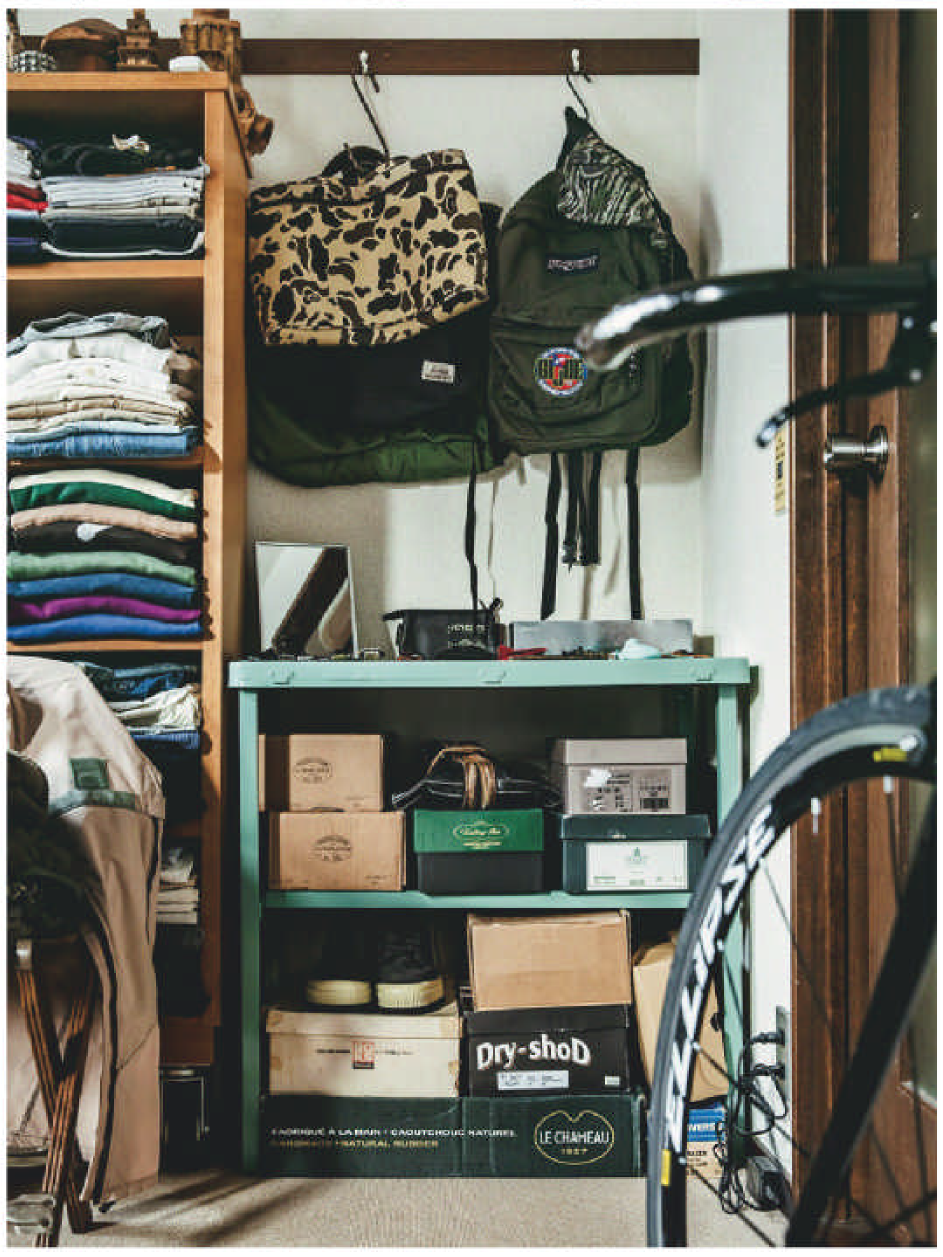
数ある趣味の中でもやはり特筆すべきはサバイバルゲームだろう。いわゆるエアソフトガンの類ではあるが、そのマニアックさはもはや〝オタク〟と呼ぶに相応しい。「中学生の頃からエアガンで遊んでましたが、本格的にサバイバルゲームにハマったのは数年前。ただ、どこまでも自己満足の世界だとは思いますね。動きやすさだけを考えたら当然Tシャツにショーツの方がいいワケで。でも、せっかくなら僕は真剣に遊びたい。そう思って掘り下げていったら結果的にマニアックになってしまったと（笑）」。

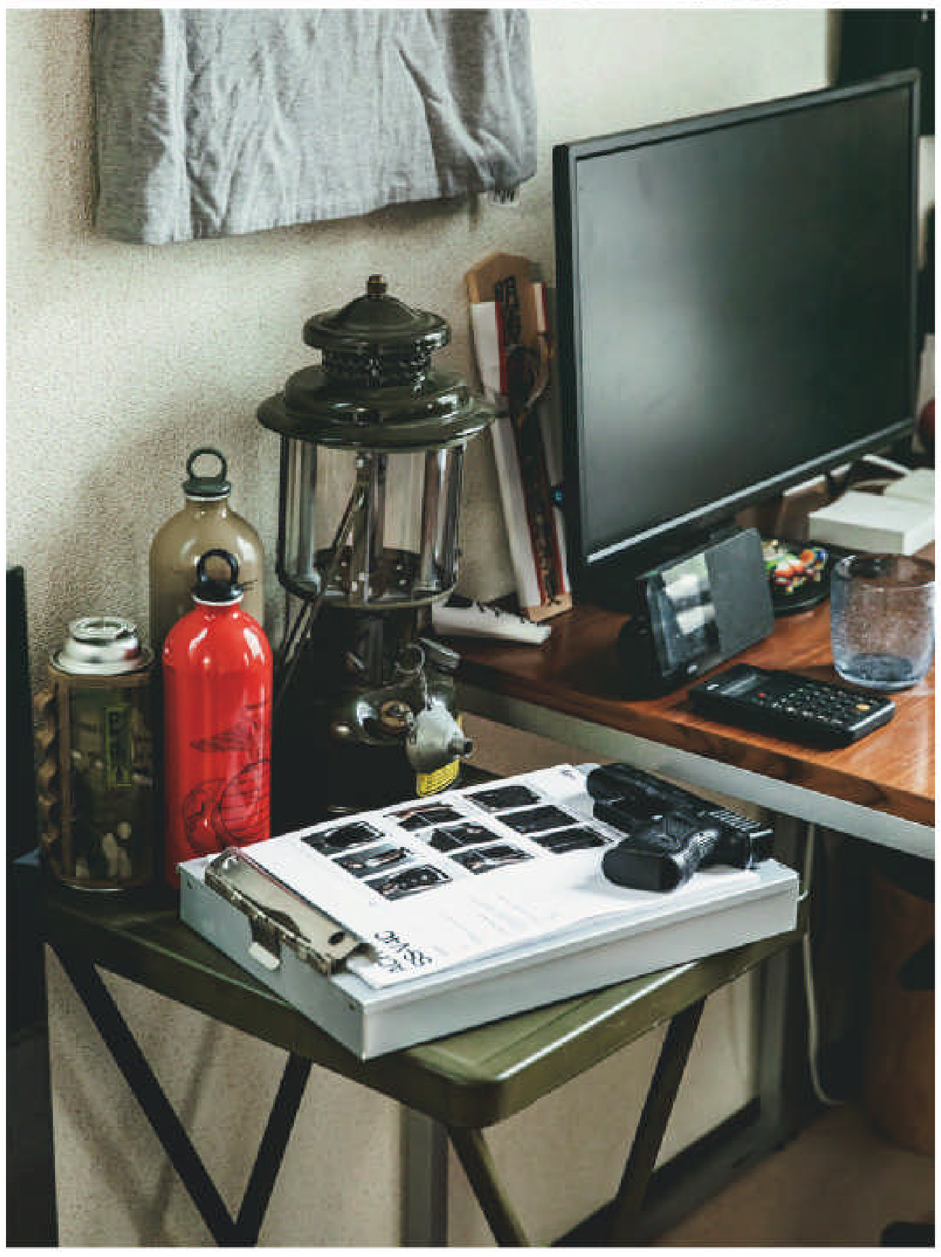
暮らしや趣味と仕事がほどよくクロスオーバーした空間では、壁一面にヤマと積まれた大量の衣類たちがお出迎え。幼い頃からUSミリタリーに傾倒し、一部特殊部隊で採用された〈パタゴニア MARS〉やそのテストタイプなどレアなガーメンツも多数所有する。



01.1980年代頃のものと思われるミーティングスペースのデスクはUSアーミーの放出品にして正式名称はCHEST, MEDICAL INSTRUMENT AND SUPPLY SET。「ミリタリー由来はもちろんですが、〈ティファニー〉ブルーが好きなので」。合わせたチェアは〈天童木工〉のヴィンテージカブトチェア。「かつて祖父の事務所で使われていたもの」という。　02.ミッドセンチュリーな趣きあるアーチ型の窓もお気に入りポイント。5年ほど前からサバイバルゲームチーム「メディアレンジャーズ」に在籍する畠中さんだが、窓辺には自身も愛用中のサブマシンガン、MP5を装備したGIジョーをレイアウト。　03.1950～60年代にかけてアメリカ陸軍で採用された木製コットはコンディションも上々。仕事の合間や来客時にはベンチとしても。　04.アパレルのセールス兼PR業務に携わっているとあり衣類の量はまさに圧巻。ベトナム戦争時代の通称ジャングルファティーグから各国アウトドアブランドの近年作まで、巧みな見せる収納はさながらショップを思わせる。05.ワークスペースでは〈ビスレー〉のデスクと定番のアーロンチェアを愛用。自身がセールスを務めるドイツのバッグブランド、〈バッグジャック〉の非売品Tシャツなど思い入れのある品でモチベーションを高めている。額装されたポスターはビートニクの聖地として知られるサンフランシスコは『シティライツブックストア』のオリジナル。

04	01
	02
05	03





11	06	
12	09	07
13	10	08

06.アウター類と趣味の道具はベッドルームに。キャンプギアや各種雑貨など細かなものはトランクカーゴで管理している。　07.畠中さんの現行装備。メインウェポンには先述した〈ヘッケラー&コッホ〉のMP5の実銃と同寸法、同重量に設計された通称トレポンことトレーニングウェポンを、RAVと呼ばれるアーマーも軍採用品というこだわりぶり。「よりリアルさを追求するための自己満足です（笑）」。　08.一見すると普通のヴィンテージキリムながら、じつは通称ウォーラグと呼ばれるアフガニスタン発祥の近年作。「よく見ると戦車やヘリコプターなどがモチーフになっています」。　09.一点アクセントとなったブルーのソファはイタリアのヴィンテージアノニマス。「以前住んでいた物件から継続的に使い続けているもののひとつです」。　10.カリキュレーターなどデスク周りの小物は〈ブラウン〉社製がフェイバリット。「ディーター・ラムスのデザインは昔からずっと好きですね」。　11.ベッドサイドにある巨大なバッグは米軍のパイロットが装備類をまとめるフライトキットバッグなるもの。「フィールドに行く際、装備をまとめるのに使ったり、キャンプギアなどかさばるものにも便利です」。　12.各国の民芸品の中にはユニークな逸話も。「サバンナのチーターはシマウマを襲わないというエピソードが好きで、その2頭を並ばせています」。　13.スニーカーなどの靴類は箱に入れた状態で管理していた。

08

PROFILE

PICA八ヶ岳明野スタッフ
髙島 淳さん
絵里さん
然くん
凪ちゃん

SPEC

居住地域 ： 山梨県北杜市
居住形態 ： 一戸建て(持ち家)
間取り ： 1LDK＋ロフト
居住年数 ： 1年
築年数 ： 1年

【取材協力】
One-craft HOME 木村工務店
http://sub.onecraft-k.com/

Photo / Chie Kushibiki Text / Takehiro Hakusui

ほぼ全てのエリアが見渡せる、暖かな家族の空間。

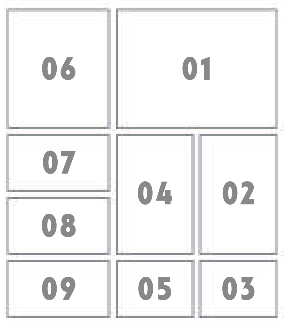
現在は関東近県を中心に10エリアにキャンプ場を運営する名門PICAのスタッフでもあり、かつては古材をはじめ各種D・I・Y・材を扱う都内の某名店スタッフという経歴を持つご主人が、学生時代から縁あるこの土地に居を構え、ちょうど1年ほどが経った。「私の友人がここ北杜の出身で学生時代は毎年のように遊びに来ていたんですね。そんな縁もあって、東京の忙しない生活にも疲弊していましたし、もう少し自分たちのペースで暮らしたいと7年前に引っ越してきました」とか。

とはいえ、初の田舎暮らしとあって、まずは賃貸物件で6年ほど言わば経験を積んだという。「都心のように賃貸物件というものがほとんどないのですが、僕らはたまたま住いも仕事も見つけることができました。ただ、もし移住を考えている方がいたら一旦は仮住まいで試してみることをオススメしますね。やっぱり何もかもが便利な都心とはまったく違う生活になるので」という。

18坪あるという1階にはキッチンダイニングとリビングがほぼ地続きに併設され、奥には夫婦の寝室が配置される。一方の2階の屋根裏部屋は現在、子どもたちのプレイルームとして機能していた。「子どもがまだ小さいので家中どこからでも目が届くよう間仕切りは最小限にしていますし、現状2階はまだ床材も壁紙もまだ未施工の状態。先々のことは彼らの成長に応じてその都度考えればいいのかなと。それでも手狭になるようであればトレーラーハウスでも併設しようかと思っています」と語ってくれた。

家はハーフセルフビルドという施工形態をとり、施主自らが施工の一部に参加するかたちで建てたそう。家族揃って参加することでより愛着を持って住まうことができるとか。また、暮らしながら必要に応じてビルドアップできるフレキシビリティが何よりの魅力だそう。

01.生活の足でもあり、仕事の相棒としても活躍中の愛車は、〈マツダ〉が2000年代初頭まで展開していたピックアップトラック、プロシード。北米市場をメインに流通していた4WDモデルであり、無骨なラゲッジキャリアはアメリカ製の現行品を取り付けている。　02.キッチンを彩るメキシカンタイルは奥様からのリクエスト。奥様自ら施工したという。　03.窓枠には前職時代に揃えた古材を使用。「誰にも気付かれることはないのですが、個人的なこだわりです（笑）」。　04.土間から繋がるクローゼットエリアの2階は外遊びの道具などを収納するストレージとして機能しつつ、子どもたちの遊び場にもなっているとか。　05.2階へと続く階段とプレイルームの壁面には、あえてハンドレイルを選ぶことで小さな子どもたちにも目が届くよう配慮しているのがわかる。　06.玄関屋根の裏側も古材をご主人自ら張り詰めている。「これまた誰に見せるワケでもないのですが、小さなこだわりです」。　07.コンパクトな洗面台は必要十分なサイジング。ここにも古材が採用されていた。　08.居を構えるタイミングで新調したというダイニングテーブルは、前職時代の先輩が立ち上げた国産ブランド、〈リクレイムドワークス〉のもの。09.階段を上った先にあるロフトスペース。現在はプレイルームとして機能しているが、子どもたちの成長に合わせて活用法を流動的に変えていきたいそう。



13	10
	11
14	12

10.1階の床材も先述した〈リクレイムドワークス〉によるもの。主にアメリカ西海岸で買い付けたリクレイムドウッド（古木）を用いたリノベーションプロダクトに定評がある。 **11.**土間へと続くウォークインクローゼットには、衣類だけでなく仕事でも愛用していると語る〈L.L.ビーン〉や〈ダナー〉などの各種ブーツや外遊びのギアが整然と並べられている。同スペースにも小さな窓が備えられ、「とにかく明るくなるよう採光にはこだわった」というご主人の意向がしっかり見て取れる。 **12.**あえてカーテンを使用せず陽の光で目覚めるという、あまりに理想的なご夫婦のベッドルーム。暖かな印象のリビングルームから一転、スッキリとした白壁で静かで落ち着いた雰囲気に仕上げていた。 **13.**「厳冬期でもない限り、暖房はほぼこれだけで十分事足ります」という土間スペースの薪ストーブは、'70年代の設立以来、アメリカの伝統的な鋳物ストーブを製造し続ける老舗〈バーモントキャスティングス〉のイントレピッド2なるモデルをセレクト。一見コンパクトながら約11 ～ 34坪もの暖房面積を誇るブランド定番のハイパワーモデル。 **14.**リビングに鎮座する〈アクメ ファミチャー〉のソファも、引っ越しのタイミングで新調。奥に見える国産アンティークのキャビネットは、奥様が大学時代に取り壊しが決まった高校からいただいたもので夫婦がかつて東京で暮らしていた時代からの愛用品。同じく〈センゴクアラジン〉の石油ストーブも東京時代から使っていたという。

09

PROFILE

良酒屋（よいさけや）オーナー
藤本進一 さん
飲食店マネージャー
恭美 さん
美壱 くん

SPEC

居住地域 ： 神奈川県鎌倉市
居住形態 ： マンション（賃貸）
間取り ： 2LDK
居住年数 ： 7年
築年数 ： 30年

Photo／Chie Kushibiki Text／Mitsuto Matsunaga

海を臨む住まいで築く、コミュニティに根ざした暮らし。

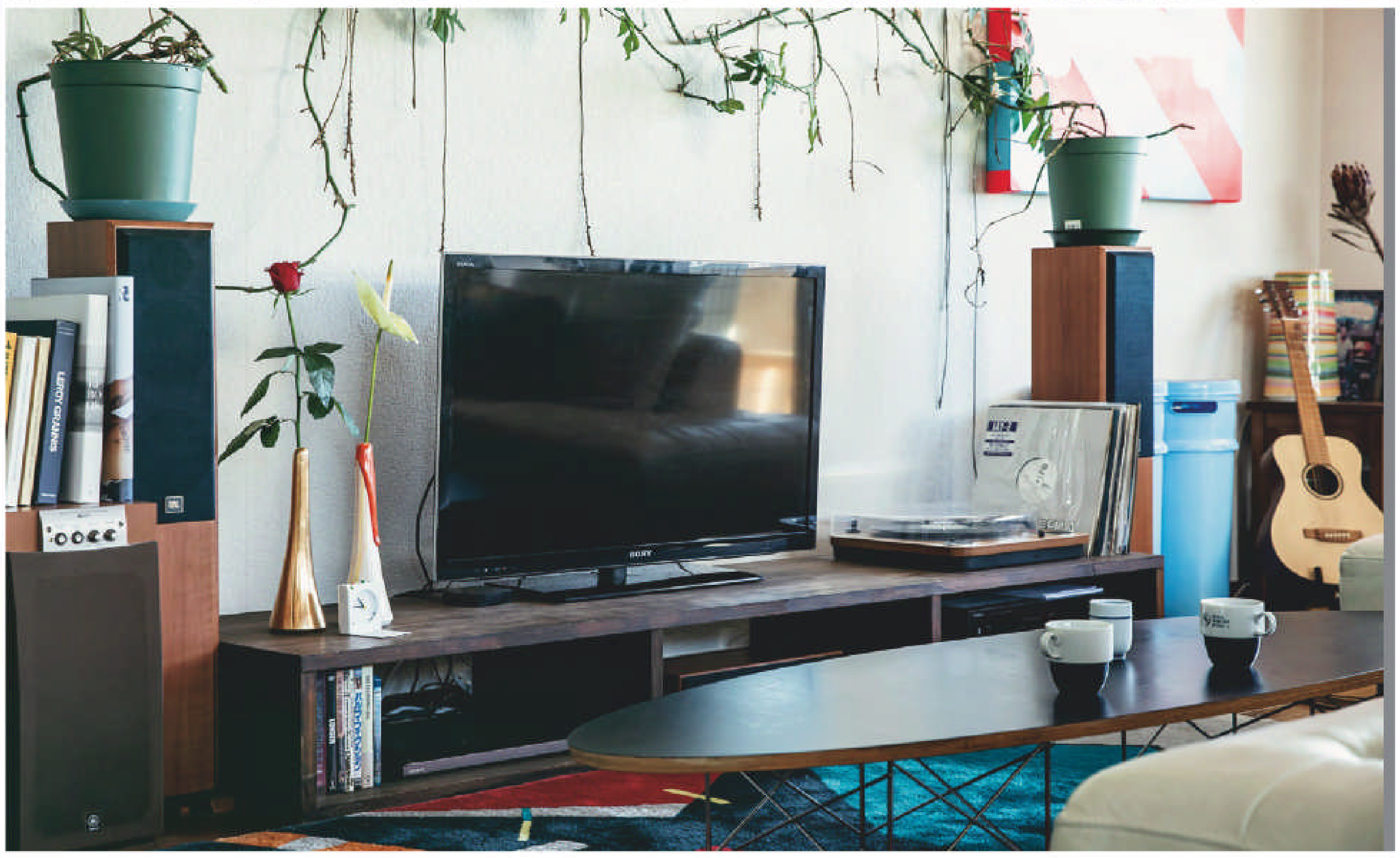
鎌倉・材木座で人気の居酒屋『良酒屋（よいさけや）』を営む藤本さんは、7年ほど前にこちらに移り住み、サーフィンをしながら海辺での暮らしを満喫している。自宅は低層マンションの最上階で、リビングの窓から目の前に海が見えるという絶好のロケーション。家にいながら波をチェックでき、歩いて海に向かえるという最高の環境だ。さらに奥様の職場、子どもの保育園、そして自身のお店もすべて自転車で行ける範囲とのことで、生活から仕事までローカルなコミュニティに根ざしたライフスタイルを送っている。かつては東京に住みアパレル関係の仕事をしていた藤本さんだが、その頃とは生活のリズムが大きく変わったそうだ。

「越してきた当初は東京に通っている時期もあったんですが、自分のお店を始めてからは材木座から出ない日の方が多いぐらい。今は朝起きて波を見て、子どもと遊んでから仕事に向かうという生活になりましたね」

室内は入居の際に和室を洋風に改装し、キッチンにカウンターテーブルを造作した程度で、必要最小限のリフォームしか行っていないそう。インテリアには友人であるアーティストの作品のほか、普段愛用している〈関澤製作所〉のサーフボードや〈ハイドロシェイプス&デザインズ〉のスケートボードなど、ハンドメイドの横乗りギアも見受けられた。

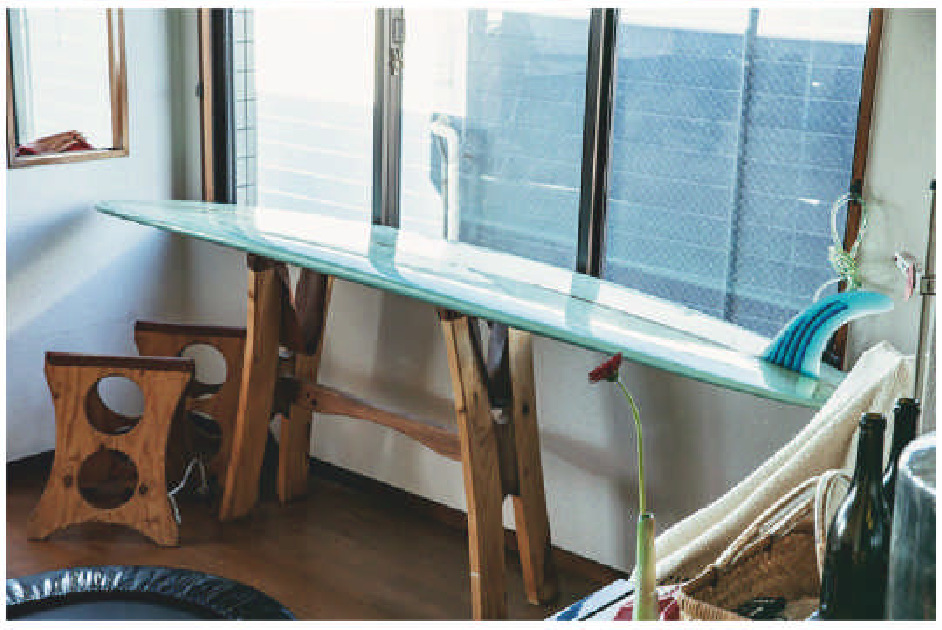
近く、自宅から徒歩数分のところに、自身で手がけるアパレルブランドとジュースを扱う店舗もオープンする藤本さん。海沿いに築いたライフスタイルに、これからどんな1ページが加わっていくのだろうか。

広々としたリビングには海に面した窓から陽が差し込み、冬でも暖かい。左側の白い壁面に這わせたグリーンは観葉植物のモンステラ。ピンにかけ這わせているだけとのことだが、部屋に彩りを加えてくれる巧みなアイデア。右側の一段上がった部分がリフォームした元和室。



01.和室は床をフローリングにし、砂壁を壁紙にリフォーム。ウッディな雰囲気にまとめられているため、リビングとの境が薄まり開放感がアップ。ライトは、リビングのライトと共に、ステンドグラス作家・熊崎浩氏の〈シーショアステインドグラス〉のもの。　02.自作したというテレビ台の上に置かれた花瓶は、アーティストであり陶芸家の横山玄太郎氏の作品。友人である横山氏の作品はほかにも数点室内を飾っていた。　03.リビングからベランダに出ると海を一望できるという抜群の立地。サーファーなら一度は憧れる海の目の前での暮らしだ。「見晴らしが最高ですね。ここから見る夕日がいいんですよ。子どももすぐに海で遊べますし本当にいい環境です」。　04.正面のペインティングも横山氏の作品。白く描かれているのはスケートボードのトラックだ。スケーターならずともそそられるポップな色使い。水色のスツールは海外のビア樽を改造し作られたもの。こちらも友人作。　05.普段愛用する横乗りのクイーバーが自然と部屋を彩る風景の一部に。サーフボードは横須賀にファクトリーを構える〈関澤製作所〉にオーダー。左のスケートボードは〈ハイドロシェイプス&デザインズ〉。壁に飾られたアートピースも横山氏が製作。子どもが産まれた際に着ていた産着を粘土で固めて焼き、その形をそのまま作品にしてもらったのだそう。キャンバスには子どもが産まれた時の体重などが記されている。

04	01
	02
05	03



11	06	
12	09	07
13	10	08

06.昔集めていたレコードを再び聞きたくなり、〈アイオンオーディオ〉のターンテーブルを4年前に購入。ジャケットからレコードを出し、針を落とすというデジタルにはない「儀式」を経て聞く音楽はまた格別のようだ。　07.玄関には家族の写真と共にインセンスや香水などが置かれ心地よい香りで出迎えてくれる。　08.かつてファミリータイプのマンションとして建てられたこともありキッチンにはほどよくレトロな雰囲気が漂う。「時代を感じるんですけどこの昭和感が嫌いじゃないんですよね」と奥様。冬もこれ1台でOKというストーブは〈トヨトミ〉のKR-47A。上段のガラス部に施された白い特殊コーティングが遠赤外線を発生させるためじんわりと体を暖めてくれる。　09.奥様が趣味で漬けている自家製の梅酒は梅やお酒の種類ごとにラベリング。　10.窓の向こうは遮るものなく水平線が見渡せる。そんなオーシャンビューには数年前から買うようになったダルマが鎮座。　11.室内の雑貨には奥様が旅先のヴィンテージショップで見つけてきたものも。中央のクッションもそのひとつで、こちらは〈ラルフローレンホーム〉のヴィンテージ。　12.ロングボードも右ページの05と同じく〈関澤製作所〉にオーダーした。フィンは友人であるアーティスト・hi-dutch（ハイダッチ）氏作の特注品。　13.波のサイズが上がった時にもぴったりな〈オキツサーフボード〉は、先輩から譲り受けたもの。

10

PROFILE

会社員
髙橋 栄 さん
OUTDOOR SHOP DECEMBER
スタッフ／カフェ勤務
美樹 さん

SPEC

居住地域	：	山形県山形市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	LDK＋屋根裏部屋
居住年数	：	3年
築年数	：	3年

「素晴らしい職人もお店も、山形にはいっぱいです」という髙橋さん夫妻。アイランド式のキッチンカウンターも、無垢材を用いた山形の家具工房〈土澤木工〉にオーダー。ダイニングを照らす照明も山形市内のインテリアショップ『ローパーストア』からセレクトしている。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya

インドアも野外の延長線。理想の生活を叶えてくれた、地元・山形の暮らし。

髙橋さん夫妻が暮らすのは自然豊かな山形県山形市。一度は首都圏での生活を経験するも、4年前にUターン。川沿いの開けた土地に惚れ込み、イチから完成させたのが今の住まい。

天井も床も家具の数々もウッド。自然に抱かれるような心地で過ごせそうだが、「休日を家で過ごすことは滅多になくて、もっぱら外出。山形は外遊びに事欠かないんです」。栄さんは幼少期から釣りやキャンプに親しみ、その影響から美樹さんもアウトドア好きに。キャンプはもちろん、夫妻揃って登山にも出掛けるそうだが、山形市内の『アウトドアショップ ディセンバー』に勤務するのも、外遊び好きが高じてのことだ。

そうした夫妻とあって「夏は海釣り、秋口までは県内の山で山菜が採れるし、冬はワカサギ釣りが定番。自分たちで採った食材を料理するだけでなく、知人からジビエのお裾分けもいただけます」と、日常の食事もアウトドアの延長線上にある。

身近に外遊びのアクティビティがあり、家にいながら野性味豊かな食事を楽しめる。夫妻は現在の暮らしを叶えてくれる地元を愛し、住まいも山形への愛情に満ちている。何を隠そう、家づくりのテーマは〝山形の人たちとともに完成させる家〟だ。

「キッチンカウンターも、ダイニングテーブルやウッドデッキの小屋も、造ってくれたのは山形の職人さん。雑貨の多くも山形のショップで購入しています」。ウッドを多用したインテリアも、さすがは木工文化豊かな山形と納得。同時に家に漂う心地いいムードは、夫妻の郷土愛が醸し出すものなのかもしれない。

01.こちらは作業部屋のひとコマ。釣り好きの栄さんは川釣りに使用する毛鉤作り、美樹さんは革細工に勤しむそうだが、講師を家に招き、手ほどきを受けることもあるほどに夢中だ。　02.ウォークインクローゼットも備えたベッドルームだが、壁にはペグボードをセット。「フックに引っ掛ける“見せる収納”にすることで、仕事に行くにもキャンプに出掛けるにも、細々とした忘れ物を防げます」。　03. 2階のテラスは夫妻の憩いの場。居住スペースとはあえて段差を付けることで、空間にメリハリを付けている。ちなみにチェアは意外にも『ニトリ』で購入したそうだが、「西日のおかげで、自然と味のあるカーキ色に変色したんです」。生き生きと枝葉を伸ばすグリーンは、山形市と宮城県仙台市を拠点とする『ハナ　フラワーショップ』で購入することが多いとか。　04.キャンプギアは「新居を建てるなら、絶対に欲しかったんです」というガレージへ。大物のギアを車載するにもラクラクだが、『イケア』の木製棚とペグボードのラックを設置することで、細かなギアもすっきりと収納できる。　05.ベッドルームのペグボードにはバックパックやキャップもセットされ、さながらアパレルショップの面持ち。ちなみにベッドの横に仲良く並んだウッドチェアは、最近、山形市内にオープンした『パブ』という店のオーナーからのプレゼント。「焚き火セットとチェアを貸し出し、河原でキャンプ気分を味わえるユニークなお店です」とのこと。

03	01
04	
05	02

08	06
09	07
13	12	10 / 11

06.夫妻がふたりの時間を過ごす2階。色違いで並ぶのは〈カリモク〉、左側の2脚は山形市に隣接する仙台市の『ノーチェ』で購入したそう。　07.外の眺めが心地いい1階のリビング。テレビ下に見えるのは〈日本船燈〉のストーブだ。「キャンプに持ち出すのはもちろん、冬にデッキやテラスで食事をするときにも欠かせません」。　08.「民芸品も工芸品も作家さんの作品も、どこか懐かしさを感じるアイテムに惹かれるんです」。美樹さんは、その懐かしさを感じるカゴ収集にご執心。テレビ下に3つ並んでいるのは、やはり山形県内にある『デフト』、レトロな照明は『ローバーストア』からセレクト。　09.郷土を愛する夫妻。横に長いダイニングテーブルも、山形を拠点に活動する知人の大工にオーダー。　10.屋根裏部屋にはソファベッドをセット。壁の一部をプロジェクターが投影できる仕様にし、映画鑑賞を楽しんでいる。　11.デッキの小屋も知人の大工に依頼。雪かきの道具や釣り道具を収納しているそうだが、家が建つのは散歩する人も多い場所。小屋に金具を取り付け、目隠しのためのタープが設置可能な仕様に。　12.アウトドア好きの夫妻だが、泊まり掛けのキャンプに出掛ける頻度が減ったそう。その理由が愛猫の存在だ。「置いていくのが可哀想で、最近は日帰りの登山が定番です」。　13. 2階ではお酒を飲みながら過ごすことが多いという夫妻。ウォールラックには、種類豊富なリキュールボトルがずらりと並ぶ。

11

PROFILE

フリーライター／
スタイリスト／デザイナー
秋元祐輝さん

SPEC

居住地域	：神奈川県川崎市
居住形態	：マンション（賃貸）
間取り	：2LDK
居住年数	：1年
築年数	：1年

独自の選球眼が光る、ミリタリー×インダストリアルな部屋。

「ミリタリーとインダストリアルテイストが好きですね。ただそれだけだと無骨になりすぎてしまうので、ウッドのアイテムを取り入れてバランスを考えています」。

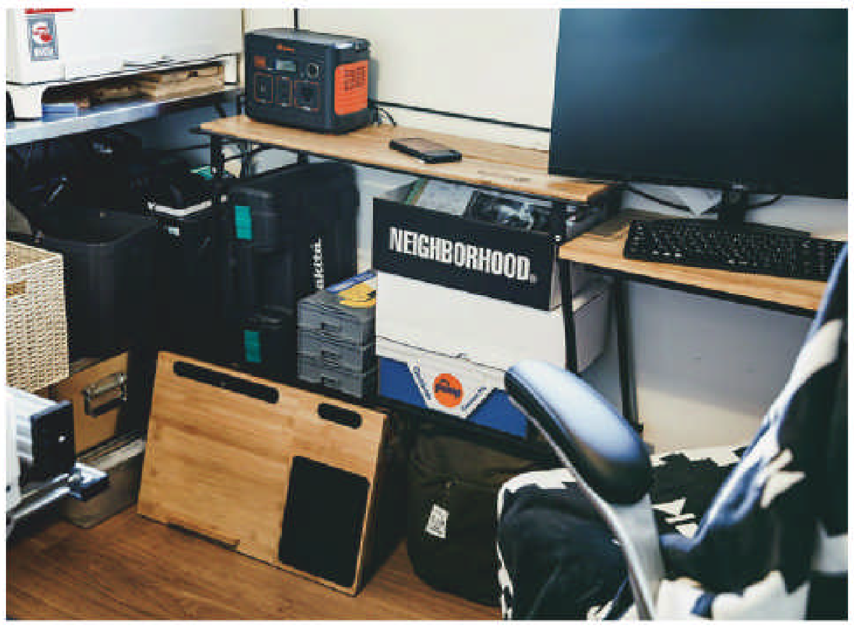
部屋づくりのテーマをそう教えてくれたのは、アウトドアライター、スタイリストとして活躍する秋元さん。近年では「欲しいアイテムは自分で作る」との思いから、アウトドア・キャンプギアのデザイナーとしてプロダクト製作も手がけている生粋のキャンパーだ。

秋元邸でひときわインダストリアル感を放っているのが、金属の質感と無駄のないデザインが美しい〈メタルシステム〉のラック。こちらを収納場所として利用するのと同時に、ギアを製作する作業場を区切るパーティションにもなるようレイアウトしている。特筆すべきはラック背面に有孔ボードを取り付けて創出した工具用の壁掛け収納。デッドスペースとなるラックの後ろ側を有効活用し、作業場で使用する工具類をまとめて収納できるようにする、まさに一石二鳥のアイデア。

室内に見られるキャンプギアは、ミリタリーものに精通した秋元さんならではのセレクト。ミリタリーというとポピュラーなのは米軍アイテムだが、部屋で使用しているファニチャーも含め、デザイン的にもよりスタイリッシュなスウェーデンやドイツなどのヨーロッパものが多数散見。なかには現在では入手困難なヴィンテージギアも並んでいた。ミリタリー、そしてインダストリアルという人気のテイストを、一味違う仕上がりにする独自の選球眼とセンスをとくとご覧いただきたい。

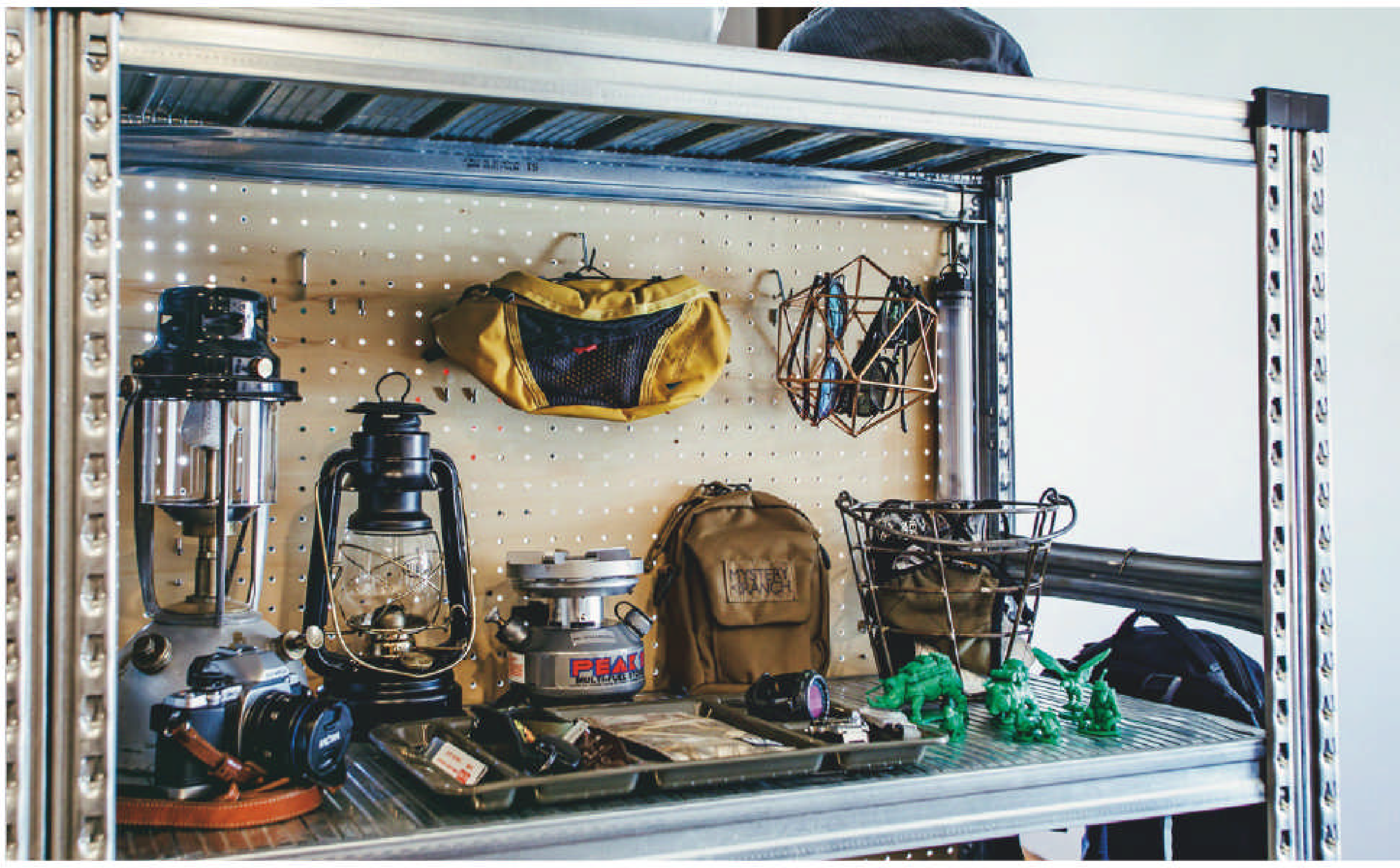
Photo／Chie Kushibiki　Text／Mitsuto Matsunaga

モノトーンを基調とした室内にミリタリーとインダストリアルのテイストが映える。右ページに見える〈メタルシステム〉のラック背面が作業場。中央のストーブはスウェーデン軍にも導入されていた〈POD〉。ビンテージ品を入手しオーバーホールして使用している。



01.有孔ボードを利用しお気に入りのアイテムをディスプレイ。中央に見えるのはいまだ根強いファンが多い〈マックスシーベルト〉のブロートーチ。　**02.**ミリタリーのデスクライトは、ポスターなどを照らすスポットライトとして使用。マガジンラックとして使っているのは実は〈スポルテスアウトドアツールズ〉の焚き火台。これはソロキャンプ時に使用することが多いそう。　**03.**パソコン台として使うのは〈ネイチャートーンズ〉のバーカウンターテーブル。　**04.**キッチンとリビングを隔てている室内窓の枠は2×4材を組み上げてD.I.Y.。原状復帰を考え黒いマスキングテープを巻き付け、色移りなどのダメージを防止できるようにしている。　**05.**〈スタンレー〉や〈ナルゲン〉のボトルはキャンプに行くときの必需品。「〈ナルゲン〉は米やパスタなどの食材入れ、お湯を入れて湯たんぽ、凍らせて保冷剤としても使えるので何かと役立っていますね」。　**06.**〈メタルシステム〉背面の有孔ボードはタイラップで取り付け。　**07.**近くリリース予定という、膝の上で使える多機能カッティングボード。シェラカップがセットできる穴が開けられており、裏面はプレートとしても使用可能だ。　**08.**ラック背面側にある作業スペース。CADで設計したデータを中央の工作機械に取り込みギアを製作する。　**09.**〈キャプテンスタッグ〉のベンチにかけているのは〈ロゴス〉グランベーシック・チェア for 2用のカバー。

06 01 07 04 02 08 09 05 03



13	10
	11
14	12

10.ラックの上段にはランタンやバーナーのコレクションを。左から〈ヴェイパラックス〉のM320、〈デイツ〉のオイルランタン、〈コールマン〉のシングルバーナー、ピークワン。　11.大容量のジュラルミンケースはドイツ軍にも使用されている〈セゴー〉。「シーズンによって使わないキャンプ道具などを収納しています。もうひとつ持っているんですが、それは車に乗せっぱなしにしていてキャンプギアを入れていますね。キャンプではテーブルにもなりますし、イベントなどではディスプレイの什器としても使っています」。　12.09のベンチ側から見たリビング。〈カーミットチェア〉は人気ガレージブランド〈ナチュラルマウンテンモンキーズ〉の専用パーツを用いて、ハイバック化し張替えシートを装着。脚にもエクステンションを着けたフルカスタム仕様。テーブルと手前のスツールは〈チリングキャンピープス〉のもの。　13.メッキ加工された無機質な素材感が魅力の〈メタルシステム〉。サイズが豊富で多彩なオプションパーツもあるのでインダストリアル好きにおすすめのラックだ。「棚の高さを細かく調整できアレンジがしやすいのがいいところ。全部バラバラにするとかなりコンパクトになり持ち運びもしやすい」。　14. 3台所有するラックの1台はキッチンで使用。「引っ掛けられる場所がたくさんあるので、コードなどの配線を隠してきれいにまとめられるのも気に入っているポイントです」。

12

PROFILE

スノーボードショップ勤務
広瀬賢吾 さん

保育士
真理子 さん

SPEC

居住地域 ： 北海道旭川市
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 3LDK
居住年数 ： 4ヵ月
築年数 ： 34年

和室の雰囲気をそのまま生かした室内に、味のある家具がマッチするリビング。木材ならではの温かみのあるナチュラルなカラーの家具が多く、薪ストーブとの相性もバッチリ。低めに作られたソファーの上では、ゆったりとした時間が流れている。

Photo ／ Kyoungho Han　Text ／ Kumiko Nagaso

05	04	01
06		02
08	07	03

01.明るい光が差し込む窓に向かってつくられたキッチンは真理子さんのこだわり。「オープンタイプもいいかなと思ったのですが、外の景色を眺めながら料理をしたいなと」。　**02.**ウエアやボードなどのギアよく使うものを収納し、ビンディングの調節やウエアを乾かすのに重宝しているスペース。　**03.**ソファに合わせたローテーブルは、古材を使ったもので『ミッドシティ』にオリジナルで製作してもらった。　**04.**リビング奥には大きなハンモックを設置。和室にあった収納をそのまま生かし、壁を薄いグレーにペイント。　**05.**ギアスペースのフローリングは、真理子さんの実家で余った木材を活用。左奥にあるキャビネットは、今は亡き真理子さんの叔母から受け継いだものだ。　**06.**薪ストーブの上に置かれた鉄瓶は、加湿のためのもので、これは以前の住人のもの。スピーカーなどのサウンドシステムも前住人が使っていたものをそのまま使用している。　**07.**存在感のあるソファは、古い納屋で使われていた柱でできている。これも『ミッドシティ』オリジナルだ。　**08.**壁に飾られているのは、旭川在住のアーティストKOZO ARTが古いスノボ板に大雪山連邦を描いたハンドペイントの作品。渋いカラーリングで、壁の薄いグレーの色合いに馴染む。ピアノの上には、1976年に真理子さんの父親が撮影したプリモ山の写真などのアートを飾った。

アウトドアと日常、仲間と家とが自然に繋がる理想の空間。

大雪山などの山が近く、パウダースノーを堪能できる絶好の場所に住む広瀬さん夫婦。引っ越してまだ数ヵ月というのが信じられないほど、インテリアアイテムと空間が馴染んでいる。

「勤務先の繋がりで出会った工務店の『ミッドシティ』へお願いして、古い一軒家をリノベーションしました。吹き抜けがある家で、それを生かしながらも開放感が出るようにと、壁をなくし、和室をフローリングに改修。あまり新品すぎる家は好みではないので、事前にどんな家具を置くか細かく相談しながら、家のテイストを決めました」

スノーボードショップで働く賢吾さんは、雪山はもちろん、スケボーやサーフィンなど大のアウトドア好き。ギアの収納や手入れのため和室をギアスペースに変更。ガレージ部分もギアが置けるようにし、薪ストーブ用の薪を収納できる場所も新設。アウトドアライフが楽しめる家が完成した。なかでも、特にお気に入りは薪ストーブを置いたリビングだ。

「この薪ストーブは、実家で使っていたものを運んできました。３００ｋｇもあるので運ぶのが大変でしたね。30年間も使っていた思い出のあるものです」と真理子さん。父親は山スキーやロッククライミングが好きな木工作家だそうで、室内には父親が手がけたイスなど、手作りの家具がいくつもあり、それがこの温もりのある空間を作り出している。

「スノーボードショップで働くなかで、仲間と自然のなかで遊ぶことが生活の中心になった」と語る賢吾さん。この家で友人が集まって食事することも多いのだとか。日常の中で、仲間とアウトドアを存分に楽しめる理想の家ができあがった。

13

PROFILE

NORDISK京都店 スタッフ
酒谷智史さん

SPEC

居住地域 ： 大阪府大阪市
居住形態 ： マンション（賃貸）
間取り ： 1K
居住年数 ： 3年
築年数 ： 12年

【取材協力】
NORDISK CAMP SUPPLY STORE KYOTO
Instagram:@ nordisk_kyoto

温もりのあるカラーリングが落ち着く部屋。オレンジのラグは〈ホースブランケットリサーチ〉、ベッドにあるグリーンのブランケットは〈ノルディスク〉のバッカブルブランケット。左奥の壁には〈マウンテンリサーチ〉のピクニックシートを貼り、テイストを加速させた。

同じタイミングで引っ越した友人から譲ってもらったキャビネット。フラップ扉には本や雑誌を収納し、お気に入りはディスプレイ。収集しているマグで、使用頻度が高いものはこちらに配置している。一時期は100個ほどのマグを持っていたが、約半分に減らしたそうだ。

敬愛するブランドに囲まれた、アウトドア好きのひとり暮らし。

部屋中どこを切り取っても、アウトドアブランドのアイテムが目に入る空間で暮らすのは、京都にある〈ノルディスク〉のコンセプトストアに籍を置く酒谷さん。その住まいと仕事から分かるとおり趣味はキャンプで、充実した日々を送る。アメカジを取り扱う古着屋やセレクトショップのスタッフとして働いていたこともあり、どこかトラディショナルな空気を漂わせるインテリアを作り上げた。

「この部屋は、収納スペースが少ないんですよ。だから、デザインが気に入っているたくさんの小物ギアは飾っています。テントやタープなどの大物ギアは置き場所がないので、玄関にD.I.Y.で設置したシューズラックの下に隠していて。もう少しモノを減らして、部屋を広く見せられるようにしたいと思っています」。そう話すように、多くの小物がディスプレイされているが、アウトドア関連のアイテムが大半を占めるため、統一感が生まれている。大好きな〈ノルディスク〉や〈マウンテンリサーチ〉を中心に部屋をコーディネートしていて、それと相性のいいナチュラルなカラーリングでまとめているのもポイントだ。「前はシェアハウスに住んでいたので、自由にインテリアを楽しめませんでした。ここに引っ越してきてから、好きなものを並べたり、植物を育てたりするようになって。最近コーデックスに葉っぱが生えて、嬉しいんですよね」。

好きなものだけを詰め込んだ部屋は、居心地がいいに決まっている。それらに囲まれながら、大好きなコーヒーを淹れてひと息つく瞬間は、日常で感じるこれ以上にない至福の時間と言えるだろう。

05	04	01
06		02
08	07	03

01.ベッドの横には、『無印良品』の収納ボックスを配置。大きいほうには焚き火台などのキャンプギアをまとめ、小さいほうには寝具を収納。ベッドサイドテーブルとしても機能する。　02.〈マウンテンリサーチ〉のダストパンは、自宅で活用しつつ、キャンプにも持ち出している。その横には同ブランドのスケートデッキを陳列。　03.〈ノルディスク〉のトライポッドスツールは、実用性を兼ねたインテリアとして活躍。キャンバスとウッドが部屋と調和する。　04.壁にも外遊びを感じるアイテムをディスプレイ。時計は古着屋で購入したもの。切り離した〈マウンテンリサーチ〉のルックブックや、ゴッホ展とコラボレーションした『ピーナッツ』のメッセージカード、写真を額装してアートの彩りをプラスした。　05.〈キャプテンスタッグ〉のアルミベンチに、〈ペンドルトン〉のブランケットを掛けている。「ベンチは前々から気になっていて、たまたま行ったお店で勢いに乗って買いました。専用カバーを取り付けていて、座り心地がいいです」。　06.キャビネットの上に置いたのは、趣味のコーヒー機器やランタン、植物など、収納しきれない小物類。植物のポットは〈ダルトン〉で統一しているそうだ。　07.〈ニトリ〉のロールトップテーブルには、〈マウンテンリサーチ〉のランチョンマットを。　08.キャンプ用に購入した〈コフラン〉のバンジークローズラインは、今や家の収納の一角。キャップや〈ゴールゼロ〉のランタンを吊るしている。

14

PROFILE

SEEKスタッフ
ゆり さん

会社員
しょうへい さん
そうた くん

SPEC

居住地域 ： 北海道札幌市
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 2LDK
居住年数 ： 1年
築年数 ： 1年

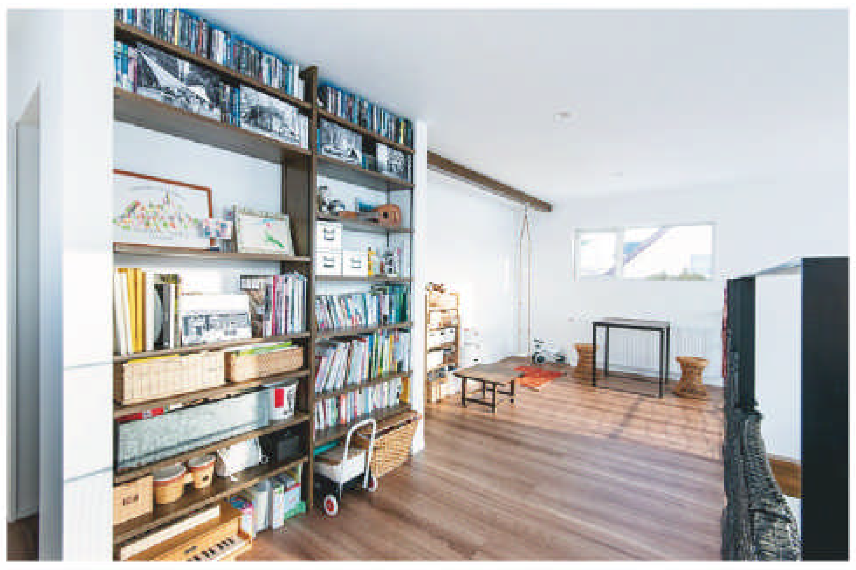
玄関から繋がる開放的なリビングキッチン。2階部分は吹き抜けで天井が高く、玄関やキッチンを壁で区切りを付けておらず広々としている。オープンタイプのキッチンは、料理をしながら子どもと話ができ、家族とのコミュニケーションがスムーズになる。

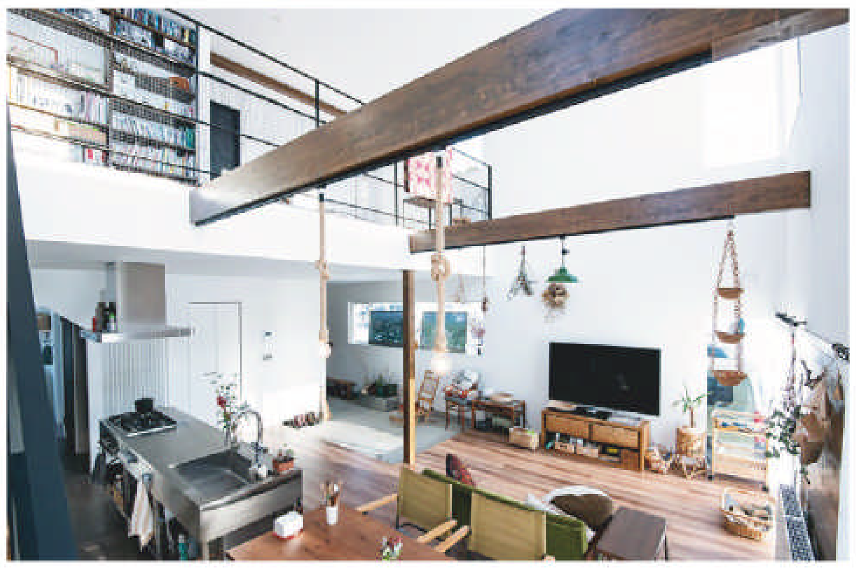
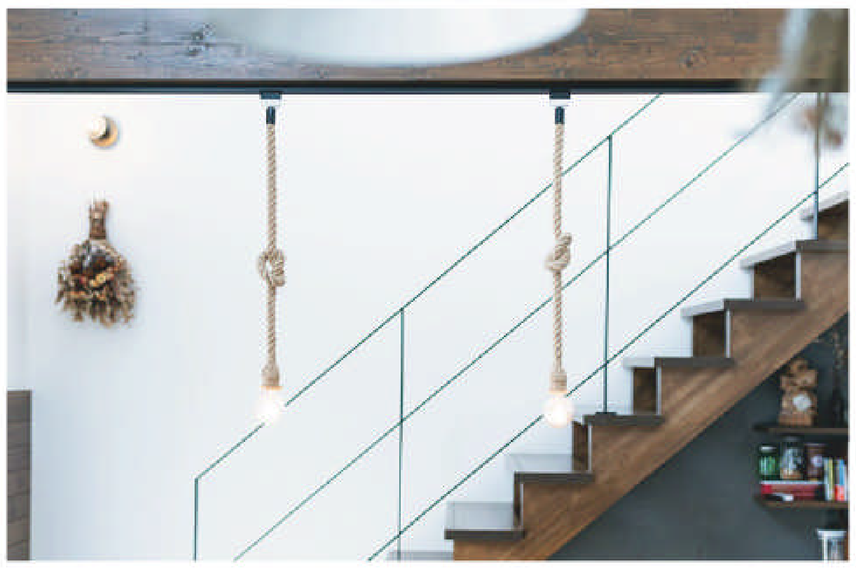
玄関横には、家族分の靴やテントやバックパックなどアウトドアライフのためのギアを存分に収納できるストレージがある。使用しなくなった〈L.L.ビーン〉のトートバッグを活用し、見栄えよくスッキリ収納。オープンなので、濡れたウエアを乾かすのにも便利。

Photo ／ Yusuke Yarimizu　Text ／ Kumiko Nagaso

05	04	01
06		02
08	07	03

01.2階の吹き抜けに造られたスペースには大きめの棚が設置され、本やおもちゃが大量に収納できる。この棚もオープンタイプ。　02.2階の吹き抜けにある収納。棚板は可動式で高さを調節できる。趣味の山や絵本、DVDなどがズラリ。日当たりがいいので、本の背表紙が日焼けしてしまうのが悩み。　03.縄でできたユニークなペンダントライトは、ユリさんが働くショップ『シーク』でも使用しているもの。　04.玄関脇にある土間部分。木製の手押し式のソリはリサイクルショップでの戦利品。窓部分に飾られた2枚のポスターは、目隠しとしての役目も。「カーテンを購入するつもりなんですが、気に入ったのが見つからないので、とりあえずフレームでカバーしています」と、家のなかのモノをひとつひとつ吟味している。　05.リビングダイニング部分の壁には木材を貼り、ディスプレイに最適なスペースに。ユリさんが好きで集めている古いラタンのアイテムが実用も兼ねて至る所に置かれている。　06.業務用のステンレスのシンクがインダストリアルな雰囲気のキッチン。シンク下も収納をつけずにオープンタイプ。　07.階段部分からリビングを見渡したところ。玄関からリビング、キッチン、ダイニングが繋がり、広々とした空間だ。　08.玄関には焚き火のための薪やスノーシューなどのギアに、さりげなくドライフラワーを飾っている。



開放感のある広々とした空間に、古い雑貨たちが温もりを加える。

札幌のアウトドアギアやアパレルを扱うショップ『シーク』でスタッフとして働くユリさん（Instagram：@yuurie）は、中心部から少し離れた住宅街に一軒家を建てた。畑もあり景色がよく、のどかさと利便性を考えてこの場所に決めた。「この土地には古民家が多く、当初はその建物をフルリノベ予定だったのですが、調べたところ地盤が悪いことがわかり、新築することに決めました。キャンプや登山が家族の趣味なので、アウトドア道具の出し入れがしやすいように、玄関脇の収納や土間は広め。床暖が入っていて、濡れた靴もすぐに乾くんです」。部屋ごとの区切りがなく、開放的だ。

「ドアや扉を開け閉めするのが好きじゃないし、固定資産税が安くなることもあって、部屋数もドアも最低限。薪ストーブも憧れましたが、コストも手間もかかるので、パネルヒーターにしました。飼っている猫4匹が自由に動き回れるように床材は傷がつきにくい合板のフローリングです」と、予算内に抑える工夫も多い。

「片付けが得意ではなく、あえてオープンタイプの収納にしてキレイな空間を保つようにしています。好きな雑貨を飾るのも楽しいですしね。スッキリとした空間のために余分な物は置かず、鍋でお米を炊く、ガスコンロでパンを焼くなど工夫をしています」と、片付けのモチベーションを保つアイデアを教えてくれた。室内のところどころにディスプレイされた古い雑貨は、リサイクルショップを回って破格で手に入れたものばかり。光が差し込む室内には、味のある古いものが暮らしに彩りを加えてくれる。

15

PROFILE

会社員
teshi-lowさん

SPEC

居住地域 ： 埼玉県所沢市
居住形態 ： マンション（賃貸）
間取り ： 1LDK
居住年数 ： 38年
築年数 ： 2年6ヵ月

試してはみたものの直近のスタイルには合わなくなったキャンプギアたちを室内で使用中。家具類は無骨な趣きのあるインダストリアルテイストが好みとか。現役のギアたちはほぼ車内で保管し、趣味はほのかに匂わせるくらいがteshi-lowさんの流儀。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Takehiro Hakusui

キャンプギアとインダストリアルファニチャーを、巧みにミックス。

年間30泊ほどこなし、近年注目を集める新鋭ガレージブランドへの造詣も深いteshi-lowさん（Instagram：@teshi-low）の住まいは、生まれ育った言わば地元にもほど近い所沢市の住宅地。「ご時世的にもキャンプブームで、どこも予約が取れなくなってしまったので、最近は野営が中心です」というように、関東近県のキャンプ場だけでなく、今や北陸地方なども守備範囲のよう。「その点、僕の地元は山にも職場にもアクセスしやすいエリアですね」という。

SNSへのポストを拝見する限りさまざまなギアが見て取れるものの、生活空間にあまりその影は見られない。「現役で使用中のギアは基本的に車内で保管しています。いくらキャンプが好きとはいえ〝家の中までギアだらけ〟みたいな感じにはしたくなかった」とか。

わずかに見られる〈ヴェイパラックス〉のオイルランタンや〈スノーピーク〉のシェルフコンテナといったギアたちは、取捨選択を重ねるうち現状のスタイルでは使わなくなったものが中心。そんなかつての相棒たちを各国のインダストリアルファニチャーやミリタリーギアにさり気なく溶け込ませている。「キャンプギアも家具も道具然とした無骨なものが好みではありますが、こう見えて最近はあまりモノを増やしたくないと思っていて（笑）。ミニマリストのように厳格な縛りはないものの、自分のスタイルにハマり、なおかつ必要最低限のモノだけで遊びも生活もしたいと最近は考えるようになりましたね」。

06	02	01
07	03	
08	05	04

01.読書やくつろぐ際のメインチェアは定番の〈カーミットチェア〉。インダストリアルな趣きあるテレビボードはじめ、家具類はほぼウッド×ブラックアイアンで統一している。　02.同じくブラックアイアンのキャビネットは『ジャーナル スタンダード ファニチャー』の定番モデル、ギデル 24ドロワーチェスト。ハンドペイントのタイポグラフィや絶妙なひび割れ加工がさながらヴィンテージを思わせる。　03.欧米諸国で20世紀初頭頃に使われていた台車に着想を得た同じく『ジャーナル スタンダード ファニチャー』のローテーブル。「車輪が付いているのでちょっとした移動もラクです」。ひとり暮らしとあって暖房も〈アラジン〉のグラファイトヒーター 1台で事足りるそう。　04.06.負傷兵を運ぶ際の担架として米軍で採用される〈NAR〉のスパインボードをカウンターテーブルに代用。国産ガレージブランド、〈38エクスプローラ〉の三脚を利用したミニカウンター「38 パレット」に着想を得たとか。　05.リビングのメインライトは鎌倉ベースの照明ブランド、〈ハモサ〉のもの。　07.以前はキャンプにも持ち込んでいたというシェルフコンテナは現在ブックラックとして活用中。　08.X-パック素材を用いたコインケースなど随所に見られるミリタリーな趣きもフェイバリットのひとつ。「キャンプギアもそうですが、ミリタリーのみで統一すると僕には無骨過ぎるきらいもあるので、ポイント的に取り入れてます」。

16

PROFILE

会社員
中島 透 さん

主婦
由賀 さん

SPEC

居住地域	：	神奈川県三浦郡
居住形態	：	一戸建て(持ち家)
間取り	：	1LDK+土間+サービスルーム
居住年数	：	3年
築年数	：	4年

【取材協力】
エンジョイワークス
https://enjoystyles.jp/

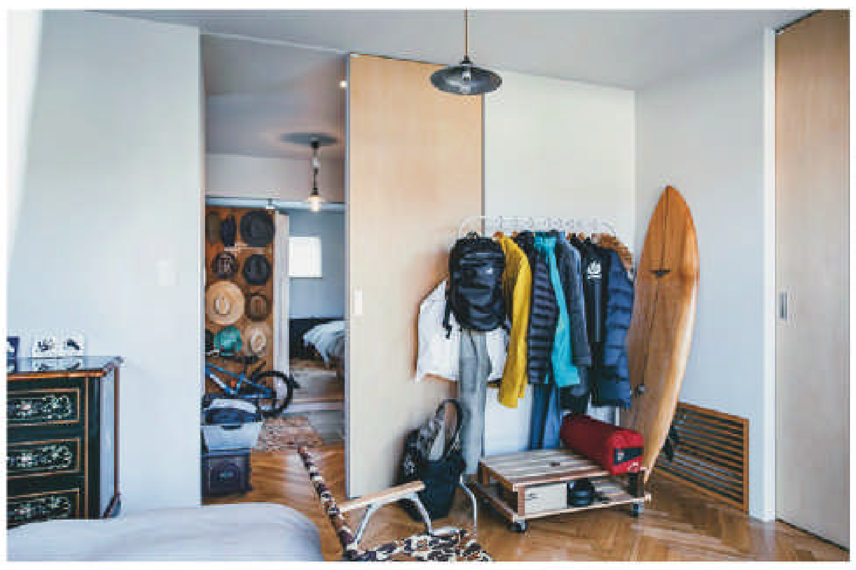
LDKは2階に位置し、陽光が注ぐ窓は外から屋内が見えづらい造り。夜もレースカーテンを引くだけで安心だ。インテリアは白壁と逗子にある『相談家具屋』にオーダーしたというウッドのテーブルがナチュラルな印象だが、そこにデニム地のソファがアクセントに。

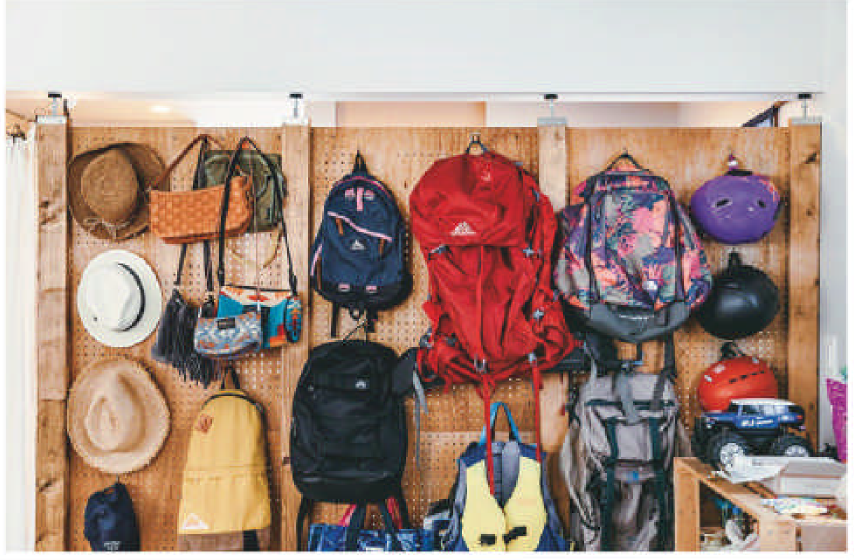
D.I.Y.のスケボーランプは千葉県にある『ランプショップ』でキットを購入。中島さんは親子揃ってスケボーを楽しみ、愛娘と愛息は競い合うようにして技を磨いているそう。ちなみに家の外壁は、経年によってシルバーグレーに変化する色味が魅力のレッドシダー。

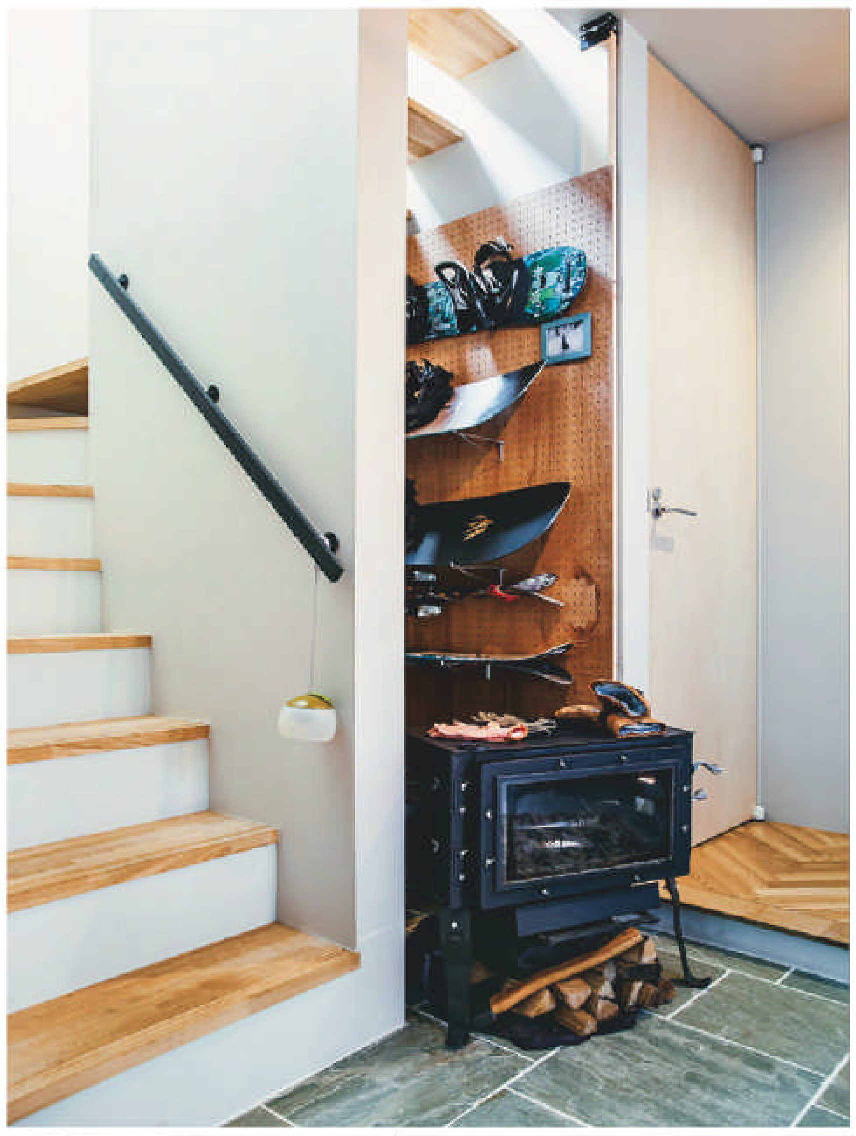
Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya

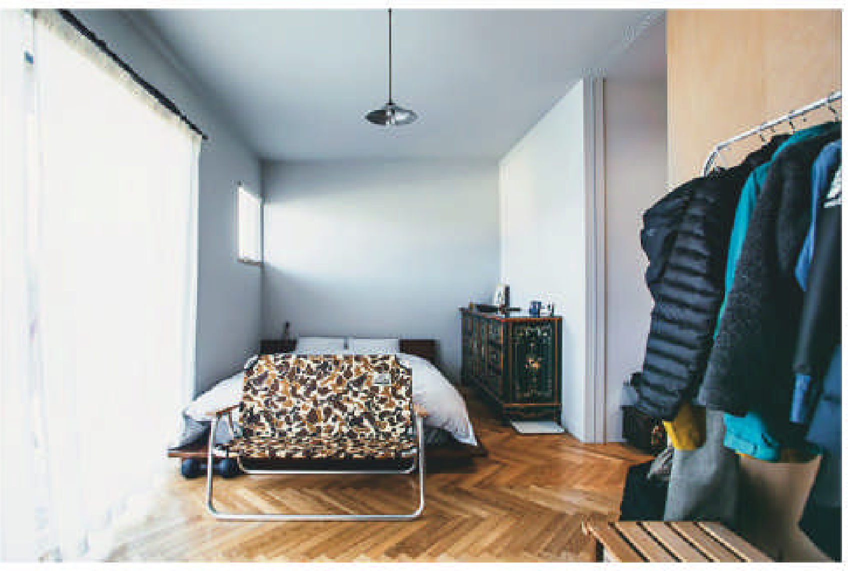
06	02	01
07	03	
08	05	04

01.こちらが土間と子ども部屋を隔てるD.I.Y.のパーティション。2×4材とピラーブラケットで柱を立て、ペグボードを設置。中島邸は収納の少なさがネックだそうだが、この仕切りを活用することで"見せる収納"に。　**02.**テレビボードも足場板と〈ツールボックス〉のパーツで自作。隣に見える木製のローチェアは、意外にも『ニトリ』だそう。　**03.**ペグボードを用いたパーティションの向こう側が、子ども部屋として使用しているサービスルーム。入り口にカーテンを設置し、プライベート感を確保している。　**04.**「購入した状態から、ほとんど手を加えていません」というキッチン。木目の表情豊かなベースキャビネットも、部屋のアクセントとして利いている。　**05.**こちらはキッチンパントリーのひとコマ。「目に見える場所にあるほうが、すぐに持ち出せるから」と、日用の食器とともにキャンプ用のカップやダッチオーブンも並ぶ。外遊びが身近にある中島邸こそのラインナップ。　**06.**タウンユースとアウトドアユースのアウターが混在し、さらにはウェットスーツも並ぶハンガーが、家主のアウトドア好きを物語る。　**07.**こちらにもペグボードを用い、階段下のデッドスペースを収納として活用。外遊びのギアが並び、〈新保製作所〉のストーブもキャンプ用。　**08.**中島邸で唯一、仕切りがあるのがベッドルーム。ヘリンボーンの床が白壁のシンプルな空間にアクセントをもたらし、〈キャンプアウト〉の迷彩柄ベンチも映える。









屋外も屋内も楽しい、葉山の小高い丘に建つ"スケルトン"な家。

中島さんは大の外遊び好き。サーフィンに始まり、キャンプやトレラン、サップにカヤックまで嗜み、なかでも登山は縦走まで楽しむほどの本格派だ。その中島さんをして「最近、山に登る機会が減ってしまって」と言わしめるのが、現在のマイホーム。

中島邸は海岸を見下ろす小高い丘の上に建ち、海にはもちろん、トレランのコースにも難なくアクセスできるロケーション。「ちょっとした買い物に出掛けるにも、あえて山道を選べばトレランの気分。遠出をしなくても十分、自然を満喫できます」。登山の機会が減ったのにも納得だが、この家に暮らし始めて以降、新たに加わった趣味がD・I・Y・だ。

住まいを手掛けたのは葉山・鎌倉・湘南に特化した『エンジョイワークス』。"家づくりを自分ゴトにする"をコンセプトに、家主自らが家を完成させる余白を残した"スケルトンハウス"が人気だ。中島さんも「この家にはほとんど仕切りがなく、だからこそ、自分たちで完成させる楽しみがあります。実際に土間と子ども部屋のパーティションは自作。子どもたちの独立後には仕切りを取り払い、土間を広げることも考えています」と、その余白をエンジョイ。

さらに中島さんは広々とした庭でキャンプを楽しむだけでなく、スケボー用のランプまで設置。今後はランプを拡張し、アクティビティのギアを収納するための小屋をD・I・Y・することも考えているそう。

そう、中島邸の魅力は自然を謳歌できるロケーションだけではない。家主にD・I・Y・という新たな趣味をもたらし、さらには家族の未来をも想像したくなる家なのだ。

17

PROFILE

BOOTSYORK.style
インテリアスタイリスト
遠藤慎也さん

SPEC

居住地域 ： 東京都世田谷区
居住形態 ： テラスハウス（賃貸）
間取り ： 3LDK
居住年数 ： 3年
築年数 ： 約40年

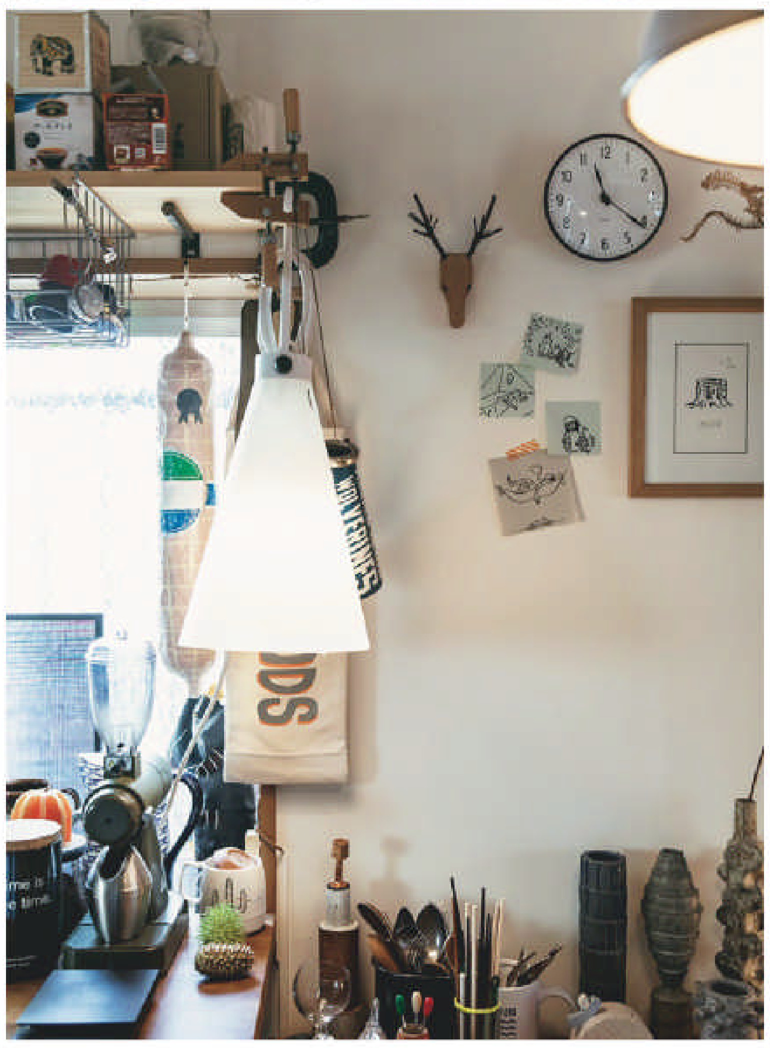
審美眼が光る、テイストに縛られないインテリア。

あらゆるインテリアスタイルを提案する遠藤さんが暮らすのはテラスハウス。「以前は隣に友達が住んでいて、部屋が空くと聞いて引っ越してきました。一番の決め手となったのは庭です。D.I.Y.をするにはちょうどいい広さですし、撮影のために買った植物などは室内に置ききれないので外に設置しています」。

その庭は物件の南側に位置するが、周囲に住宅が立ち並んでいるため、満足できる自然光は室内まで届かない。そのため、日中でも照明を点灯しているそうだ。「部屋の中はあまり日当たりがよくないし、集めるのが好きなので、ライトをいくつも置いています。基本的に光量が強すぎない電球を選んでいて、高さを変えたり点在させたりすると、影が重なり合って空間に奥行きが生まれるんですよね」。

室内を見渡してみると、物量はやや多め。それは、私物も撮影の備品として使用しているからだ。「家具から小物まで、仕事でも使えるもの、が買う条件。少し高価でも、いつか撮影で使用するから、と自分に言い聞かせて買っちゃっていますけどね（笑）。職業柄、いろんなスタイルのインテリアを作り込むので、いろんな要素がミックスされた部屋になっています。だから、部屋のテーマとかは特にないんですよ」。そう語るように、さまざまな国や年代の小物がたくさん並んでいるが、不思議と雑然とした印象は受けない。「小物はいろんな場所に置くとゴチャつくから、ジャンル別にディスプレイするコーナーを設けてまとめるようにしています」と話すが、その秀逸なセンスは、インテリアスタイリストの腕があるからこそと言える。

住まいの拠点となるリビングダイニングには、北欧からイギリス、イタリア、D.I.Y.した家具までが揃う。フロアライトやネオンサインなど、いくつもの光源を部屋中まばらに配置しているところに注目。ドライフラワーを吊るしたデッドスペースの活かし方もポイント。



01.ホームセンターで購入した天板と脚で棚を作り、キッチンの作業スペースを拡張。その一角には、毎日欠かさず使うコーヒー器具をまとめている。　02.目線にあるライトは、柔和に輝く光が心地いい〈フロス〉のメイデイ。アンティークのクランプを使って吊り下げるテクニックは是非とも参考にしたい。　03.キッチンの収納を広げるためにラックもD.I.Y.。ピラーブラケットを用いたことで2×4材の柱が簡単に完成した。　04.この住まいを選ぶ際の決定打となった庭でD.I.Y.をこなしている。人工芝を敷き、ハンモックやソファも配してくつろぎのスペースとしても活用。撮影で活躍した植物がのびのびと育ち、庭を賑やかに演出している。ここにキャンプギアを広げて食事をすることも。　05.キッチンの収納スペースが少ないので、左側にも自作の棚を設置し、炊飯器やウォーターサーバーなどをセット。ダイニングテーブルを照らすホーロー製のランプシェードは『プエブコ』で購入したもので、あえてコードは長めにたゆませている。　06.玄関のシューズボックス上には、アメリカの陶芸家アダム・シルヴァーマンの陶器と、ガラス製のヴィンテージ品を置き、外出時の携帯品を据える。手前にある木彫りの山は、木工作家の高野夕輝さんによる大人気の作品。　07.世界各地の民族人形や〈ハーマンミラー〉のイームズハウスバードなどをディスプレイするスペース。ちょっとした隙間も小物の陳列に有効活用しているようだ。

11	08
	09
12	10

08.廊下にインダストリアル系のライトを設けているが、賃貸物件ならではの工夫が施されている。「退去時の原状回復を考慮して、長めの画鋲を使って引っ掛けているだけ。意外としっかりと固定されています」。よく着用している帽子はこちらにストック。　09.〈イケア〉のコルク天板と、『アクメ ファニチャー』で購入したヴィンテージの脚を組み合わせたダイニングテーブル。コルクの質感は、ナチュラルな木目を活かした部屋に溶け込みつつ、その表情がいいアクセントになっている。奥に見える照明は、工業系のウォールランプ。　10.ローテーブルはイギリスのヴィンテージ、デイベッドとしても使用可能なソファはハンス・J・ウェグナーによるデザインで、部屋にしっくりと馴染んでいる。　11.窓際の照明は、〈イッタラ〉のレイム。その周囲に、山をモチーフにしたオブジェが列をなしている。「このライトは国内で販売されず、フィンランドへ行った友達に頼んで買ってきてもらいました。周りに山がデザインされているスノードームやガラス製の小物を置くと、反射して見え方が変わります」。山がモチーフになっている小物が好きで、見かけるとついつい買ってしまうそう。　12.ウッドデッキにも撮影で使用した植物が無数にラインナップ。奥に見える白いソファも撮影で使った〈イケア〉のもの。外での使用に躊躇しがちなホワイトだが、グリーンとウッドのコントラストによって、クリーンな洒落感を漂わせる。

PROFILE

プロダクトデザイナー
淡田洋平さん

SPEC

居住地域 ： 滋賀県大津市
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 2LDK
居住年数 ： 約5年
築年数 ： 約5年

2階の天井までそびえ立つ「ハシゴde本棚」。手の届く範囲には普段よく使うキャンプギアや靴などを収納。こちらでギアを選んですぐに右側のドアから庭に出られるという見事な導線設計。土間には観葉植物が置かれ、屋内にいても自然が身近に感じられる。

機能的でありながら、自然を楽しむ遊び心のある暮らし。

琵琶湖の西側を南北に走る比良山系。その中で3番目の高さを誇る蓬莱山の麓、いまだ豊かな自然が残る地域に淡田さんの住まいはある。

以前は東京に暮らし、〈日産自動車〉で車のカラーデザインを担当するCMFデザイナーとして働いていた淡田さん（Instagram：@yohei_awada）は、5年ほど前家族でこちらに移住するのを機にフリーランスのデザイナーとして独立。住宅メーカーの『ベス』で家を建て、理想の暮らしを実現した。ご自宅は木をふんだんに使い、内装は全面板張り。木の優しい質感に包まれるような温かみのある佇まいとなっている。

淡田邸に入ってまず目に入るのが、「ハシゴde本棚」と呼ばれる大容量の収納。こちらは『ベス』のデバイス（装置）と呼ばれるオプションで、吹き抜けの一面に造作された棚は、ハシゴを使って上まで登ることが可能だ。淡田さんはこちらに使用頻度の高いキャンプギアなどをディスプレイ。見せる収納として活用していた。淡田邸のもうひとつのユニークな造りが通し土間。土間が玄関から反対側にある庭まで屋内を通じて繋がるように配されていて、家の内外の空間がシームレスに行き来できる構造に。「ハシゴde本棚」もこの導線上に設置されている。

「靴を履いたままで外と出入りできるのが通し土間のいいところですね。棚からギアを選んですぐにアウトドアに向かえます」。

自然を楽しむことを前提に考え、造りもインテリアも機能的にレイアウトされた淡田邸は、アウトドア好きならではの住まいと言えそうだ。

Photo ／ Nobuya Fuke　Text ／ Mitsuto Matsunaga

蓬莱山と琵琶湖の間に位置し、豊かな緑に囲まれた淡田邸。ウッドデッキの前には大きな庭が広がる。自宅にいながらにしてこれだけ開放的なスペースで過ごせるのは羨ましい限り。こちらは建物の背面側となり、写真に見える土間の反対側に玄関が配置された。

イギリス、〈チャーンウッド〉社製の薪ストーブ。冬でも暖房を使わずこれ1台で家の中が全部暖まるのだそう。薪入れに使うのは〈スノーピーク〉のシェルフコンテナ。「裏庭から薪を運んできて入れるのも楽ですし、たくさんためておけるので重宝してますね」。

01. 1階をつらぬく通し土間は外の庭まで続いている。左側のバーカウンターのように見える場所は、飼っているフクロウのための禽舎。ウッドデッキの軒と04のツリーハウスのデザインは淡田さん自身が手掛けたのだそう。　02.吹き抜けにある窓のおかげで1階まで日の光が差し込む。正面のドアの向こう側が上の写真の右側に見える土間に繋がっている。　03.家の入り口から通し土間の壁に沿ってカウンター状に天板を配置。このエリアは仕事で必要なプリンターなどの機器を置きワークスペースに。上に見える本棚と共に知人のインテリアデザイナーに作成を依頼した。　04.ツリーハウスとウッドデッキは同じ大工さんに作ってもらい、材料選びから一緒に行った。中央の太い支柱に使っているのは滋賀県で伐採された地域材の「びわ湖材」、屋根や壁には足場板を使用している。手前には天板が渡してあり、コーヒーを飲んだりメールをチェックしたりしながら過ごすこともあるのだとか。広さはおよそ2×2mほど。「ここに座るとちょうど琵琶湖が真正面に見えるんですよ。すごく気持ちいいですね」。　05.「周りがほぼキャンプ場みたいな感じなので（笑）、庭にテントを張りキャンプすることもあります」とのことだが、琵琶湖の湖畔にソロキャンプ行くこともしばしば。そのため「ハシゴde本棚」にもソロ用のギアが多く並ぶ。「ミリタリー系やクラシックなテイストのギアが好きですね」。

04	01
	02
05	03

11	06	
12	09	07
13		
14	10	08

06. 2階の吹き抜け横には職業柄多くの本や雑誌が。上に飾られているのは亀倉雄策氏がデザインした、1964年開催の東京オリンピックのポスター。「右から2番目のポスターを小学5年生の頃に見てすごく感動したんですよね。僕がデザイナーになろうと思ったきっかけです」。　07. 「ハシゴde本棚」の棚は高さを調節可能なので、収納するものに合わせてオーガナイズできる。　08. 「飾り棚にあるランタンは夜ツリーハウスをライトアップするときに使っています」。　09.ワークスペースの隣はテレビ台として使用。下に見える黄色とグレーのバケツのスツールは京都に『ザ・ノース・フェイス・スタンダード』がオープンしたときに購入。　10. 「遊びで作った」というジオラマには、〈日産自動車〉の好きな車種だというテラノとサファリを。　11. 〈ザ・ノース・フェイス・スタンダード〉の飯ごうに土を入れて植物のポット代わりに。手前に見えるのは淡田さんのデザインスタジオのロゴだ。　12. 〈ロッジ〉のスキレットを使い、薪ストーブで調理することもあるそう。薪ストーブに火をつけるために使う手前のバーナーには〈バリスティクス〉のカバーを装着。　13.階下を見下ろせる2階の吹き抜け部分には〈ザ・ノース・フェイス〉のテーブルとイスをセット。　14.こちらはテレビの上の飾り棚。真ん中に見えるのは鹿の角でまだ家が建つ前の土地に落ちていたそう。「台をつけて守り神のように飾っています（笑）」。

19

PROFILE

アウトドアブランド勤務
YUKIさん
CHIAKIさん

SPEC

居住地域 ： 東京都杉並区
居住形態 ： マンション（賃貸）
間取り ： 1R+土間+テラス
居住年数 ： 9ヵ月
築年数 ： 3年

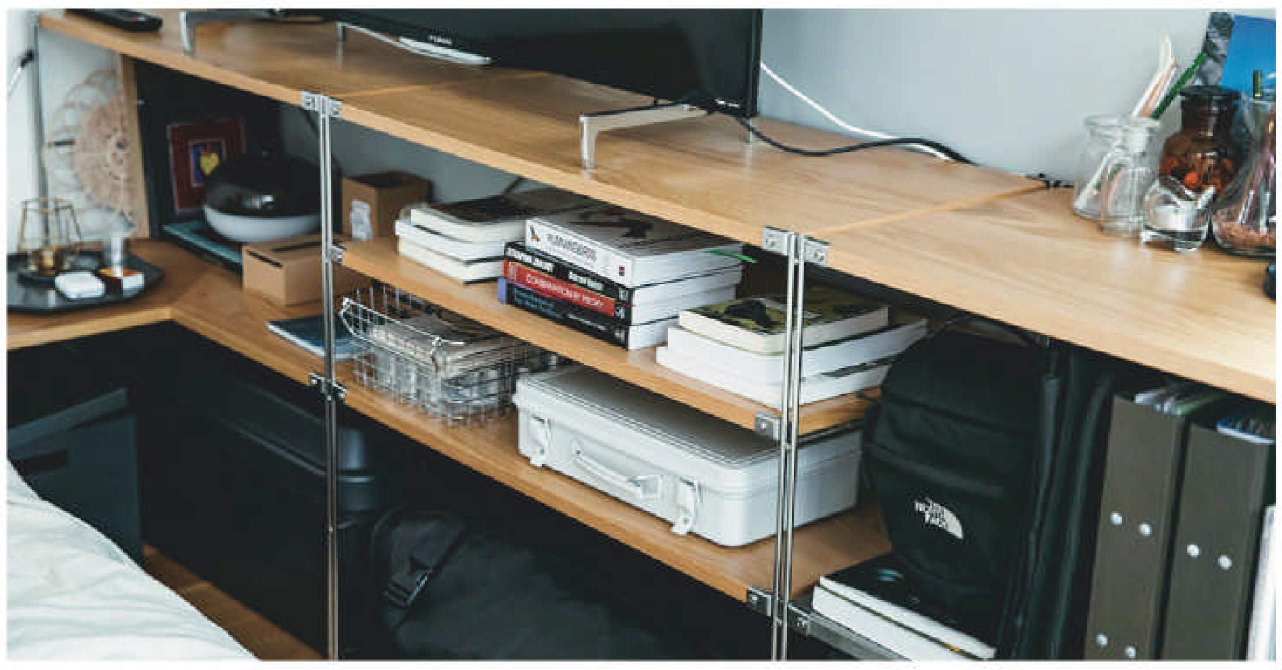
夫婦揃ってこの物件を選ぶ最大の決め手となったと語ってくれたウッドデッキを備えたテラスからのワンショット。玄関からシームレスでテラスへと繋がる土間スペースを通り、テントやタープなど汚れた外遊びの道具をそのまま運んで天日干しでき、かなり便利とか。

「賃貸に見せない暮らし」をテーマに、趣味と暮らしが静かに同居する。

ご主人のYUKIさんは、某大手アウトドアブランドで各店舗のSNSにおけるビジュアル面を統括する仕事をしつつ、プライベートでは「賃貸に見せない暮らし」と題したライフスタイル中心のポストをインスタグラムにて展開している。「当初は店舗や商品紹介のために一眼カメラを手に入れ、独学で写真の勉強をしつつ投稿していたところ、それが現在の仕事へと繋がった」と語る。

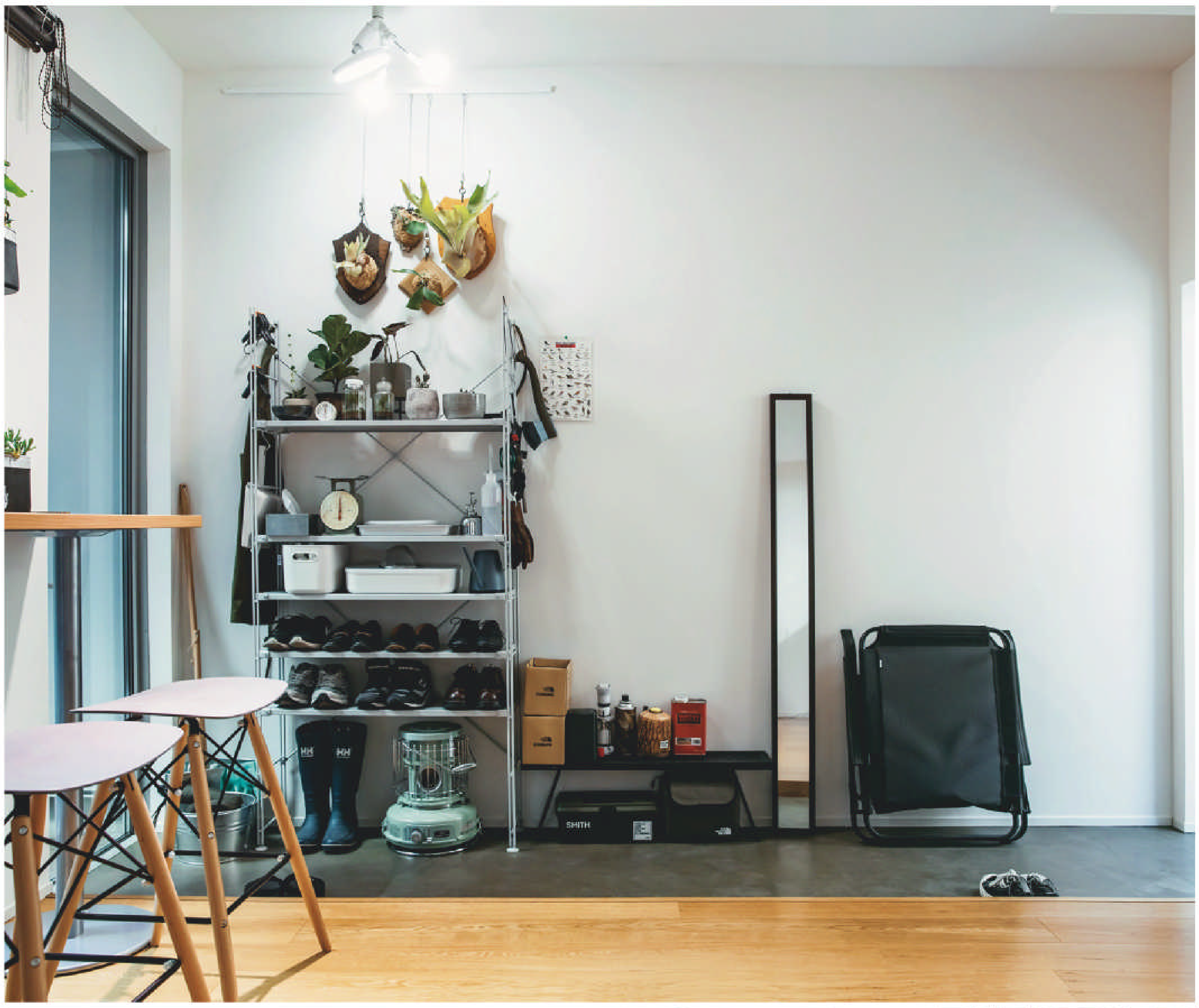
上京が決まり、わずか1週間ほどで即決したという、こちらの物件は「もともと福岡に住んでいた際も、ちょっと変わったバルコニーのある物件だったのですが、それを基準で探していたら、たまたまヒットした」という築3年余りのデザイナーズ。全部屋からシームレスにアクセス可能なテラススペースが何よりの決め手だったと振り返る。「ネット経由で物件詳細を見たときは、テラスに雪が積り、奥に見えるシマトネリコの植栽もやや元気のない感じだったのですが、やっぱりこの開放感はほかにはない魅力でしたね」。

もちろん趣味はアウトドア。キャンプはじめブッシュクラフトや野鳥撮影なども夫婦揃って楽しむというが、「キャンプギアの類はなるべく見える部分から遠ざけ、一方でキッチン周りや寝室部分のほかに、各種グリーンなどで見せる収納とインテリアを楽しんでいる」という。「仕事柄、衣類やキャンプギアをメインに扱ってはいますが、生活空間では可能な限り最小限に抑えたいと考えています。一方で夫婦の趣味や暮らしの道具を今後も充実させていきたい」と語ってくれた。



01.ベッドルームのテレビボードは『無印良品』の定番でもあるユニットシェルフ。家具類は備え付けだという『無印良品』のキッチンシンクに合わせ、基本的には同じブランドのアイテムがメインながら、それらに馴染む雑貨などもインスタグラムで紹介している。　02.編み物が趣味という奥様の小さなワークスペース。随所に見られる籐の編みかごは奥様によるハンドメイドとか。　03.備え付けのキッチンシンクは『無印良品』と『サンワカンパニー』が共同開発した「MUJI+KITCHEN」のユニットタイプ。奥様的にとってはこのキッチンもまた決め手のひとつだったという。また、ブラックのトランクカーゴは〈ゴードンミラー〉の別注モデルをご愛用。　04.最近レイアウトを変更したというベッドルーム。側面のユニットシェルフで趣味の道具を一括収納していた。　05.ハンティングトロフィーを模したビカクシダなどのグリーンには、『イケア』のヴェクセルLEDを育成ライトに使用していた。　06.すくすくと育ったシマトネリコが目を引くテラススペース。現在はポットがメインながら、「暖かくなってきたら直植えにもトライしてみたい」とか。　07.パイン材で設えたボードにカーブを描くブラケットを合わせたキッチンラックはともにD.I.Y.。「このエリアはインスタグラム（@sky___photo）の投稿の中でも特に好評です」。　08.土間スペースには、最近手に入れたという〈センゴクアラジン〉のガスストーブはじめ、工具類やLEDランタンなど屋内外兼用の道具類をまとめている。

06	05	01
		02
07		03
08		04



12	09
	10
13	
	11

09.「ご時世的にリモートが増えたため、急ごしらえで組み上げた」というワークスペースには、テラリウムや自身で撮影したという野鳥のポートレートを飾り、「サイエンスな雰囲気を意識している」という。『無印良品』のユニットシェルフにステンレスボードを渡し、仕事関係の小物類をまとめつつ高さを合わせた絶妙テクニック。　**10.**ベッドルームからもテラスが一望できるものの、今現在はハンギングタイプのポールラックを目隠し的に活用。とはいえ、あくまで一時的な仕様なんだとか。「気に入ったカーテンが見つかるまで、日除けとしても機能してもらいます(笑)」。　**11.**夫婦揃って食事をしたり、茶を楽しんだりするというカウンターテーブルには、ネット通販で購入したという100cm高のスツールがジャストフィット。ここにも各種エアプランツはじめ、さまざまなグリーンが見て取れる。　**12.**土間スペースのメインラックも『無印良品』のユニットシェルフ。「ユニットシェルフは拡張性も高く、シーンや気分によって素材まで選べるので気に入っています」と話すように、ここにはステンレスモデルをセレクトしていた。　**13.**美しいホワイトオークと無駄のないステンレスレッグが印象的なデスクチェアは、日本を代表する家具メーカーとして知られる『飛騨産業』と『ロウヤ』によるコラボレートモデルをご愛用。ご夫婦揃っての趣味のひとつでもあるカメラは防湿庫でしっかり管理していた。

20

PROFILE

ビュートリアム 鎌倉小町
エリアマネージャー
増山大輔 さん

モダーン オーナー／
ヘアイメイクアーティスト
増山（横田）千明 さん

SPEC

居住地域	：	神奈川県鎌倉市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	3LDK＋ロフト
居住年数	：	3年6ヵ月
築年数	：	3年6ヵ月

【取材協力】
スタジオ・レオン
https://studioleon.co.jp/

Photo／Chie Kushibiki　Text／Kyoko Oya

名建築のエッセンスと多様なテイストが生む、唯一無二のマイホーム。

増山さんは伊豆大島出身。海が身近にあったからだろう、趣味はサーフィンだ。かねてから「家を建てるなら海の近くに」と考えていたそうだが、同時に建築好きでもある。海へのアクセスのよさはもちろん、開放感を生む広い土地にもこだわり、土地選びに4年もの歳月をかけたという。

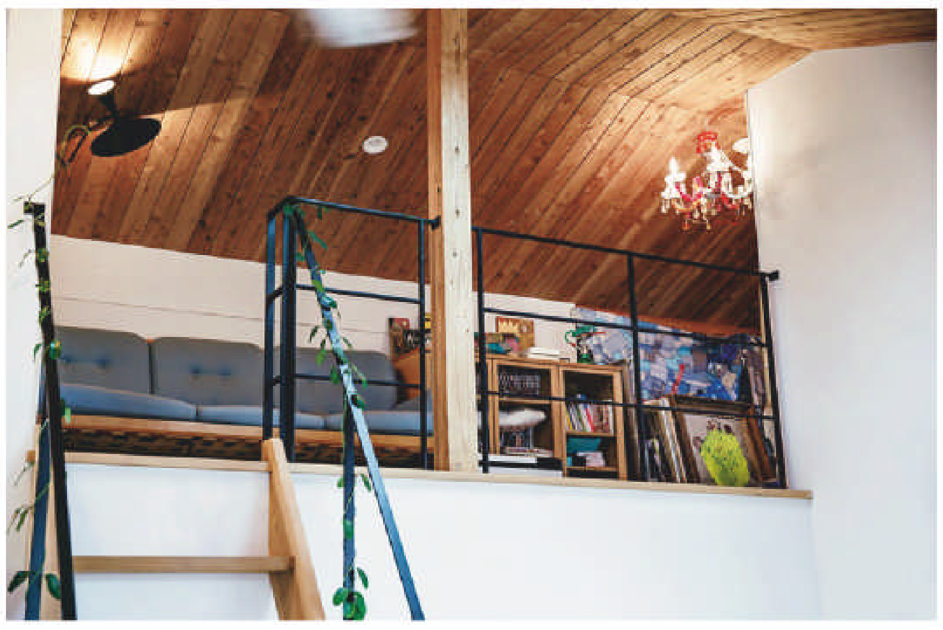
その結果、家が建つのは海に程近い高台の上。敷地面積200㎡以上という広さのみならず、高台に建つがゆえの景観が見事。まさに借景だ。

この借景を可能としているのが、デッキとリビングを隔てる引き込み窓。窓を開けると建具のすべてが戸袋に納まり、より一層の開放感を生み出すが、これは戦後日本を代表する建築家、吉村順三の設計からヒントを得たという。そして太い木枠が印象的な出窓はメキシコ人建築家のルイス・バラガン、住まい全体に貫かれた白壁とウッドのコントラストは北欧建築の巨匠、アルヴァ・アアルトのデザインがベースにある。

世界各国の名建築から、そのエッセンスが散りばめられた増山邸。「いろいろな建築家が好きなだけに、ひとつのテイストに限定したくなくて」と、部屋を彩る家具や雑貨の表情も多種多様。北欧のアンティークにミッドセンチュリー家具、さらには家主の趣味を物語るサーフボードも、インテリアのごとく顔を出す。

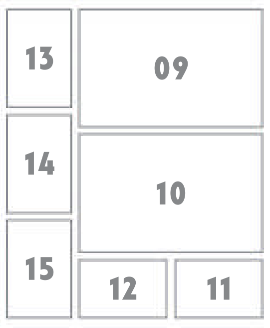
しかし雑多な印象は皆無。アアルト建築をベースとした白壁とウッドが多彩なテイストを受け止めているからだろうか、ミックス感がありながらも落ち着きさえ漂う。多くの建築からインスピレーションを受けながらも、増山邸は唯一無二だ。

アルヴァ・アアルトに倣い、部屋の壁は白の漆喰で統一。ウッドとの対比もアアルト建築がベースにあり、「経年変化を楽しみたくて」との思いから、使用されているのはすべてが無垢の木材だ。白壁とウッドの空間に、ミッドセンチュリーを思わせる照明がアクセント。



01.アフリカの木彫刻とバルセロナにあるミロ美術館のポスターが並び、テイストの多彩さを窺わせるが、実はマウンテンバイクもミックス感満載。横須賀市の『ユニコバイクス』に依頼し、〈フジ〉のオールドモデルをベースにレザー製のハンドルや〈ブルックス〉のサドルを取り付けているそう。　02.増山さんは建築好きであるのと同時にアウトドア好き。造作のシェルフには書籍や雑誌のほか、キャンプギアも顔を出す。　03.増山邸のミックス感を象徴するのが和室の存在だ。しかし畳とウッドの色合いが調和しているからだろうか、けっして浮いていない。壁に飾られた着物も、実はデニム地だそう。　04.増山さんは夫妻ともに衣装持ち。所有するシューズの数も多く、玄関を入ってすぐの場所にはシューズクロークを完備。　05.ワークスペースのデスクはネットオークションで手に入れたという、北欧製のアンティーク。06.さまざまなテイストの家具や雑貨が顔を出すなかでも、特に多彩なのが照明だ。写真の右手、ロフトを照らすシャンデリアは目黒通り沿いのインテリアショップで手に入れたそうだが、色違いのヴィンテージパーツを組み合わせて完成させたという、店のオーナーによるオリジナル。　07.増山さんはD.I.Y.も趣味。デッキに配されたリンゴ箱風のテーブルも、アッシュカラーのベンチも自作だそう。　08.さすがはD.I.Y.好き。玄関先に延びる石畳の通路も、自身でピンコロ石を敷き詰めたとか。

03 01
04 02
08 07 05 06



09.吉村順三の自邸を参考にしたワイドな窓。開放時には窓を格納できるほか、サッシのレールも見えないように造られ、まるで大きな絵画のように景色を楽しむことができる。　10.増山邸の設計を手掛けたのは、カリフォルニアテイストを得意とする建築設計事務所〈スタジオ・レオン〉。吹き抜けの空間にサーフボードのラックが設えられ、家に漂うミックス感を際立たせている。　11.ヴィンテージのハシゴを帽子のラック代わりに。手前に見えるウォールラックは増山さんの自作だが、以前はテレビボードとして使用。少しずつ手を加えながら、10年以上も愛用しているそうだ。　12.妻の千明さんがこだわったのがキッチン。友人を招く機会が多いことから、複数人が立っても余裕の広さ。さらにはテラスに向かって造られ、キッチンからも見事な借景を眺められる。　13.アーチ型の扉もアアルト建築を感じさせるが、奥に見える十字の出窓はルイス・バラガンの建築からヒントを得ているそう。　14.窓際にレイアウトされたテレビボード兼オーディオラックはオーダーメイド。「一番下の棚板を、あえて斜めに張っているんです」。こうすることで部屋全体の奥行きが深く見えるというから、真似したいアイデアだ。　15.ベッドルームの窓にはロールスクリーンを使用しているが、通常とは反対に下から上へと引き上げるタイプ。「スクリーンを上げきらなくても目隠しできるため、いい感じに朝日が差し込むんです」。

21

PROFILE

sol worksデザイナー
落合祥太さん

SPEC

居住地域	：	東京都武蔵野市
居住形態	：	マンション（持ち家）
間取り	：	1SLDK
居住年数	：	7年
築年数	：	44年

自然光がたっぷりと差し込むリビングだが、職業柄なのか、ライトは多めに設置してさらに明るく。D.I.Y.による棚には、子どものおもちゃを折り畳みコンテナに入れて収納。壁に取り付けた板に黒板塗料を塗り、温かみのある木材やグリーンを引き締めている。

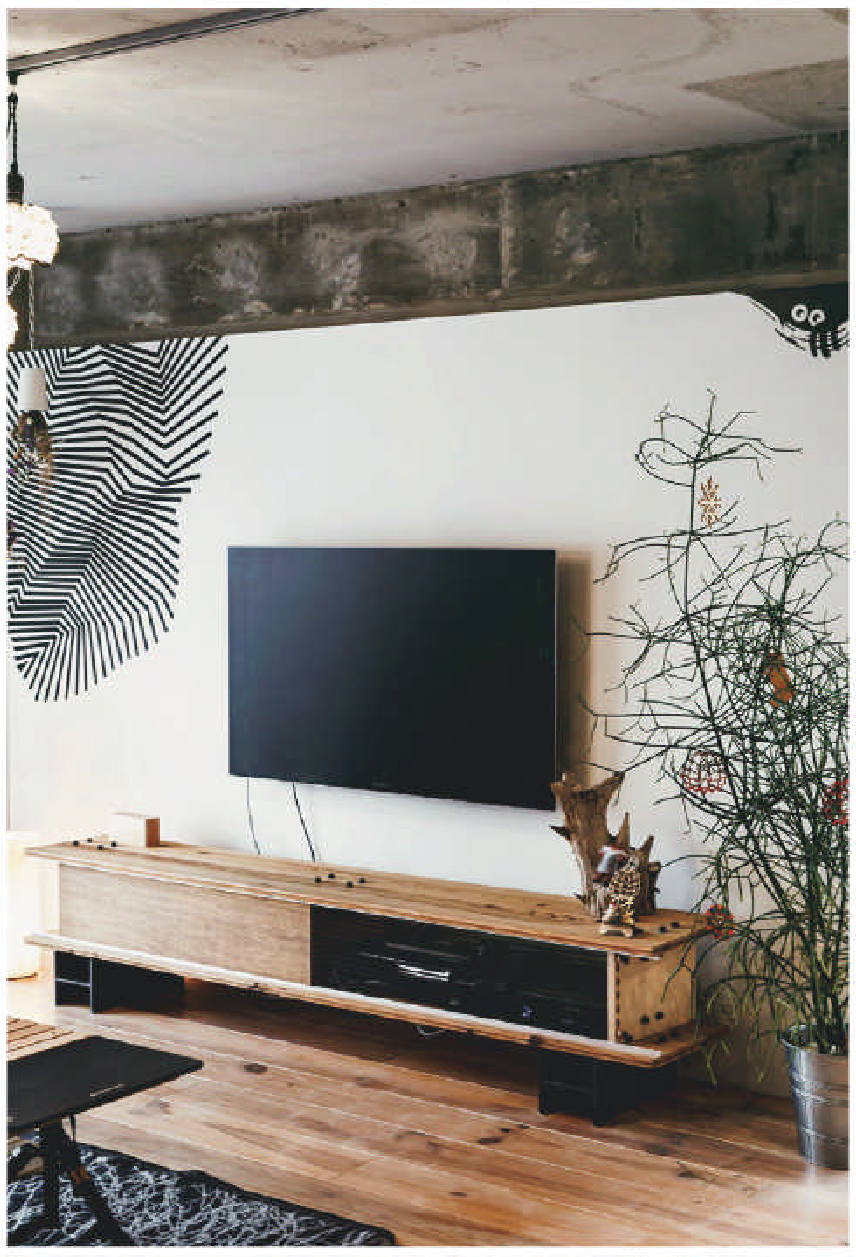
D.I.Y. で作り上げていく、家族団欒の広いリビング。

「なんでも自分で作ることが好きなので、スケルトンの状態からリノベーションをしてもらい、棚や子どもの机などをD・I・Y・しました」。そう話すのは、独特なフォルムのLEDランタン用シェードで人気を博す、ガレージブランド〈ソルワークス〉を運営している落合さん。7年前、3LDKのマンションを1SLDKにリノベーションし、家族4人で暮らしている。そこには、照明作家やインテリアプランナーとしてのキャリアを持つ、彼ならではのこだわりが凝縮していた。

一番のお気に入りは、3採光のリビング。「昔から広いリビングに憧れていた」と話すように、2部屋の壁を取り払い、子どもが走り回れるほどの広さを確保した。壁はコンクリート打ちっ放しで、フローリングは無垢のパイン材を採用。「基本的に素材そのままのカラーでまとめました。モノトーンが好きなので、あまり色味を入れないようにしています。20代の頃から、こんな家に住みたい、と貯めていたアイデアのストックを実践している感じです」。D・I・Y・からオーダーメイドのファニチャー、そしてキャンプと兼用しているテーブルなどがレイアウトされ、それらが見事に調和した空間が完成した。

自身の作業部屋やキャンプギアの収納スペースも完備し、自宅での製作から外遊びまでを快適にフォローしているが、満足しきっていない様子。「7年も住んでいますが、まだ全然完成していません。これからいじりたい部分がたくさんあるんですよね」。子どもの成長に合わせて住まいも発展させるため、落合さんのアイデアが尽きることはなさそうだ。

ダイニングテーブルは、吉祥寺にある材木店で出会ったトチの木を用いたオーダー品。左右対称の木目がお気に入り。少しでも部屋を広く見せるために、ダイニングチェアは透明な〈カルテル〉のルイゴーストを配置。そしてここにも、〈ソルオル〉のシェードをセット。



01.作業部屋のデスクがこちら。壁に天板を取り付けているので脚がない。足元には、もともと持っていた本棚がぴったりとハマっている。　02.「ハンギングチェアを設置することが夢で、リビングを広くした理由でもあります」。リビング全体に色味のあるアイテムが少ないので、クッションで色彩をプラス。　03.玄関に本やカメラなどを配置。「子どもも手に取りやすいように、玄関にも本を置いています。本当はもっと置きたいくらいで、図書館みたいにするのが理想です」。　04.テレビボードもD.I.Y.。ゴム紐を搭載することで、操作性に優れながら目隠しをするアイデアは秀逸だ。　05.リビングの飾り棚には、陶器やCDなどをディスプレイ。盆栽のオブジェは〈ソウラボ〉のプロダクト。　06.本やプラモデルなど、落合さんの趣味が詰まっている作業部屋。製品の色味を正確に判断するために白色電球と白の壁を採用。「当初は家でここまで本格的にモノ作りをするなんて思ってもいなかったので、パソコン業務に最適な広さ。少し手狭です」。　07.自転車を置けるほど広い玄関もブラックが軸。左の棚がシューズラックで、家族分の靴を収納。　08.こちらの〈ソルオル〉(Instagram:@sol_78_)のプロダクトは、ロゴのスタンプが押されている非売品。幾何学のフォルムが美しく、家からテントサイトまでを照らす。発売すれば即完売するほどの人気ぶり。　09.マスキングテープでデザインしたセンス溢れるアイデア。逆さに吊るされた鉢は〈スカイプランター〉のもの。

06	01	
07	04	02
08		
09	05	03

13 10 11 14 12

10.ギアは業務用のラックに収納し、使用頻度が高いものは手前側に配置。キャンプスタイルに合わせたギアを集めていたら、テントは8張りにも増えてしまったそうだ。「本当は子どもが遊ぶスペースにしようと思っていましたが、ギアで埋まっちゃいました(笑)。今後、子ども部屋を作ろうと思っているので、ギアの収納場所を考えなきゃいけません」。　11.〈イケア〉のソファと収納に合わせているテーブルは、〈ボンファイヤー・ゴー・アウトサイド〉のロールトップテーブル。「脚は、高さ調節可能な三脚なので、ローテーブルにもハイテーブルにもなって、めちゃくちゃ便利です。キャンプだけじゃもったいないくらい気に入っているから、家でも使っています」。奥にあるのは、〈ソマビト〉の焚き火サイドテーブル。「〈ソルオル〉を始めてから、ガレージブランドの繋がりが増えました」。　12.子どものおもちゃを収納するD.I.Y.した棚の上には、レコードやランタンもディスプレイ。随所に落合さんの好みが垣間見える。　13.リビングを見渡せるように、キッチンの位置をリノベーションによって変更。その向かいには、子どもの勉強机をD.I.Y.。〈イケア〉のラックに天板を取り付けている。ファイルスタンドにも、マスキングテープで遊び心をプラス。　14.廊下の床はモルタル。家中にあるスチール製のものは、すべてブラックで統一されているところに注目。効果的にブラックを用いて、ナチュラルとインダストリアルが絶妙に融合した空間が完成した。

22

PROFILE

トーガシ
クリエイティブディレクター
小杉将史さん

SPEC

居住地域 ： 神奈川県川崎市
居住形態 ： マンション（賃貸）
間取り ： 3LDK
居住年数 ： 6ヵ月
築年数 ： 38年

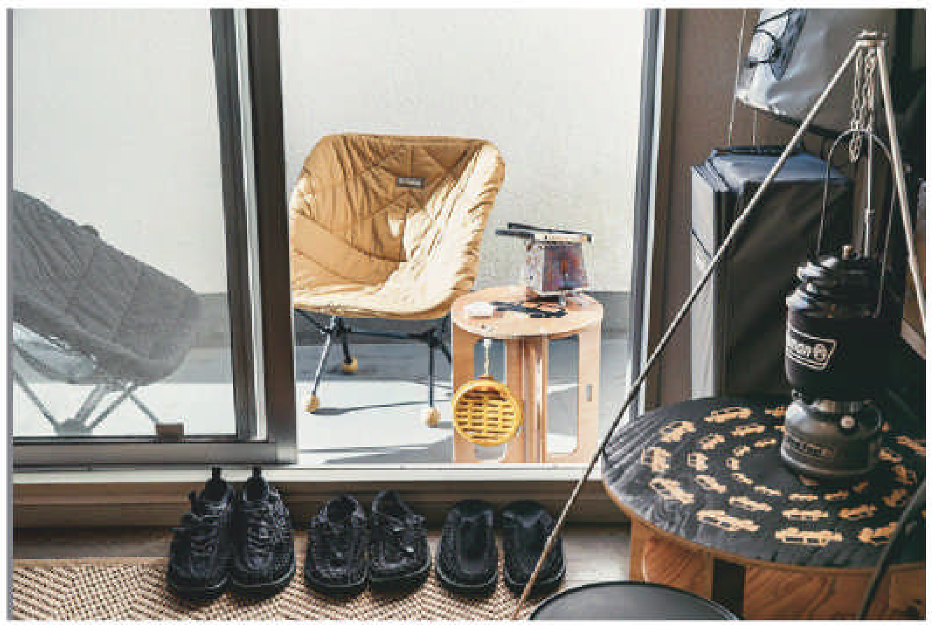
Photo／Chie Kushibiki　Text／Mitsuto Matsunaga

アウトドアを日常に取り入れる、外遊び好きならではの住まい。

4年ほど前から始めたキャンプと共に、車、自転車、バイク、釣りなど多くの外遊び楽しむ小杉さん。昨年都心から転居したという神奈川県郊外は、静岡や山梨などのキャンプ地に行きやすく、東京へも通いやすい穴場的エリアだ。都内より格段に広さを確保できるのに加え、こちらは山の傾斜地に建てられたマンションのため、下の階の屋根部分がバルコニーとして使えることも決め手のひとつになったと話す。去年からリモートワークが増え家にいる時間も多くなったが、転居してからは仕事終わりや休みの日にも手軽にアウトドアに行きやすい環境となったそうだ。「パソコンを閉めたら、車を出してすぐアウトドアに向かえるようになりました。オンとオフが切り替えやすいので、より有意義な時間の使い方ができるようになりましたね」。

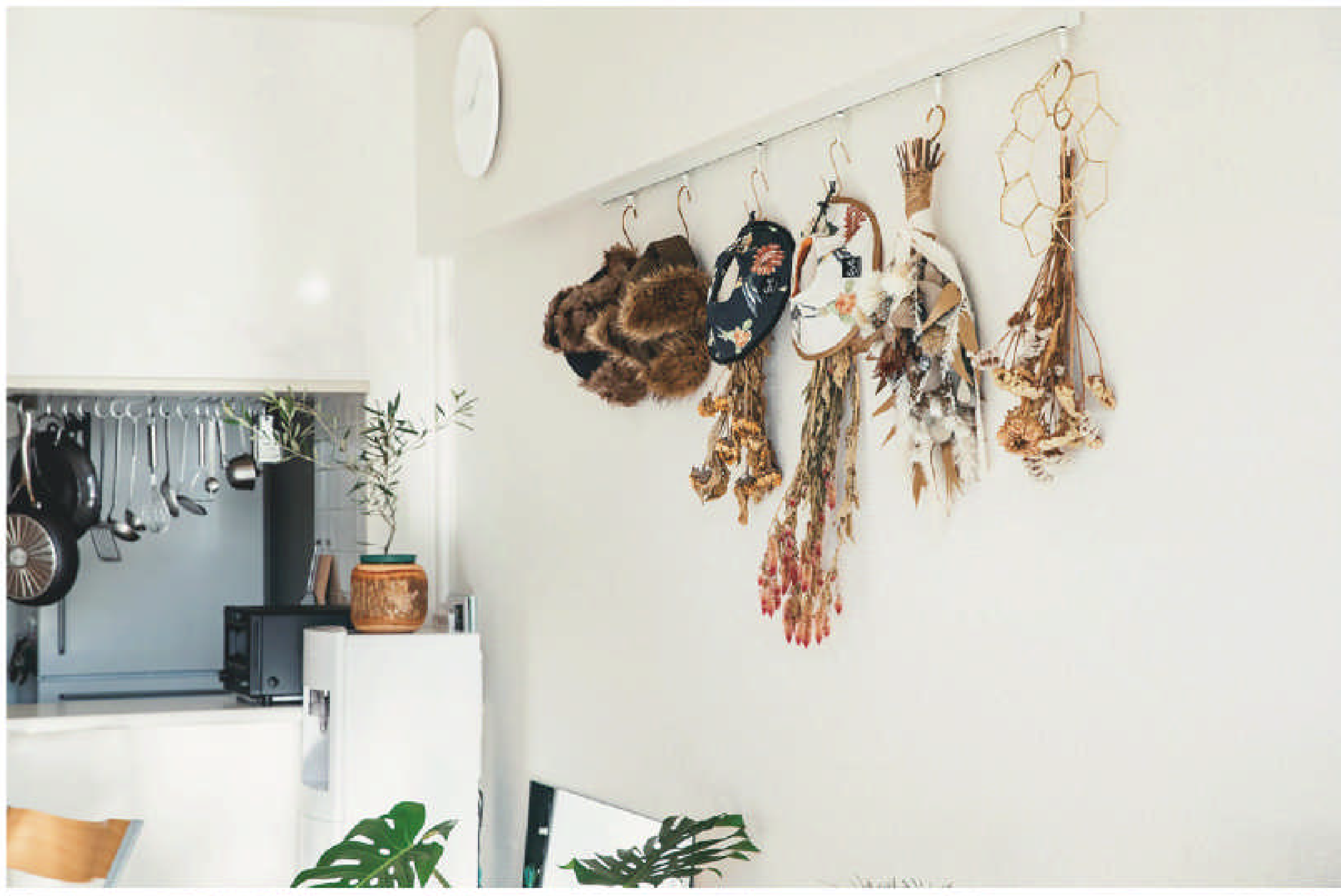
日当たりのよいリビングには、〈ヘリノックス〉や〈カーミットチェア〉などのアウトドアファニチャーもレイアウト。普段愛用するキャンプギアはブラック主体とのことだが、こちらではカモ柄をセレクトし、ベージュやブラウンなどのアースカラーでまとめられたリビングにも違和感なくマッチさせていた。一方で壁一面に収納が作り付けられていた部屋はギアの収納部屋に。多くのギアを所有していたため、入居前からこちらは収納スペースにあてようと考えていたのだそう。数年前からはギア好きが高じ、〈ザハイライト〉というブランドも展開中。自身が欲しいと思う洋服やギアをデザインしながら、ますますアウトドアライフを充実させているようだ。

手前の〈ヘリノックス〉のテーブルとともに、リビングに置かれたカーミットチェアは〈バリスティクス〉のジャケットキットでカモ柄に。「ナチュラルな色合いの中に少しカモ柄が入ると、意外と引き立ってインテリアの一部にもなってくれるのかなと思います」。



01.こちらのバルコニーがこの家を選んだ決め手のひとつとなった。広さは約20㎡あり、キャンプにもよく持っていくという自転車の調整をしたりテント類を干したりと、アウトドア好きの小杉さんにとって無くてはならない場所。天気のいい日にはここで朝食をとることもあるのだとか。ファニチャーにはフランスの老舗アウトドアブランド〈ラレマンド〉のウッドロールテーブルと〈スノーピーク〉のFDチェアをチョイス。　02.普段からファッションは黒がほとんどということで、ギアにもそのこだわりを反映。「キャンプギアは基本黒白グレーがメインです。そこに赤や黄色のカラーを入れる感じが多いですね」。　03.「完全に自己満のスペースです（笑）」というギア部屋には、壁一面を使った大容量の収納棚が。かつてはソロで野営も行っていたということで、その時から使用していた〈テンマクデザイン〉のウッドストーブなどの姿も見受けられる。　04.ギア部屋にも小さなバルコニーを備える。こちらに見える2台のテーブルは自身で展開する〈ザハイライト〉のもの。05.〈ザハイライト〉のロゴは車好きの小杉さんだけあって、ズバリ車。以前はジムニーをカスタムし、しばしば山に走りに行っていたこともあるのだとか。ブランドではTシャツやキャップ、キャンプで使える身近な小物などのプロダクトをリリース中だ。気になった方はインスタグラムにて#thehighlightcreationでぜひ検索を。

03 01 02 05 04



08	06	
09	07	
12	11	10

06.梁の下のピクチャーレールを利用しドライフラワーを飾り付け。中央2カ所には〈アレキサンダー・リー・チャン〉×〈ハーフトラックプロダクツ〉のランプシェードの姿も。　07.ヴィンテージの重厚なトランクはテレビ台として使用。古着屋が多く集う町としても知られる隣町の町田にて購入したそう。　08.高台にあるため日当たりは抜群。バルコニーに面してすべてサッシとなっているためリビングにいながら外の気配を身近に感じることができる。　09.リビングに多数置かれたグリーンは、ホームセンターやインテリアショップで出会ったものをこだわりなく集めているとのこと。左側のサイドテーブルは、海外のブランドも多く取り扱う池尻大橋のインテリアショップ『センプレ』で購入。　10.自宅での仕事時間が増えているため一部屋を仕事スペースに。こちらに越してきた際にいただいたというワークデスクは、デンマーク発のインテリアプロダクトブランド〈ヘイ〉のもの。ふたりが横並びで座ってもゆとりのあるサイズ感。　11.リビングのテーブルは〈ヘリノックス〉タクティカルテーブル。注目は手前に装着された同ブランドのテーブルサイドストレージ。こちらにリモコンなどを収納しテーブルの上のごちゃごちゃ問題を解決している。ぜひ取りいれたい技ありアイデアだ。　12.ダイニングのテーブルはなんと小杉さんの自作。もともと建築を学んでいたということでさすがの仕上がり。

23

PROFILE

CAMP HACK編集長
松田隆史さん

SPEC

居住地域 ： 埼玉県川口市
居住形態 ： マンション（持ち家）
間取り ： 1LDK+玄関ホール+書斎
居住年数 ： 2年
築年数 ： 39年

【取材協力】
リノべる。
https://www.renoveru.jp/

白壁とウッドから成るナチュラルテイストなLDKを引き締めているのが、部屋にインダストリアルな印象をもたらす打ちっ放しの天井。ダイニングを照らす木製のペンダントライトとの対比もハイセンスだが、『ウニコ』で購入した〈アプロス〉のプロダクトだそう。

趣味に打ち込む時間の豊かさを増幅させる、メリハリある家づくり。

松田さんは日本最大級のキャンプ情報サイト「キャンプハック」の編集長。無類のキャンプ好きであり、所有するギアも相当数だが、「2年ほど前に新居を購入したものの、広さに限りがあるのが現実」という言葉どおり、ネックとなったのが収納だ。

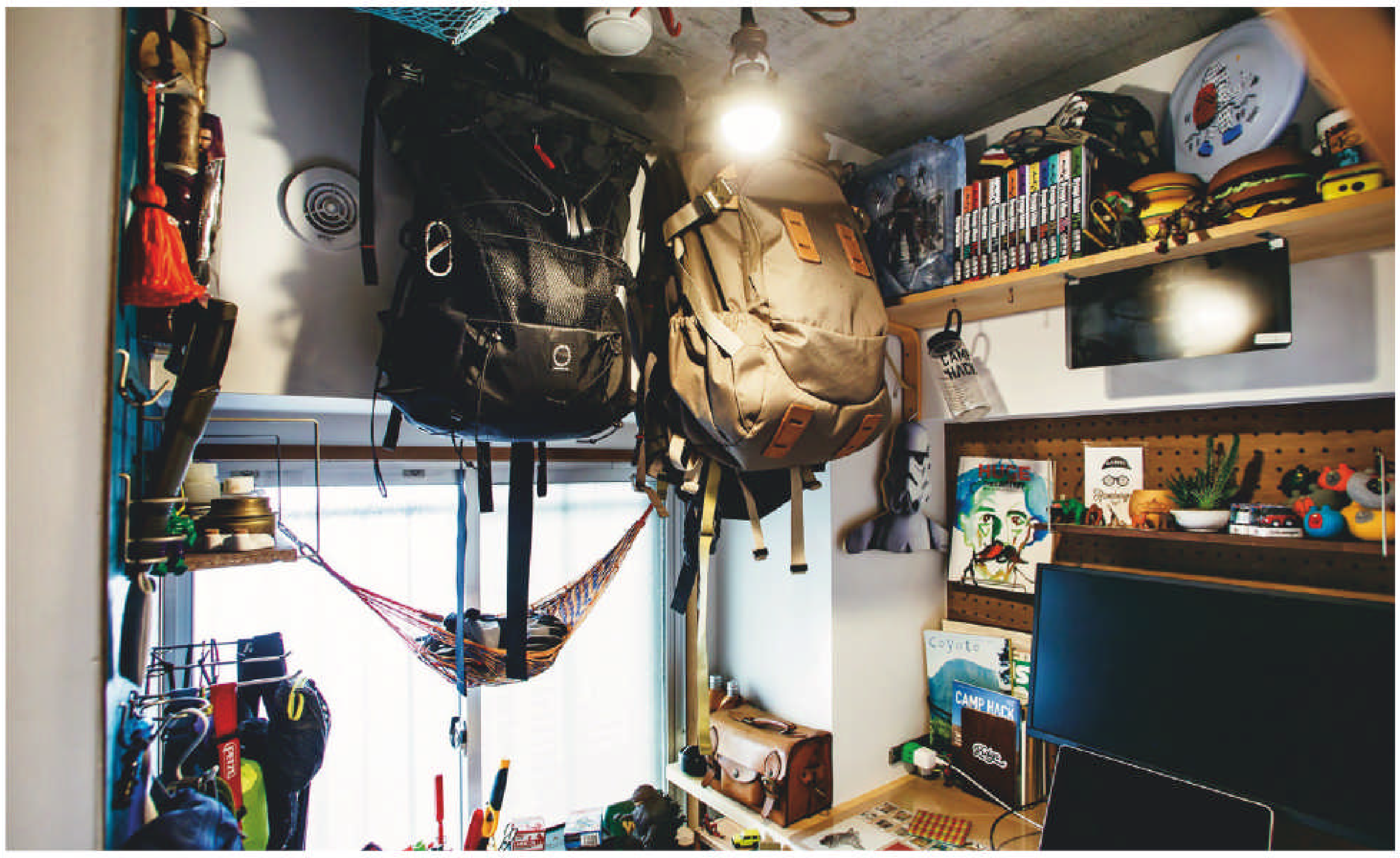
これを解消したのがリノベーション。松田さんは一般的な3LDKの間取りをすべて解体し、4畳ほどの玄関ホールと小さな書斎を備えた1LDKに改修。その結果、広々とした玄関ホールがギアの収納スペースに。ホールに配したラックには目隠し代わりにシュラフが吊され、そこに仕舞われているのはテントやタープにトランクカーゴ。ひと目で外遊び好きと分かるラインナップだ。

そしてザックやトレッキングポールをはじめとする登山用ギアが収納された書斎は、松田さんにとっての“プチガレージ”。「LDKは家族の空間。その分、玄関ホールと書斎には、自分の好きなものを詰め込みました」と話してくれたが、家族の空間と自分の空間を明確に区分するメリハリこそ、松田邸の魅力だ。

まさに“男の趣味部屋”を体現するような空間から一転、家族が憩うLDKは穏やかな表情。そこかしこに外遊び好きを覗わせるギアが顔を出しつつも、ホワイトの壁とウッドを基調としたナチュラルテイストだ。家族の空間と自分の空間。ふたつの表情の違いにより、「同じ家にいながらにして、玄関ホールや書斎では、趣味のスイッチが自然とオンになるんです」。つまりは住まいに息づくメリハリが、趣味に没頭する時間の豊かさを増幅させているのだ。

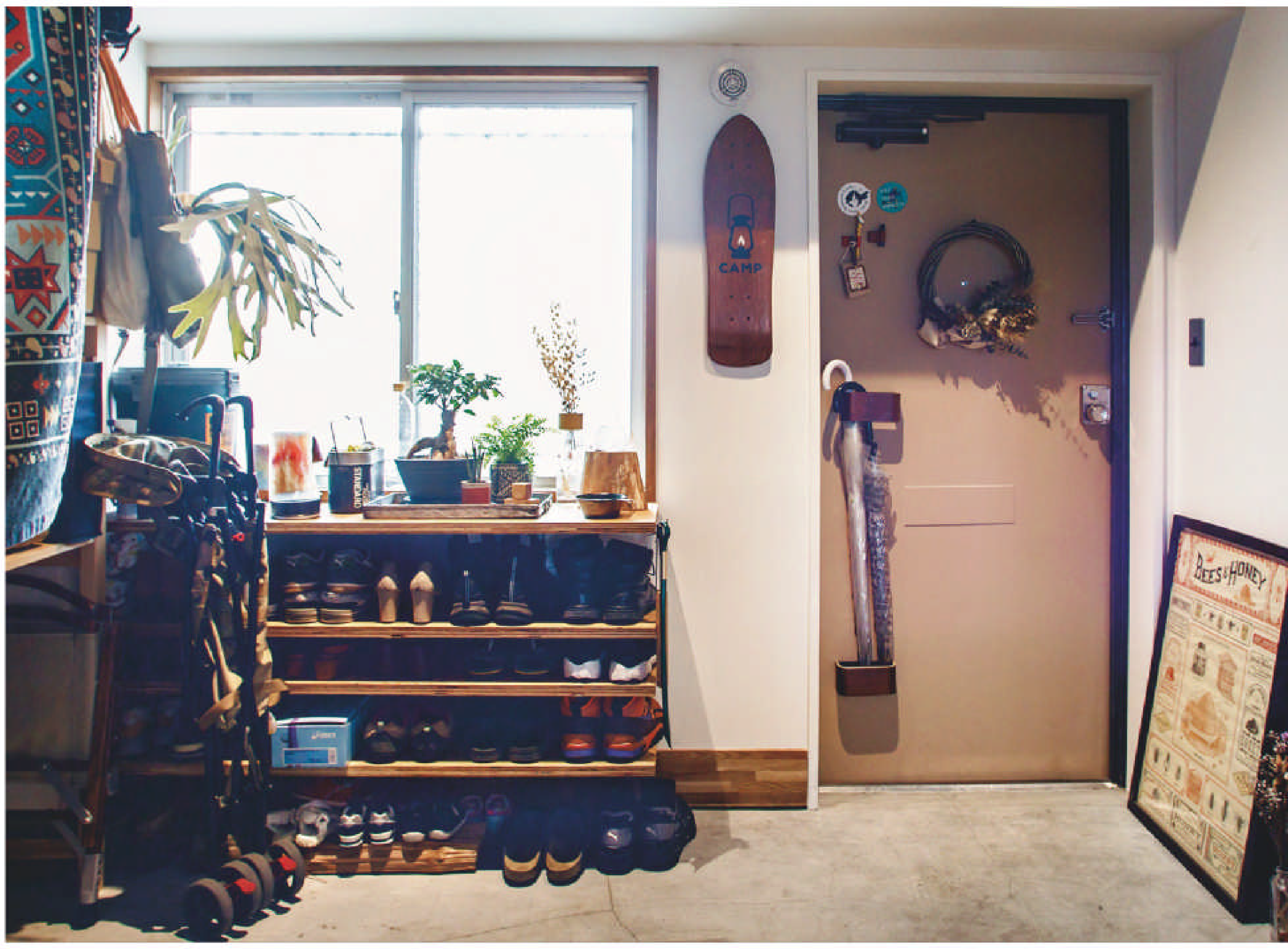
Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya

玄関ホールのラックにはギアがぎっしり。これだけのギアを収納できるのだから、なかなかの耐荷重だが、意外にも『イケア』で購入したそう。ちなみにトランクカーゴは〈ジャックアンドマリー〉。キャンプ用の食器類をはじめ、細々としたギアを収納している。



01.「広いガレージにも憧れるものの、なかなか現実的じゃない」との思いから設えた、ミニマムな書斎。どんなに小さな空間でも趣味の要素を詰め込めば、自分だけの“プチガレージ”になることの証明だ。登山用ギアを筆頭にアメコミやフィギュアをはじめとする多種多様な要素が混在し、このミクスチャー感がひとつのテイストとして成立している。　02.「アウトドアギアと植物って、最高の組み合わせだと思うんです」と、玄関ホールに配したシューズラックの上には観葉植物をレイアウト。そのグリーンの隣に顔を出すのは〈ザ・ノース・フェイス〉の飯ごうだが、なかなかのレアアイテム。「もったいなくて外に持ち出せないんです」と、現在はハンカチ入れとして活用中だそう。　03.ギアの詰まったラックの前に吊されているのは、大判のブランケットとシュラフ。ラックの目隠しとしてシュラフを吊すという大胆なアイデアだが、「丸めて収納するよりも、羽毛への負担が軽減されるそうです」。　04.書斎の広さは約2畳。「チェアを回転させるのが、やっとの広さです」と笑って話してくれたが、その狭さがコックピットを思わせる。まさに自分だけの空間だ。　05.こちらも同じく書斎のひとコマだが、ペグボードを取り付けることで壁を収納スペースに。さらに登山用ザックは天井から吊すことで、やはり省スペースを実現。ペグボードは松田さん自身が塗装したそうだが、この絶妙な色合いのブルーに原色のギアが映える。

04	01
	02
05	03



11	06	
12	09	07
13		
14	10	08

06.玄関ホールの壁に飾られたスケボーデッキのアートは、デザイナー兼スケーターとして活躍する和田武史さんの作品。 07.味わい深くエイジングされたトランクは、妻の父親から譲り受けたもの。ちなみにアメコミ好きでもある松田さん、トランクの隣に置かれたナルゲンボトルも〈マーベル〉のハルク仕様。 08.ミニマムな書斎の入り口には帽子をハンギング。あらゆるスペースを収納として活用する凝縮感が、独特のムードを生み出している。 09.家主の趣味を物語る、キャンプモチーフのファブリック。焚き火イラストのクッションはキャンプフェスで購入し、その隣は〈メロウィングス〉のプロダクトだ。 10.4つ並んだコンテナは〈アデペシュ〉だが、台車に載せることで移動もラクラク。その隣は〈ユニフレーム〉のフィールドラックからブラックをセレクト。 11.書斎のデスクはリノベーション時の造作。その足元には木箱をパズルのように敷き詰め、省スペースに収納をプラスしている。 12.壁面のラックは造り付け。手持ちの収納家具にフィットするサイジングにより、整然とした印象に。 13.手前に見える丸太風のクッションは、なんと『ニトリ』で購入したそう。3つをヒモでまとめれば、薪さながらのシルエットだ。 14.打ちっ放しの天井にマッチするブラックのダクトレールには「床置きの家具や雑貨を増やすと部屋が狭くなる気がして」と、アクセントとしてのブランケットを吊してレイアウト。

24

PROFILE

DOVE WORKS代表
上田大輔 さん
利佳 さん

SPEC

居住地域	：	東京都目黒区
居住形態	：	マンション（持ち家）
間取り	：	2LDK
居住年数	：	56年
築年数	：	8ヵ月

家具類は北欧デンマーク製のヴィンテージが中心。長年にわたり狙っていた物件に空きが出たため内見もほどほどに即決し、なんと奥様には事後報告。さらに一旦リノベーションされた内装を再度リノベーションし直した、徹底したこだわりの住まいだ。

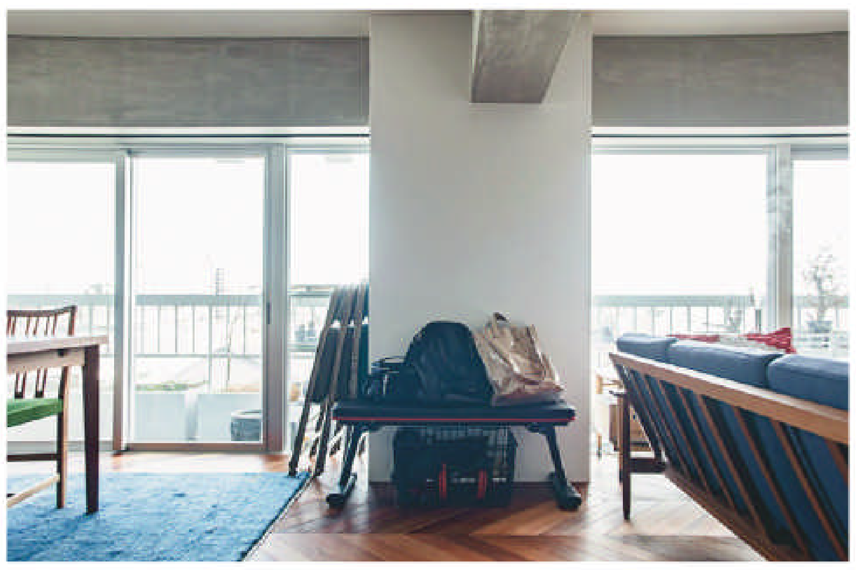
英国ヴィンテージファニチャーシーンを代表する〈ジープラン〉の'50sサイドボードには、コピアポアやグラキリスといったコーデックスがずらり。「メインどころは池袋の『鶴仙園』で購入。普段はバルコニーが定位置ですが、寒い時期は室内に入れます」。

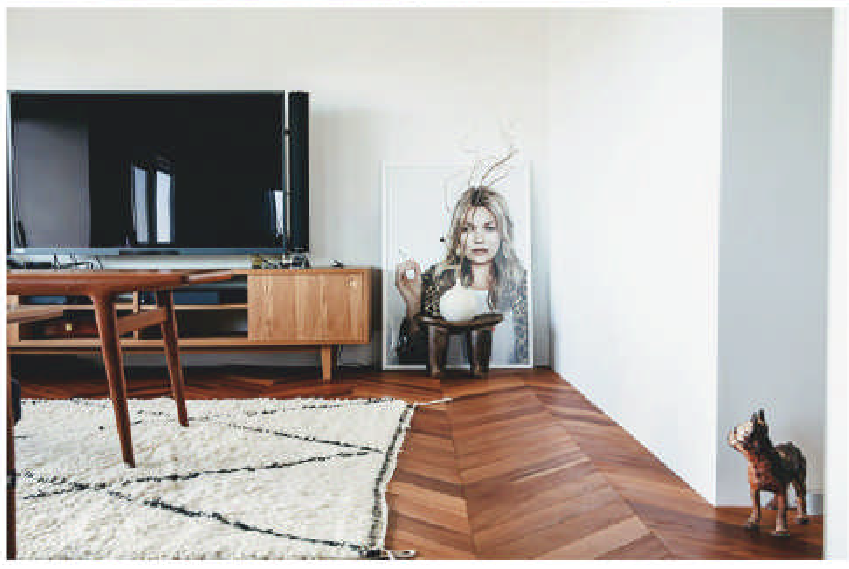
長年かけて狙いを定めたロケーションを、新たな住まいに。

『コロンビア』や『ホグロフス』など各国人気ブランドを数多く手掛けるPRオフィス、ダブワークスにて代表を務める上田さんは、界隈では有名なこのヴィンテージマンションに以前から目を付けていた。前回の東京オリンピックとほぼ同時期に建てられ、築年数は60年弱を数えるものの、徒歩圏内には駒沢公園があり、近隣に日差しを遮る高層住宅もない格別のロケーションに惚れ込んだという。「近くに住んでいたのでたまに空きが出るという噂は耳にしていましたが、3年くらいは待ったと思います。競争率が高いのも知っていましたし、いざ空きが出た時は内見もほどほどに、ほぼ即決に近い感じで決めましたね」。

延床面積は80平米以上あるものの、ゆとりを持たせた2LDKへとフルリノベーション。壁や天井は特殊モルタルと漆喰塗りでコントラストを利かせた空間に、フレンチヘリンボーンの床材やヴィンテージの北欧家具が静かにぬくもりを加えている。「じつは入居前、すでに室内はリノベーション済みでキレイな状態だったのですが、好みの仕様に再度リノベーションを依頼しました。念願の物件でしたし妥協はしたくなかったので」という。

また、コーデックスを中心としたグリーンの充実ぶりも特筆すべきポイントのひとつだろう。「5年ほど前から塊根植物たちを育ててはいましたが、この建物全体で緑化を推進しているようで、各部屋のバルコニーにはプランターも備え付けられているんです。もう少し暖かくなったら、僕らも何かしらトライしてみようと考えています」。





05	04	01
06		02
08	07	03

01.陽を遮るものが何ひとつないリビングエリアの採光面。高台に建っているため東側には東京タワーも見て取れる。　**02.**ダイニングテーブルはデンマーク産のヴィンテージアノニマス。チェアもカイ・クリスチャンセンやハンス・ウェグナーといったデンマーク産のデザイナーズヴィンテージで揃えていた。　**03.**世界三大銘木のひとつでもあるマホガニー材を採用したフレンチヘリンボーンのフローリングもこだわった部分のひとつとか。　**04.**英国の〈イーゴム〉社が当時の北欧デザインに着想を得て1950年代に設立した〈ジープラン〉のサイドボードも'50年代頃のオリジナル。　**05.**グラキリスなどのコーデックス類。基本的にはバルコニーが定位置ながら冬場は室内管理。〈インビジブルインク〉などレアポットもちらほら。　**06.**コーヒーテーブルはヨハネス・アンダーセン、ソファもデンマーク産のアノニマスと、ここでもメインは北欧ヴィンテージ。「個人的なデンマークブームも一旦落ち着き、最近はフランスの旧い家具が気になっています。ひとり掛けを置いている辺りにそのうち小さめのソファを置きたい」。　**07.**ショッププロデュースやスタイリングなども手掛けるアーティスト、青木むすびさんが手掛けた〈ムスビ〉のフラワーベースをキッチンフードのポイントに。　**08.**キッチンのタイルは目地に注目。「パープルの目地が僕的には結構な冒険でしたが、結果的にはいいアクセントになったかも」。

25

PROFILE

会社員
UNA さん

SPEC

居住地域 ： 北海道札幌市
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 3LDK +ガレージ
居住年数 ： 6年
築年数 ： 30年

薪ストーブの横でランタンの手入れなど、くつろぎのひとときを過ごす。壁には杉の木材を使用し、家具もナチュラルな雰囲気の木目のもので統一感を出している。壁にはアメリカンな雰囲気のアートや真鍮製のランタンなど趣味のギアを置いた。

薪ストーブの前にある〈スノーピーク〉のチェアには、革作家が手作りしたというレザーのシートを被せて愛用している。ほかにも、ナイフなどの小物もオーダーやカスタムメイドされたものばかりで、自身のこだわりで選び抜かれた珍しいギアが多い。

Photo ／ Yusuke Yarimizu Text ／ Kumiko Nagaso

05	04	01
06		02
08	07	03

01.鹿角を模したシャンデリアはネットで見つけたもの。本物の鹿角のように見えるが、樹脂製で非常に軽量にできている。　02.流木でつくられた照明は、作家の作品を取り寄せたもの。内側のライトが焚き火の炎のようにゆらめくようになっており、揺れる炎を見つめていると、心が安らぐのだとか。　03.カスタムメイドされたアウトドアギアたち。中央にあるシェラカップはオリジナルロゴが刻印されており、燕三条で生産したもの。黄色いグローブには、オリジナルロゴの焼印を押してカスタムした。「いろんなメーカーとやりとりしながら、ほかにはないオリジナルのギアを製作するのが楽しいんです。今後もユニークなアウトドアギアを製作していくつもり」。　04.壁に飾られたアメリカン雑貨たち。ブッファローのオブジェはフレームに流木を使用しており、ナチュラルな雰囲気を盛り上げてくれる。　05.観葉植物の隣には、フィギュアを置いて楽しい空間に。　06.ソファに座ってお気に入りの映画を見たりしてくつろぐリビングスペース。観葉植物とともに、アウトドアテイストな雑貨がいたるところにディスプレイされており、賑やか。　07.数多くのランタンを所有するが、特に真鍮のものが好み。なかには、作家モノの手作りの真鍮ランタンなど珍しいアイテムも。　08.カウンターキッチンの上には、熱帯魚の水槽やランタンなど、お気に入りの雑貨が並ぶ。

木の壁と観葉植物、薪ストーブが織りなすナチュラルな住まい。

日当たりのいい住宅街の一軒家に住むＵＮＡさん（Ｉｎｓｔａｇｒａｍ：＠ｕｎａ＿ｃａｍｐ）宅には、三角型の大きな薪ストーブがリビングに鎮座する。「〈メトス〉の薪ストーブは、この形にずっと憧れていて、製造中止のものを中古で取り寄せました。北海道までの送料が高かったですけどね（笑）。開放型という珍しい形で、いろんな料理もできるし、薪の匂いが少ないのもいいところ」。日当たりのいいリビングには観葉植物が置かれ、木材のナチュラルな雰囲気と相まって温もりのある空間だ。

キャンプ歴14年というベテランキャンパーのＵＮＡさん。「最近では、愛犬と一緒にティピテントでキャンプするのにハマっています。直火で暖も取りながら、ダッチオーブンでローストチキンや牛テールスープなどの料理を楽しんでいます」。

キャンプ以外にも、観葉植物や映画、熱帯魚など多彩な趣味を持ち、アウトドアギアも独自の視点で選び抜かれたものを集めている。「アウトドアグッズを選ぶ時は、愛着を持って大切にできるかを考えて購入します。少し使いずらくても、デザインや作り手のこだわりがあるものは持っているだけで嬉しいですしね。アメリカから個人輸入して購入することもあり、とことん自分が気に入るものを探す過程が楽しい」と話すが、最近はキャンプ用の道具をカスタムオーダーして作るのも楽しみのひとつだという。「ナイフが好きなので、自分でデザインしたレザーのケースを革作家さんにオーダーしました。イメージしたものが形になるのが楽しくて。これからは、ナイフやシェラカップなどを製作して販売していけたらと思っています」。

26

PROFILE

toolboxディレクター
石田勇介さん
光代さん
凪ちゃん

SPEC

居住地域 ： 神奈川県川崎市
居住形態 ： マンション（持ち家）
間取り ： 1LDK
居住年数 ： 10年
築年数 ： 39年

【取材協力】
toolbox
https://www.r-toolbox.jp/

床に置かれた木材が物語るとおり、石田邸は変化の最中。「パントリーとLDKの間に仕切りを設けるべく、土台となるフレームの設置が済んだところ」。黒く塗装されているのが件のフレームだが、ここにウォルナットの板を張る予定だそう。完成のときが楽しみだ。

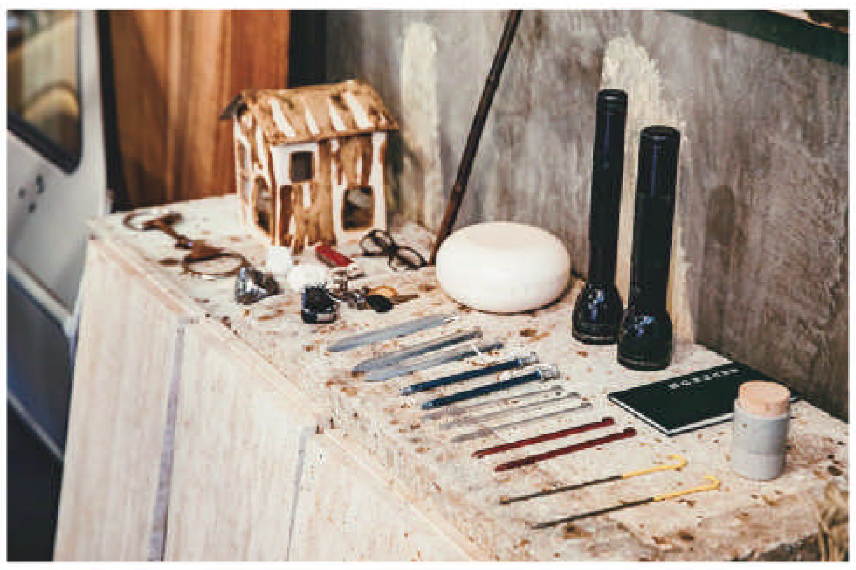
ダイニングスペースの壁はパテの痕もそのままの躯体現し。その無骨な印象から一転、リビングの壁は「最近になって、アイボリーに塗ったんです」。床に敷かれた石材と相まってエレガントな印象だが、そこにマッチするのはハイバックタイプのアルコーヴソファ。

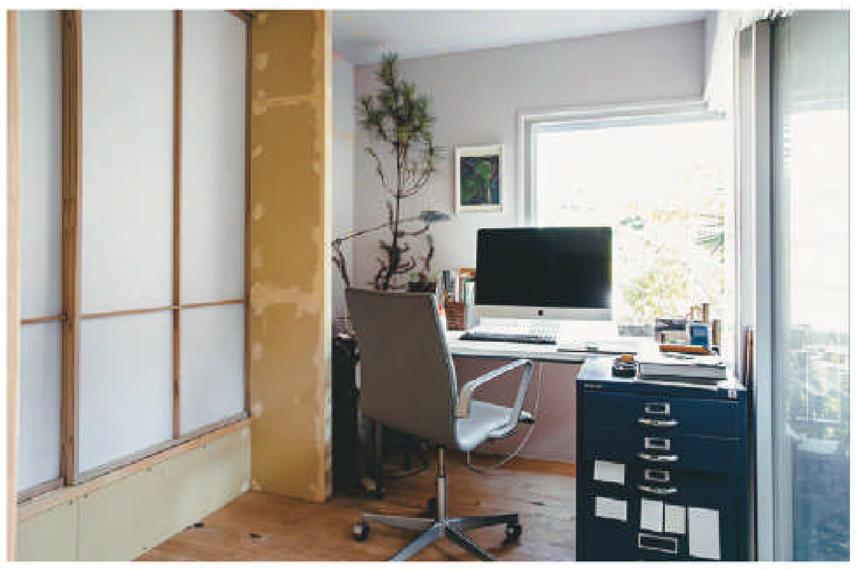
アイデアが生まれるたびに表情を新たにしていく、“家は僕の実験場”。

自分の空間を編集するための道具箱〟をコンセプトに内装建材や家具パーツ、住宅設備を揃える〈ツールボックス〉。そのディレクターである石田さんは無類のアウトドア好きだ。「どんな道具も用途を限定してはつまらない。家づくりもキャンプも、モノの新たな役割を見出すことが最大の醍醐味です」。その言葉を裏付けるのが、ヴィンテージの作業台を用いたカウンターだろう。大胆にも天板の一部をくり抜き、シンクやコンロを設置。アイランドキッチンへと生まれ変わらせた。さらにリビングとダイニングの境界を緩やかに示すのは、イタリア産の石材。本来はガーデニング用とのことだが、その重厚な質感はモダンなソファとも、躯体が剥き出しの壁とも相性抜群だ。

道具の用途を限定しないことから生まれる斬新なアイデア。その源は住まいの一角に設けられた物置部屋にある。「家具にしても雑貨にしてもビビッと来たら購入し、ストックしておくんです。ストックしたアイテムたちは、料理におけるスパイスと一緒。わざわざ食材を揃えなくとも、スパイスひとつでユニークな味わいを生み出してくれます」。

アウトドアに加え、料理好きでもある石田さんらしい表現だが、「僕にとっての家は、こうしたアイデアを具現化するための実験場」。家を購入した当初、4LDKの間取りをワンフロアに改築したのも実験を謳歌するためだったが、「ここに住み始めて10年。ワンフロアの間取りはエンジョイし尽くしました」と、現在は仕切りを設置する作業の真っ直中。石田さんの実験は続き、その創意工夫が家の表情を新たにしていく。





06	02	01
07	03	
08	05	04

01.石材にディスプレイされたギアはオブジェさながらの面持ち。〈MSR〉や〈デイナデザイン〉〈モス〉のポールと同様の素材を用いたペグをはじめ、どれもが玄人好み。　02.収納スペースの目隠しには〈ツールボックス〉の建具を使用。「パイン材のフラットドア2枚を組み合わせ、両開きの扉にしています」。　03.中央に見えるのがヴィンテージの作業台を用いたアイランドキッチン。福島県の『オールドデイズ』で購入したそうだが、キッチンにインパクトをもたらす緑色の照明も同店からセレクト。04.石田邸はテラスをコの字型に囲むような間取り。緑豊かなテラスの景観もインテリアの一部だ。　05.シューズラックに置かれた〈コールマン〉のランタンが石田さんのキャンプ好きを物語ると同時に、木材や塗料が家づくりの様子を窺わせる。　06.コーナーサッシの一角が石田さんの仕事場。薄いピンクを基調とした空間に〈ビスレー〉のキャビネットがアクセント。　07.石田さんの創意工夫を象徴するのがバスルーム。「開放的なガラス張りを考えたものの予算オーバー。代替の素材に選んだのが、安価かつ半透明のポリカーボネイトでした」。ポリカ製の波板を張った桟と可動式金具により、跳ね上げ扉のバスルームに。　08.愛猫・ゴマちゃん（♀）の背後に見えるのはバスルームの扉と同じく、ポリカ製の波板を張った桟に仕切られたトイレ。半透明の材質により、プライバシーが守られながらも圧迫感が生じない。

27

PROFILE

フォトグラファー／ビデオグラファー
ヒロヤさん

看護師
マイコさん

SPEC

居住地域	：	石川県金沢市
居住形態	：	マンション（賃貸）
間取り	：	1LDK
居住年数	：	2年
築年数	：	40年

この家に暮らし始めてから約2年、8月に念願のベビーを迎えた夫妻。“隠す収納”によって広々としたLDKを実現しているが、〈マルニ木工〉のヴィンテージソファと対に置かれているのは〈ハングアウト〉のコット。LEDランタンを載せたテーブルは〈オンウェー〉だ。

ベランピングを楽しむひとりとして、コロナ禍による自粛期間中にはテレビ取材も受けたというヒロヤさん。そこに顔を出すギアはキャンプ好きには馴染みのものばかり。ウッドテーブルは〈バイヤーオブメイン〉、チェアは〈バリスティクス〉と〈ヘリノックス〉のプロダクト。

Photo ／ Hiroya Kizawa　Text ／ Kyoko Oya

05	04	01
06		02
08	07	03

01.ベランピングのお供となるのがコーヒー。「暖色から白色まで調節でき、ロウソクのような炎の揺らぎまで再現してくれます」という〈バルミューダ〉のLEDランタンが、キャンプ気分を引き立てる。　**02.**非常時にもサッと手に取れるよう、ランタンはD.I.Y.のペグボードへ。ペグボードの設置にはディアウォールを使用し、上部にOSB合板を組み合わせることでメリハリをプラス。　**03.**自宅でもキャンプでも活躍するコーヒーギア。なかでもお気に入りは「〈イヴァーク〉のキャニスターです。内部を真空状態に保つことができ、豆の鮮度を損ないません」。　**04.**エスプレッソマシンは〈エレクトロラックス〉、ケトルは1℃単位の温度調節が可能という〈ビタントニオ〉。　**05.**夫妻が住むのは築40年のマンション。キッチンは建築当時のままに昭和レトロの趣だが、利便性向上のためにラックを自作。こちらにもディアウォールを使用し、調味料やコーヒーグッズを並べている。　**06.**ペグボードに顔を出すのは、日常使いのアイテムと厳選のランタン。右のふたつはフェアハンドランタン。左は災害時の懐中電灯代わりにもなる〈ベアボーンズ・リビング〉のLEDランタンだ。　**07.**ヒロヤさんの作業スペースもLDKの一角に。デスクは『ヤフオク』で掘り出したユーズドだが、ギア好きが染み付いてのことか、屋内使用のデスクも折り畳み式。　**08.**照明は銅器を伝統工芸とする富山県のブランド〈モメンタムファクトリー　オリイ〉のプロダクト。

家族の生活に溶け込み、趣味さえも豊かにする“暮らし第一”のギア選び。

結婚を機に現在の暮らしをスタートさせたヒロヤさん＆マイコさん夫妻。子どもの誕生を視野に入れ、部屋探しの条件となったのが「家族がのびのびと暮らすことのできる広さと、収納スペースの多さ」だったという。

ヒロヤさんはキャンプ好き。ゆえに所有するギアも多く、独身時代に徹底していたのは〝見せる収納〟。ギアに囲まれる生活は心地いい一方、「子どもとの生活を考えれば、どうしても安全性に欠けると思って」。

そこで一気に方向転換。〝隠す収納〟を基本に、LDKに顔を出すのは厳選された数点のみ。ランタンもテーブルもコットも、白壁を基調としたシンプルな部屋と調和し、浮かない理由を尋ねると「文字どおり、暮らしとの調和ではないでしょうか。LDKに持ち込んだギアは、どれもが生活の一部。日常生活では使用機会のないランタンも、万が一の災害時には家族を守る道具になります」。

さらにヒロヤさんの言う暮らしとの調和とは、インテリアに溶け込むギアだけではない。ライフスタイルにも表れ、それがベランピングだ。

「子どもが生まれたばかりの今は、遠出のキャンプは現実的ではありません。それがベランピングなら、自宅にいながらキャンプ気分を味わえます」。そう話すヒロヤさんはD.I.Y.が大得意。ベランダのウッドデッキも手作りだが、デッキの基礎となる根太を張り、強度もしっかり。

「晴天の日は、ここでコーヒーを飲むのが定番です」。コーヒーを淹れるギアはキャンプにも持ち出され、インドアでもアウトドアでも活躍。趣味第一ではなく、暮らし第一のギア選びが、暮らしも趣味も豊かにする。

28

PROFILE

自営業
Kさん

SPEC

居住地域 ： 長野県諏訪郡
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 2LDK＋土間
居住年数 ： 8ヵ月
築年数 ： 8ヵ月

【取材協力】
One-craft HOME 木村工務店
http://sub.onecraft-k.com/

この家に引っ越してから最も変わったのが「室内での服装」と語ってくれたように、真冬でも室内ではほぼ半袖＋短パンというご主人。「薪ストーブは思っていた以上に温かく、エアコンの送風機能を使い暖気を回せば、2階までしっかり温まる」そう。

ご主人曰く「お邪魔した友人宅がとても魅力的だったので同じ工務店にオーダーしました」。収納やキッチン、水回りなどはあえて建具を中心にスッキリとした印象にまとめ、全体をとおして木のぬくもりを感じる、ゆったりとした空間作りを心がけた。

Photo ／ Chie Kushibiki Text ／ Takehiro Hakusui

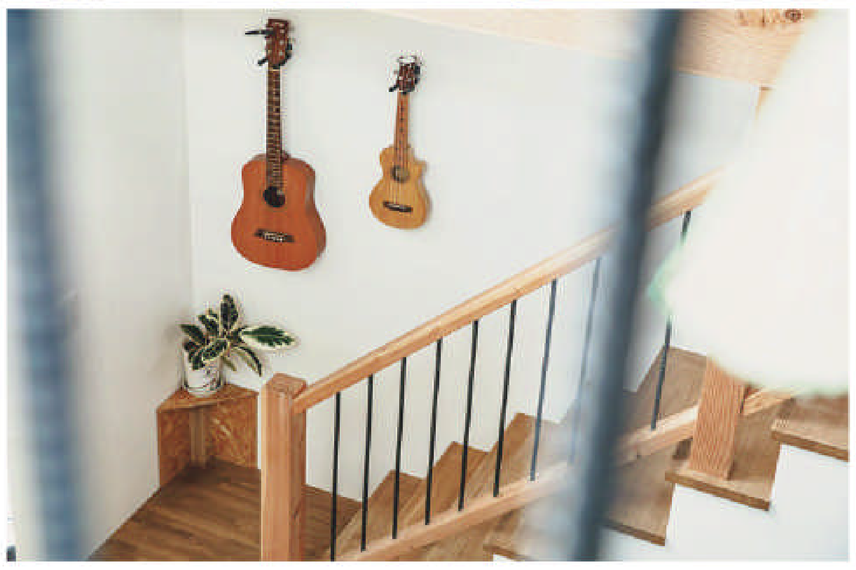
雄大な夜空と八ヶ岳を望む、２階のリビングがベストポジション。

長野県から山梨県へと南北に連なる八ヶ岳連峰の西側、諏訪地域に位置するKさんの住まいは、農家を営む奥様方のご実家にもほど近く、ご主人も数年前に脱サラし、現在はカーネーション栽培を生業にしているという。「もともと農業に興味があったので修行を兼ねて農園を営むことになったのですが、それなら仕事場に近い方がいいだろうと」。

約１２６平米という延床面積に、わずか３部屋というゆったりとした造りは、ご主人の強い希望でもあった。１階は玄関からシームレスに行き来できる土間スペースの壁面をはじめ、随所に木のぬくもりが感じられるインテリアのほか、２階の大窓からは雄大な八ヶ岳の山並みも一望できる。「施主が部分的に参加するハーフセルフビルドという施工形態でオーダーしたので、壁面の焼き杉などは教わりながらも自分で焼きました。職人さんたちの大変さが身にしみましたね（笑）」。

合わせてこだわったというのがシマトネリコをはじめとするグリーンの充実だ。「窓が多く日の当たる場所が多いので、自然と増えていきました。前の家ではグリーンの購入を我慢していたこともあり、解放された感じがあるのかも」と。

また、先にも触れた玄関と土間を繋ぐ動線にはストレージエリアが併設され、農作業で汚れたまま帰ってもすぐに着替えられるというメリットもあるという。「１階は生活動線、２階はくつろぎのスペースという位置づけです。特に窓から見える景色は季節や時間によってさまざまな表情に変わるので、飽きることがありません」と語ってくれた。



05	04	01
06		02
08	07	03

01.02.玄関から土間へと繋がるストレージエリアには仕事の道具やキャンプギアなどを一括収納。ここで作業着から家着へと着替え、暖かな土間に直行し暖を取ることができるという。　**03.**かつてはバックパッカーとしてインドや東南アジアを巡っていたご主人の趣味のひとつでもある楽器類。トラベルギターやウクレレはじめ、ハングドラムやカホンなど多くの楽器が見て取れた。　**04.**ダブルサイズのソファベッドを備え、くつろぎのスペースと位置づけた2階のリビング。東向きの大窓からは澄み切った夜空と八ヶ岳の雄大な山並みも一望できる。　**05.**2階にも小さなシンクがあり、「お茶を淹れたり、ちょっとした作業はわざわざ1階に降りないで済むように」設えたものとか。登山家でもある友人が撮影したという写真たちも各所で見られた。　**06.**ご主人の絶対条件でもあったという薪ストーブは、2016年度のグッドデザインアワードにも選出された国産ブランド、〈アグニ〉をセレクト。ログラックはご主人によるD.I.Y.。　**07.**外観はチャコールベースのシンプルでモダンなデザイン。庭の目隠し的に建てられたウッドフェンスも一部ご主人によるD.I.Y.。駐車場を挟んでピストバイクなどを収めたプレハブガレージも併設されていた。
08.寄せ木感覚で丸太をコラージュしたキッチンカウンターは、ログハウスを思わせる好意匠のひとつ。無垢材ならでは木のぬくもりを視覚的にも体現していた。

29

PROFILE

ラップスインターナショナル
ジェネラルマネージャー
福田博人 さん

SPEC

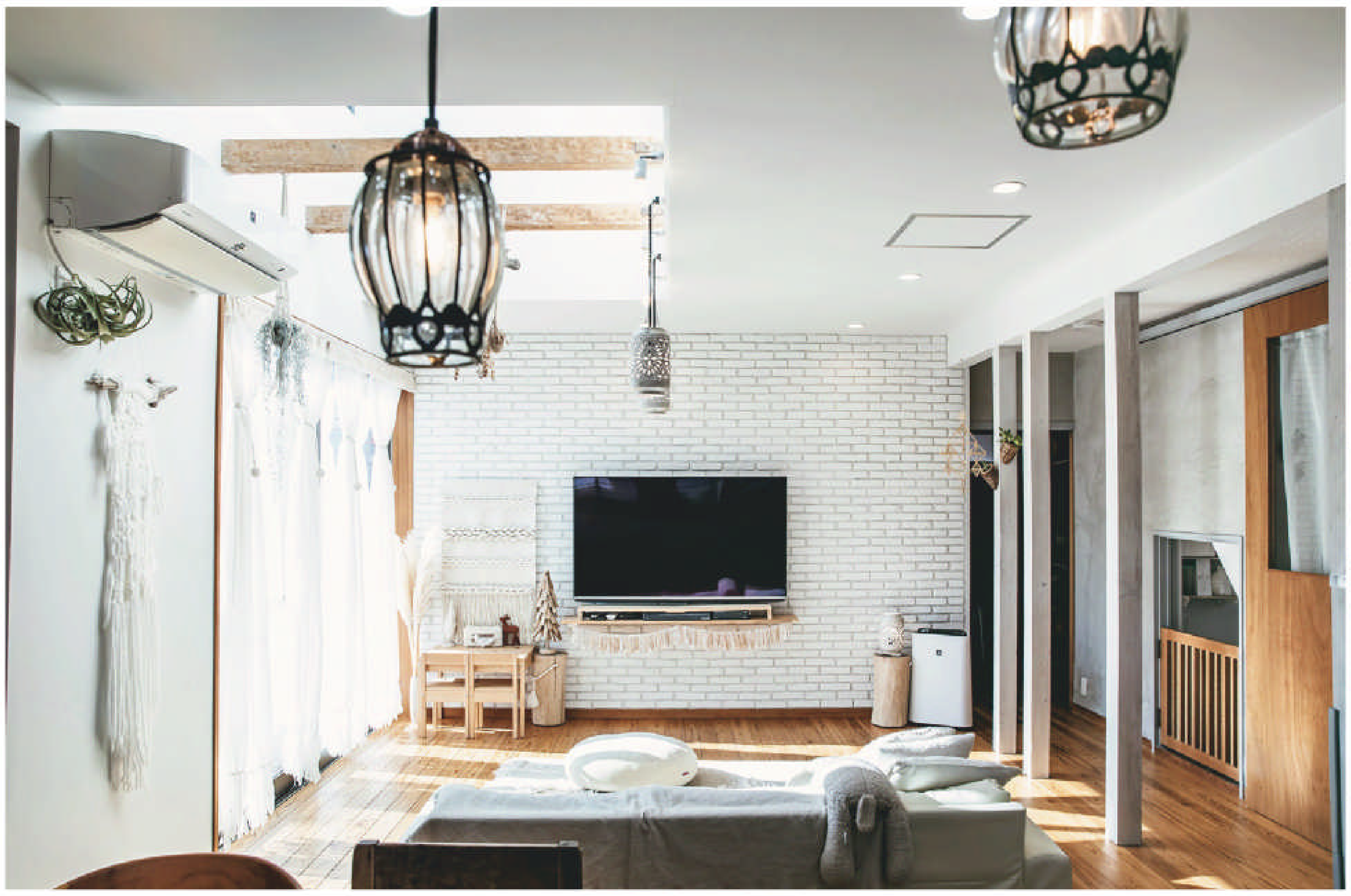
居住地域 ： 神奈川県三浦郡
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 2LDK
居住年数 ： 3年
築年数 ： 約35年

床に杉の無垢材を使うことにこだわり、ナチュラルで暖かい雰囲気を醸し出す室内。間仕切りの壁をほぼすべて取り払ったことで陽の光が通りやすくなり、明るく開放的な空間となった。ダイニングテーブルにも床と同じ無垢材を利用して統一感のある印象に。

お気に入りギアをディスプレイするために棚やハンガーを取り付けた。アウトドア好きという兄からもらった斧や、〈デバイスワークス〉のナイフ、〈カリタ〉のコーヒーグッズなどが並ぶ。奥のパントリーには商品として扱うバスケットを使いオーガナイズした。

05	04	01
06		02
08	07	03

01.一番のお気に入りと教えてくれたのがこちらのデッキ。家の背後にも繋がっており約30坪ほどの広さがある。家キャンプやD.I.Y.作業をしても余裕のスペース。もちろん正面に見えるテーブルとベンチも自作だ。　02.奥様が裁縫をしたり仕事をしたりするために設けたキッチン横のスペース。福田さんの父親の家でかつて使われていた一枚板を机の天板に使用している。　03.以前あった部屋の押し入れを子ども部屋に改造。中に板を貼り2×4材とディアウォールで柵を設置した。　04.インテリアの卸しを手掛ける仕事柄、世界各国を回っている福田さん。室内は雰囲気のある家具や雑貨類がそこかしこに。　05.玄関はもともとの広いスペースを活かし大容量の見せる収納をD.I.Y.。子ども用は下駄箱風に製作し、右側のラックは壁面側にディアウォールで柱を取り付け、L字の棚受けで棚を造作。　06.リビングは白を基調に考え、一面を白いタイル貼りとした。生活感を出さないように家具・雑貨類は最低限にし、床と同じく無垢材で揃えている。「家具に高さがあると開放感がなくなってしまうので、ソファーは低いものを選び子ども目線にしてあります」。　07.子どもが遊ぶスペースには収納ボックスを利用しつつ、その上に子ども用キッチンを造作。左側にも収納を作り、お絵かきできる扉を設置。　08.こちらもD.I.Y.したという子どもの用のイス。座面の下部分にはなんと花台を利用し、そこに背もたれを付けた。ガーデン用のチェアなどにも応用できそうなグッドアイデアだ。



フルリフォーム＋ D.I.Y. で、家族で過ごす時間をより豊かに。

閑静な住宅街が広がるエリアとして人気の高い葉山に、8年ほど前から住んでいた福田さん。家具や雑貨などのインテリアの輸入や企画販売を手掛け多忙な毎日を送っていたが、まだ小さい子どももいるため会社と自宅をひとつの場所にしたいとかねがね考えていたそう。条件に見合う場所を探すなかで、3階建てで会社のスペースも十分確保できるこちらの物件と出会った。購入にあたっては、昭和の面影を残していた造りをフルリフォーム。かつては細かい間仕切りのあるレイアウトだったが、家族がお互いの存在を感じやすいようにとほとんどの壁を取り払い、広がりのある空間を創出した。

お気に入りは、葉山では珍しいほどの面積を持つデッキ。昨年はコロナ禍の影響もあり家での時間が増えたが、BBQをしたり、テントを張ってキャンプをしたりと、家族でのおうち時間を過ごすのに大活躍。広々としたデッキのおかげで家にこもることなくアウトドアをエンジョイできたのだとか。また、室内の各所をD.I.Y.するための作業スペースとしてもフル活用。押入れを改造した秘密基地のような子ども部屋、玄関に設置された大容量の靴収納、そしてリビングのギアコーナーなども造作したと教えてくれた。

「パントリーなどを除いたら棚という棚を自分たちで作りました。家ができた当初と比べたらかなり変わったんじゃないかなと思います。D.I.Y.の楽しさは、サイズを測って木を切ったりしながら自分たちで作った、という感覚がそこにあること。子どもと一緒に作業することで、思い出も生まれるんですよね」。

30

本来は縦長ワンルームのスペースをD.I.Y.で設えたパーテーションで間仕切り、リビングとベッドルームの2ルーム仕様に。ウォールの腰位置とテーブル、ユーティリティラックの高さをジャストに合わせ、視覚的な効果まで見事に配慮したアイデアはさすが。

PROFILE

設計事務所スタッフ
山橋 努 さん
千晶 さん
たき ちゃん

SPEC

居住地域 ： 神奈川県川崎市
居住形態 ： マンション（賃貸）
間取り ： ワンルーム
居住年数 ： 5年
築年数 ： 5年

仕事で培った技術とアイデアが随所に見られる、D.I.Y.ルーム。

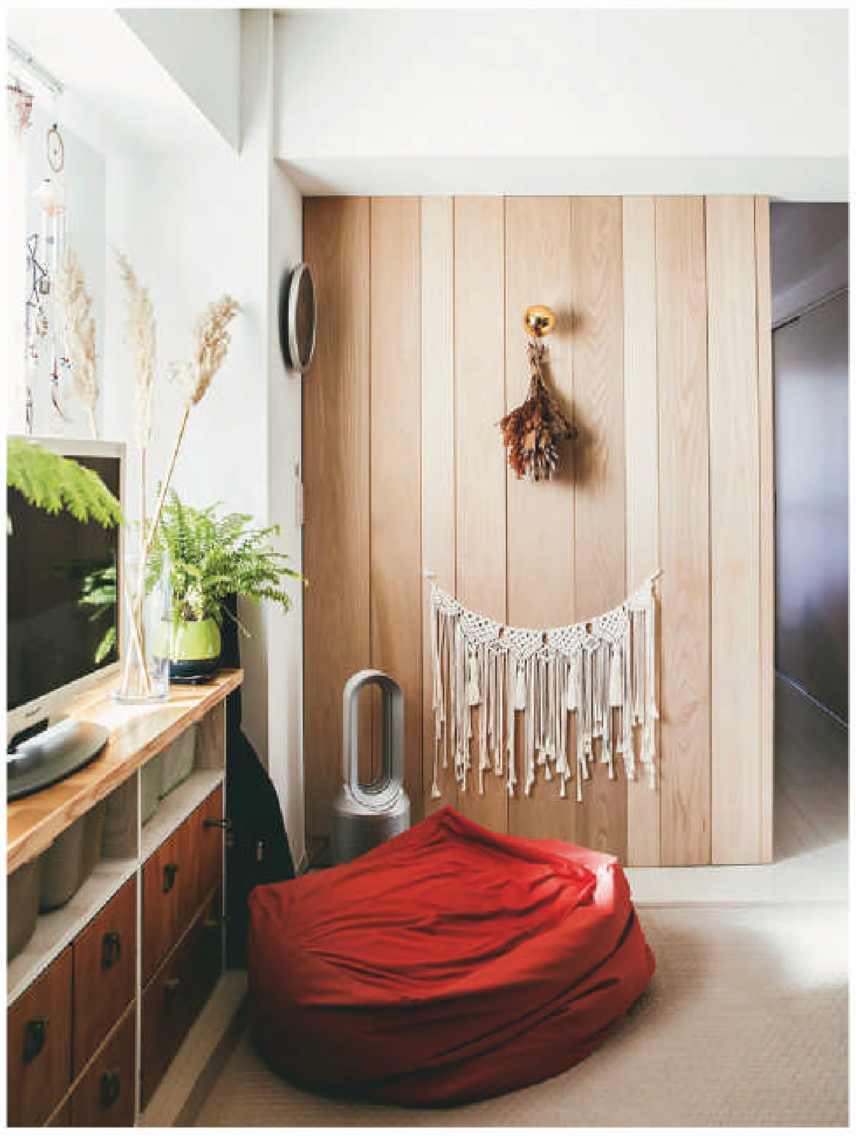
前職は建築関係、現職は設計事務所勤務と言わば空間のプロならでは、家具の多くはそんな経歴を持つ山橋さん（Instagram：@ya.ma_t）によるD.I.Y.。「子どもも生まれ、とにかく収納が足りなくて……」と語るように、壁面からワークスペース、はてはベッドの下まで、あらゆるデッドスペースを巧みに有効活用している。

なかでもひと際目を引くリビングスペースのウォールボードは、2×4材を支柱としてベニヤに自ら孔を開け、フレキシブルに利用できる有孔ボードへと仕上げたばかり。また、ワンルームを1LDKライクに使えるよう設えたパーティションにも、さすがの工夫が見て取れる。

「ベニヤで下地を組み、ネットで購入した化粧パネルを貼っただけの簡素なパーティションですが、ポイント的に灯りが欲しいと考えていたので裸のソケットにハーフミラーライトで間接照明を組んでみました」という。さらにリビングにあるテレビボードに併設されたユーティリティラックもD.I.Y.。完成図を事前にイメージできるのは、何よりのアドバンテージと言えるだろう。

「価格は安くとも素材感があるものが好み」というように、『ダルトン』で見つけたというブラス製のボックスノブなど、シンプルながらも決してチープな印象に陥ることのない細部までこだわったセレクトも見習うべきポイントのひとつだ。

「子どもも生まれてかなり手狭になってきたため、そろそろ引っ越しも視野に入れています」とはいうものの、多摩川から程近いのどかな風情を残した川崎エリアにはこだわりがあると語ってくれた。



05	04	01
06		02
08	07	03

01.06.2×4材の支柱に18パイの丸棒が入るよう加工したラワンベニヤで素材感豊かに仕上げたウォールボード。ソファの上に見える腰位置のラインは、ダイニングテーブルやテレビボードと高さを合わせて設定し、視覚的な統一感も図られている。　**02.**パーティションもD.I.Y.。図面を起こし、ホームセンターでカットした材をメインに、細かな部分はベランダで施工したとか。　**03.**「ご時世的にもリモートワークが中心ですし、ある程度は快適に仕事ができるスペースを目指しました」というパーティションの背面がご主人のワークスペース。ブックシェルフはD.I.Y.、ラックはステンレスユニットシェルフを活用している。　**04.**『ジャーナル スタンダード ファニチャー』で購入したというソファでも素材感豊かなコーデュロイをセレクト。〈コールマン〉のワゴンは、「ゆくゆくはキャンプでも使いたいと考えていますが、今現在はベビーベッドとして代用しています」とか。「実際に寝るのはベッドですが、ちょっと子どもから目を離す際の安全対策として使っています」。　**05.**ギターとベースは、中学からバンド活動をしていたという奥様とご主人の共通の趣味でもあるという。　**07.**ネットで購入したすのこベッドをベースに側面には収納スペースを拡張し、以前使っていたシングルマットレスをヘッドボードとして代用。　**08.**素材感のあるダイニングテーブルとチェアも『ジャーナル スタンダード ファニチャー』にて手に入れたもの。

SAN-EI
CORPORATION

好きなモノをキレイに片付けて、楽しく暮らす。

おしゃれな人たちの、収納術。

キャンプ道具にこだわり満載のキッチンギア、ついつい集めてしまう洋服。
趣味人の家はモノで溢れてしまうことが多いけど、シェルフやクローゼットに隠すだけはもったいない。
おしゃれインテリアを実践する先輩から“見せる収納術”を学んで、収納ベタを卒業しよう!

Photo／Chie Kushibiki、Nobuya Fuke、Yusuke Yarimizu　Text／GO OUT

洋服・小物の収納

こだわって買った洋服やシューズなどの小物類は、大事なコレクションのひとつ。クローゼットに寝かせておくより、思い切ってディスプレイを兼ねて収納するのもひとつの手。オープンラックに服を入れたり、空いているスペースを活用して吊るし収納したり。お気に入りのコレクションがインテリアのひとつになれば、毎日の服選びが更に楽しくなりそう。

CLOTHES 01

SEEKスタッフ
ゆりさん

丈夫なキャンバス生地の〈L.L.ビーン〉のトートバッグを収納ボックス代わりに活用。手袋や帽子、マフラーなどの小物や、サコッシュなどの小さなバッグ類をポンポン入れることができて便利!

CLOTHES

CLOTHES 02

NORDISK京都店 スタッフ
酒谷智史さん

増えてしまうキャップたちは、吊るし収納がベスト。カーテンレールを上手く活用し、細引きなどのロープをセット。引っ掛け部分はカラビナを使うことでアウトドアな雰囲気も完璧。

CLOTHES 03

OVERRIVERセールス／ PR
畠中将秀さん

オープンラックに洋服を並べるだけで、アパレルショップさながらの見せる収納が完成。色別、種類別に重ねるのがスッキリ見せるコツ。全種類が見えるので、無駄買いも防げそう。

CLOTHES 04

公務員
吉川靖浩さん

購入後すぐ捨ててしまう靴の箱は収納のため保管するのが吉。シューズラックに入れるのではなく、手頃な棚にボックスごと並べるだけで、立派なコレクションラックが完成する！

03

02

04

05

CLOTHES 05

OOVERRIVERセールス／ PR
畠中将秀さん

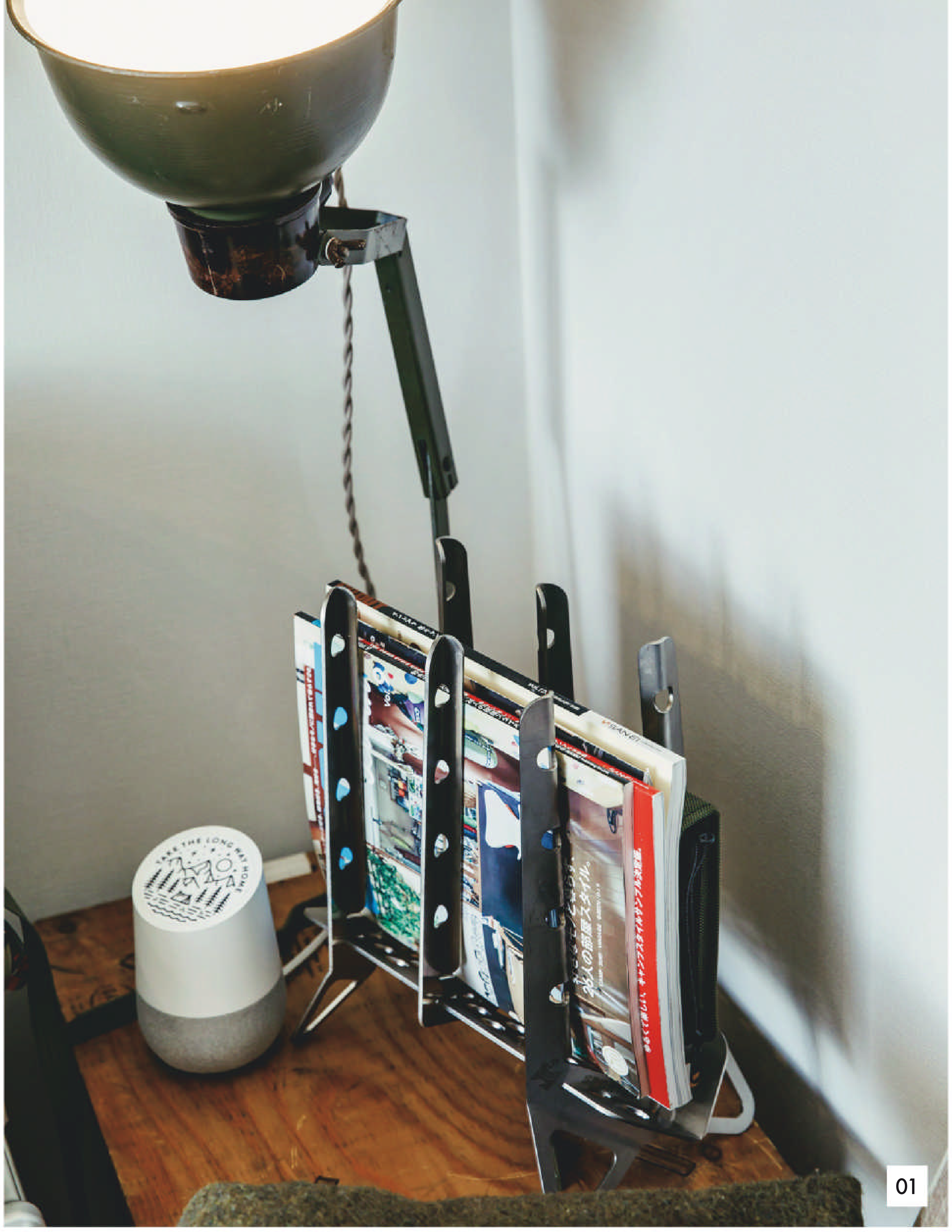
デッドスペースにデスク置き、テーブルトップにアクセサリーやサングラスなどの小物を、下にシューズ類をセット。靴は箱のまま重ねつつ、空いたスペースにそのまま靴を置くことも◎。

CLOTHES 06

SEEKスタッフ
ゆりさん

壁とオープンラックの隙間を上手に活用し、パイプをセット。S字フックを掛け大きさのあるバックパックを吊るしたアイデア収納。形崩れ防止にもなり、これはぜひ真似したい！

06



01

キャンプギアを活用した収納

置くだけでもサマになるキャンプギアは、外遊びに行けない時でも部屋の中で見せておきたくなりますよね。でもせっかく置くなら、収納としても活用したいところ。アイテムをそのまま使うのはもちろん、ちょっとひと工夫加えるだけで、オシャレなインテリアに様変わりするモノもたくさん。家の中にアウトドアな雰囲気がプラスされるのもメリットのひとつ。

CAMP GEAR 01　フリーライター / スタイリスト/デザイナー **秋元祐輝**さん

ブックスタンドに使っているのは、カナダ発のブランド、〈スポルテスアウトドアツール〉の焚き火台、ファイヤーウォール。高さのある形状をうまく利用し、雑誌の収納として流用するアイデア。

CAMP GEAR 02　アウトドアクリエーター **YURIE**さん

二軍入りしてしまったコットは、ギア収納ラックとして変身！　コット下にはボックスや燃料タンクなどの箱物を配置。上にはテントやブランケットなどを載せて棚下にできた隙間を有効活用中。

02

04

03

CAMP GEAR 03

会社員
teshi-lowさん

〈スノーピーク〉のシェルフコンテナは、シェルフ形状にして小説などの本をセット。2個重ねもできるが、ガレージブランドの天板を置き、リビングのサイドテーブルとして活躍させた。

CAMP GEAR 04

NORDISK京都店 スタッフ
酒谷智史さん

〈オレゴニアンキャンパー〉のゴミ箱は、インテリアを邪魔しないデザインが。手の届きやすいソファ脇に置けば動線もバッチリ。モール部分にはカラビナで小物を吊り下げ収納。

CAMP GEAR 05

トーガシ クリエイティブディレクター
小杉将史さん

リビングに置いた〈ヘリノックス〉のテーブルに、別売の収納ボックスをセット。家の中ではテレビやエアコンなどのリモコン類の収納として活用中だそう。生活感も目隠しできる。

05

キッチンの収納

調理道具にお気に入りの器にコーヒーギアと、とにかくモノで溢れてしまうのがキッチン。備え付けの収納に目隠ししてしまうのもいいけど、使い勝手を優先させて出して置きたいものも多いはず。さらに、賃貸住まいの人は決まった規格のキッチンでやりくりが必要なのも悩みの種。先輩たちのアイデアを盗んで、おしゃれキッチンを目指したいところ。

KITCHIN 01
BOOTSYORK.style インテリアスタイリスト
遠藤慎也さん

キッチン脇のコーヒーコーナーは窓際枠上に2×4材で棚を付け、天板に吊り式のバスケットで収納力をアップ。見せる収納では、コーナーごとにアイテムをまとめるのが整頓させて見えるコツだそう。

KITCHIN 02
アウトドアブランド勤務
YUKIさん

元がオープンラックというキッチンは、全て『無印良品』のバスケットやカゴで統一しスッキリ感を演出。見える部分にはトランクカーゴや飯ごうなどを並べ、アウトドアな雰囲気もプラスした。

KITCHIN 03

トーガシ クリエイティブディレクター
小杉将史さん

対面式キッチン上の蛍光灯の溝に突っ張り棒をセットし、使用回数の多いキッチンツールを吊り下げることで使い勝手を向上させた。奥はレンジフードにS字フックを引っ掛けている。

KITCHIN 04

ラップスインターナショナル
ジェネラルマネージャー
福田博人さん

ごちゃつきがちなパントリーは、同じバスケットを整然と並べスッキリ見せる。食材のストックや調味料、洗剤の詰め替えといった、細々したものを気にせず収納できるのもメリット。

KITCHIN 05

フリーライター / スタイリスト/デザイナー
秋元祐輝さん

キッチンスペースには、家でも使えるキャプ用の調理道具もセット。特に〈ナルゲン〉のボトルは米や調味料といった食材のストックにも便利。キャンプ当日はそのまま持ち出すだけ！

01

02

コンテナの収納

テントといった大型アイテムもすっぽり収まり、雨風にも強く頑丈なコンテナは、そのまま持ち出せるため、外遊び派の収納として欠かせないアイテム。でも、賃貸の小さなクローゼットには、大きさのあるコンテナを複数個も収めるのは難しい問題。それならオシャレ部屋に住む先輩たちは、家の中でどうやってコンテナを活用しているのか、実際にチェック!

CONTAINER 01
フリーライター / スタイリスト/デザイナー
秋元祐輝さん

室内に置いた〈ロゴス〉のベンチ下は〈スノーピーク〉のシェルフコンテナがピッタリサイズ。ベンチカバーが目隠しになっているので、火器類や燃料類入れそのままキャンプへ持ち出すそう。

CONTAINER 02
OVERRIVERセールス／ PR
畠中将秀さん

寝室にあるラック下には、種類の異なるオリーブドラブで揃えたコンテナを並べ、趣味のギアなどを収納した。高さも揃っているので、上にはバッグ類を置くスペースとしても活用している。

CONTAINER 03 SEEKスタッフ
ゆりさん

汚れや水に強いブリキのコンテナは、玄関先の土間に配置。観葉植物の台として使っているが、無機質なデザインはインテリアの邪魔をしないため、ディスプレイとして一役買っている。

CONTAINER 04 ファッションプロダクトコンサルタント
田口 Jackie 岳佳さん

田口さんの祖父が使っていたというトタンのコンテナは、室内に設けたシューズラックの下が定位置。中には季節ものの洋服を入れているそう。トタン素材は軽くて丈夫なのも使い勝手◎。

CONTAINER 05 フリーライター / スタイリスト/デザイナー
秋元祐輝さん

オープンラック中段にある軍モノのコンテナは、見せてもかっこいいデザイン。大きさやパッケージの異なるギアをまとめて入れ、ゴチャつくキャンプ道具をスッキリまとめた好例のひとつ。

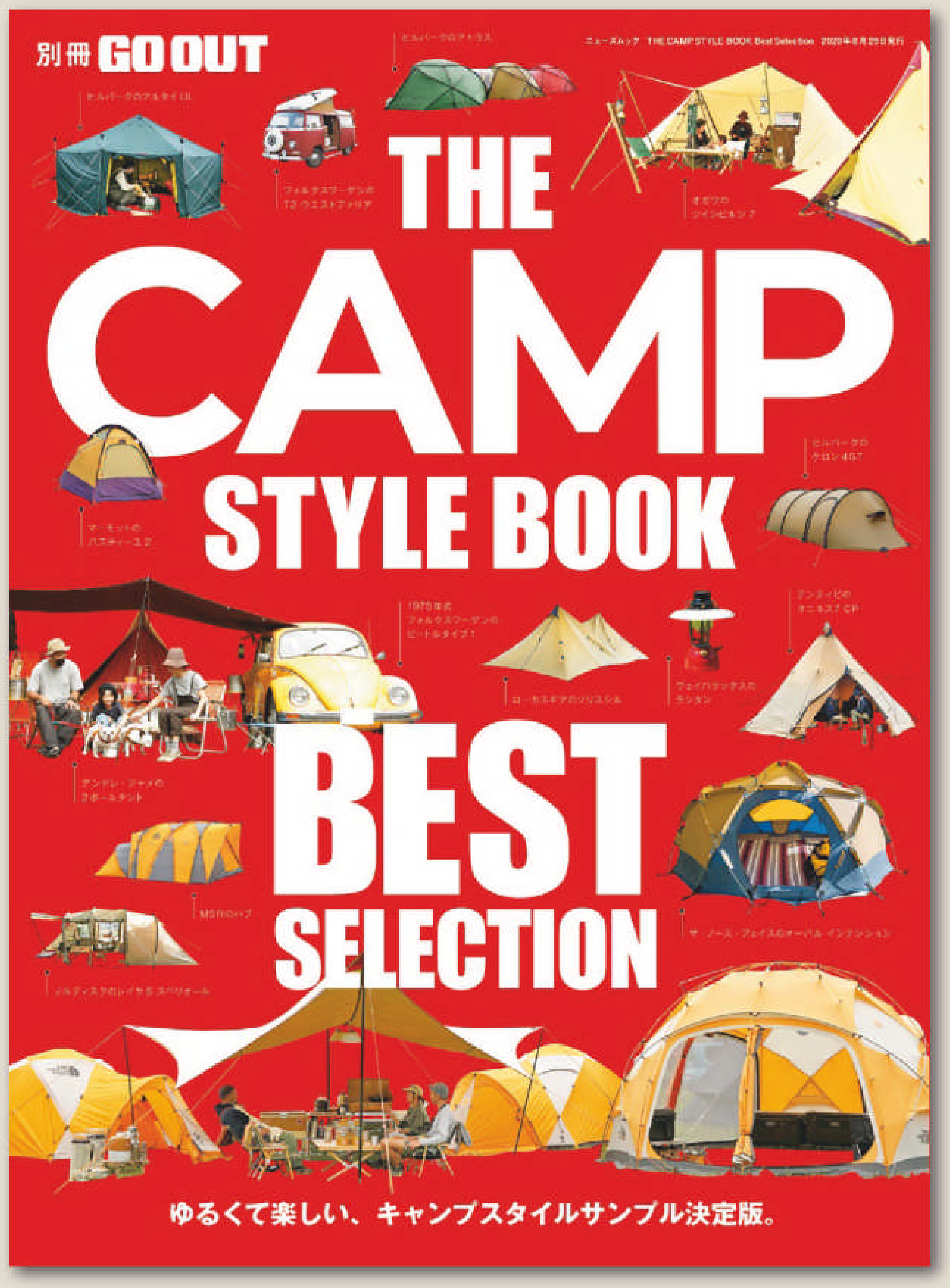
03

05

04

SAN-EI
CORPORATION

別冊ゴーアウトシリーズ、大好評発売中です!!



おしゃれで、ゆるくて楽しい!
キャンプスタイルサンプルの総集編!!

contents

ロケーション1（キャンプイベント）

DOME CAMP、GO OUT JAMBOREE、OUTING CAMP、YES GOOD MARKET
GO OUT CAMP 猪苗代、TINY GARDEN FESTIVAL、GO OUT CAMP

ロケーション2（キャンプサイト）

西湖キャンプ・ヴィレッジ「ノーム」、西湖自由キャンプ場
精進湖キャンピングBOCH a camp by campers、本栖レークサイドキャンプ場
山伏オートキャンプ場、浪漫の森キャンプ場

キャンプ好きたちの、クルマ拝見。

カッコよし! 機能よし! な、キャンプの愛車たち。

別冊GO OUT
THE CAMP STYLE BOOK Best Selection
定価：本体1000円＋税

おしゃれキャンパーたちの
キャンプなクルマにフォーカス!!

contents

過去にスナップで出会った、
ゴーアウト的カッコいいクルマを一挙にご紹介。

キャンパーにとって、クルマは単なる移動するための手段ではとどまらず、オーナーのこだわりが詰まった大事なギアのひとつ。ギアをたくさん載せたい、機能面やサイズ、運転のしやすさが大事など、キャンプサイトの数だけ、クルマ選びのポイントも違います。

おしゃれキャンパーたちの愛車スタイルは、
なんと驚きの全117台を掲載。

キャンプスタイルと同様、カスタムしたり、オフロードを走ったり、車中泊したりと、外遊び派にとってギアでもあるクルマのスタイルは、オーナーによってさまざま。愛車を通してジブンの趣向を表現できるのもクルマの良さのひとつ。

別冊GO OUT
THE CAMP STYLE BOOK vol.15
定価：本体1000円＋税

三栄 SAN-EI CORPORATION
販売部 TEL03-6897-4611（受付時間／平日10:00〜17:30） 〒160-8461 東京都新宿区新宿6-27-30 新宿イーストサイドスクエア7F www.sun-a.com/

Editor in chief
Takuro Seki

Editor
Masashi Echigo（RIDE MEDIA&DESIGN inc.）
Shiyori Kawamura（RIDE MEDIA&DESIGN inc.）

Advertising staff
Tomoaki Suzuki
Gakuji Onozato
Mamoru Takahashi
Yasuyuki Abe
Hiroaki Takahashi
Yui Okutani
Kotoe Nakahata
Moe Noguchi
Tomohiro Ohta
Masafumi Takahashi

Designer
Daisuke Takeuchi
Masato Nakayama（forlife.design）

Producer
Mitsuru Takeshita

Creative Director
Osaka Umeda（60MW）

web.goout.jp

GO OUTの公式ウェブサイト、毎日更新中!!
公式SNSも絶賛稼働中です。

公式Facebook
GO OUT Magazine
GO OUT Online
GO OUT CAMP

公式twitter
@GOOUTmagazine
@goout_onlie
@goout_camp

公式Instagram
@gooutjpn
@gooutonline

ニューズムック
GO OUT Livin' Vol.15
2021年3月11日発行

発行人：星野 邦久
編集人：関 拓朗
印刷所：図書印刷株式会社
発行所：株式会社三栄
〒160-8461 東京都新宿区新宿6-27-30 新宿イーストサイドスクエア7F
広告 tel：03-6897-4622
編集 tel：03-6303-1609（ロ クマルマガジンワークス）
受注センター tel：048-988-6011 fax：048-988-7651
販売 tel：03-6897-4611

定価：本体1000円＋税

■本誌掲載記事・写真などの無断掲載、複写を禁じます。

SAN-EI
CORPORATION

ニューズムック　GO OUT Livin' Vol.15　2021年3月11日発行
発行人：星野 邦久　編集人：関 拓朗　発行所：株式会社三栄　〒160-8461 東京都新宿区新宿6-27-30 新宿イーストサイドスクエア7F　広告 TEL03-6897-4622　受注センター TEL048-988-6011　FAX048-988-7651　販売 TEL03-6897-4611

9784779643231

定価：本体1000円＋税

1929476010001

雑誌 66730-18
SAN-EI CORPORATION
PRINTED IN JAPAN 図書印刷

ISBN 978-4-7796-4323-1 C9476 ¥1000E